

叛旗

7 DEC. 1972

時間と関係の弁証法＝神津 陽 / 5

—権力⇄党～階級の生成と死滅—

われら過渡期の途上にて＝三上 治 / 63

—国家・戦争・革命への序—

組織建設の総括と展望＝共産同組織委 / 105

共産主義者同盟
理論機関誌

叛旗
七号

▲ 総目次 ▼

■ 第一論文

時間と関係の弁証法

— 権力↑党↓階級の生成と死滅 —

I 階級闘争の現段階	6	II 革命組織の位相と規準	33
一、主体的後退戦下の存在攻防局面	6	一、政治↑社会闘争の基本性格	33
イ、現況の把握について		イ、個↑対↓共同性↑共同性↑共同体逆倒と二重化	
ロ、情勢の急旋回と焦点の拡散		ロ、国家↑社会との激突の四側面	
ハ、存在攻防と政治革命の質		ハ、革命組織の政治的任務	
二、△戦後▽秩序解体と世界革命運動の反省	14	二、革命組織の位置と限定	41
イ、政治、経済、軍事再編と支配の危機		イ、政治集団と社会集団の位相	
ロ、既成革命観の解体		ロ、革命組織の自覚的根拠	
ハ、オプチミスト諸派へ与う		ハ、規範↑規律と綱領↑戦略	
三、革命の現実性↑求心点の所在	24	三、政治集団と規律	50
イ、歴史↑世界了解の新視角		イ、個と政治集団	
ロ、時間と関係の弁証法の提議		ロ、対↑生活域と政治集団	
ハ、「綱領↑戦略」論の豊富化		ハ、社会集団と政治集団	

四、組織路線の検討

■ 第二論文

われら過渡期の途上にて

— 国家・戦争・革命への序 —

I 情況の根柢と対峙する照準		II 国家↑社会編成と戒命の現実性	
戦闘への視座	68	共同体と戦争・革命	78

■ 第三論文

組織建設の総括と展望

第一章 同盟の歩みと組織的諸問題	105	第一節 共青↑反帝戦線の組織的位相への視座	
第一節 組織問題への実践的視座		第二節 △意識化系列▽と組織性	
第二節 組織的総括への前提		第三節 自立的契機としての「地区」	
「階級形成」としての		第四節 組織性と規律↑倫理の位相	
△党↑軍↑統一戦線▽		第三章 「存在」攻防勝利への主体・組織の飛躍	138
第三節 組織問題に於ける		第一節 戦略の変容過程と「かくめい」への契機のかぐとく	
われわれの立脚点とその現段階		第二節 「存在」攻防としての獄中	
第二章 「党↑大衆論」の止揚と政治組織の自立	116	—— 裁判闘争の位相	

時間と関係の弁証法

— 権力↕党↕階級の生成と死滅 —

神津 陽

はじめに

69年以降の、とりわけ72年に集中した米中会談、日中国交回復、ベトナム和平会談の進捗、両独協定仮調印等は支配層の全世界的規模での政治、経済、軍事再編の泥沼的集約であり、いわば自ら形創ってきた△戦後▽世界・社会秩序の解体宣言である。このことは、世界各国の大衆の価値意識、現況把握としては既に明瞭であった△戦後▽の解体を、余儀なく世界のリーダーブロックの支配層が追認したに過ぎぬが、重要なことは誰も次の時代は何かを予知していないという点にある。田中角栄が周恩来と握手し「君ガ代」が流れることに異和感を覚えたのは支配層と戦中戦前世代と心情左翼たち

であり、圧倒的大衆はパンダブームや、富士山を見て落涙した岡田嘉子と等価にそれを受容したのであり、その典型的表象として横井庄一氏の28年振りの帰国とスピード結婚が存したのである。

大衆にとっては自明であり、我々が68年昂揚↕69年敗北過程で見透していた△戦後▽の解体は、大衆が形成し、持続している時間、空間の累積度に照準をあてて世なおしの根拠と経路を掘り起こすことを、次の時代への予料をこそ要求している。私は本稿ではそのことへ、迂回路のようであるが、権力、党、階級の動態把握と、革命の現実性の所在の鮮明から漸近せんと試みた。

生活を引きつりつつこの間政治運動に携ってきた私は、△戦後▽の解体を感知しながら納得しようと思わず、神話にすが

りついたり、回帰したりする連中の跋扈に反吐が出るような嫌悪感を覚えてきた。このような連中は、結局の所マスコミ、ジャーナリズムの水準で政治を扱っているコンプレックスのかたまりの坊ちゃん新左翼のしゅみの会か、政治運動を生活運動にすりかえ既成左翼へ転落し安住する位がオチであるし、どころんでも彼等是要領よく世渡りしてゆき続けるに違いないのである。

私はそれ故本稿では、総括や反省や自己批判と称して一年毎に革命理論の主調を転変させたり、またマルクス、レーニン、毛沢東等の文言の紹介、宣伝に専念している部分等に「戦後」の解体の意味を、つまりは世界や社会や大衆はずーと先の方を歩んでいるのだという事を知らしめる共通の基礎経験と理論の検討から始め、革命運動の現実性は奈辺にあるかを提議し、次に我々が当面為さねばならぬ権力、階級との関連で政治組織の位相と規準を解明し「組織にとっての組織問題」に触れてゆくこととした。

現今、大衆は国家から自らを引き離そうとしており、支配層はそれを利しつつ自由国家を看板に掲げざるを得ないが、大半の「左翼」の理念は毛沢東を典型として宗教国家に留まっていることに我々は大いに遺憾である。そして、その時点からの反撃と再編成であるから、我々の言う綱領「戦略論争

きに圧倒されつつも、階級闘争と左翼戦線の再編方途を72年と75年を射程として展望した。我々の考えでは68・11・71・69・4・28ではほぼ黒白をつけられた権力闘争の敗北は、政治的かつ軍事的敗北であり、この局面を組織「団結根拠にまで下って総括せんとしつつも為し切れず、不充分さをはらみつつも全力投入して階級課題に応えんとしたものととして秋期決戦は在ったのである。そして米帝を主軸とした世界基調の開発路線への移行と、米帝と政治（軍事）と経済を分担しつつも東南アジア権益確保、安定の為、反革命軍事外交路線に執着せざるを得ぬ日帝の、相互矛盾表現である69年日米共同声明に示された72年沖繩返還こそ、新たな民族「国家問題を軸にしての支配層と我々との階級攻防の環であり、試金石をなすと扱えたのだ。

我々は69年後の後退戦を、72年を結節点とするブルジョワジーの攻勢転換に陣容を建て直しつつ対峙し、75年をメドにこちら側からの反攻へ階級攻防を推し上げんと路線を敷いた。それは主体的には党派の戦国時代を、内ゲバ応酬と野合で乗り切るのではなくて、綱領「戦略論争自体の枠組みを拡げ、その自体的内容の相互浸透により再編せんとするものであった。△国家「市民社会」△構造、△民族「世界」△空間を止揚しうる原基は何かにまず着目すること、そこから現代革命の核

の道程ははるかに遠いと言わねばならない。更にそのレベルで政治域内でそして他域と思想、理論が拮抗するに至らねば、また思想が現実をつかみ取る迄に至らねば、△かくめい△へ政治運動が到りつくことはない。これは階級闘争の歴史から我々がすくいと取った核心であり、現下の世界情況がよく証明する所である。

我々は身に余る荷を負い、闘い、歩みつつけるであろうが、今は課題の喪失を嘆く諸般の空想家や現実屋とは逆に、願わくばもう少し時間をと要求したい位の心持である。

I 階級闘争の現段階

一、主体的後退戦下の存在攻防局面

イ、現況の把握について

①現代過渡期世界における革命運動の中心問題は何か、革命組織は何を準備し、何に回答せねばならぬのか。様々の迂路を辿ってであれ政治組織における総括と展望はその領域に集約されねばならない。我々はどのようにそれに答えようとしたのだろうか。

69年秋期安保決戦の敗北局面で、我々はその敗北の根深か心を把み出すことこそが、政治党派の現在の任務であり、規準をもなすと判断したのである。

②さて、階級攻防局面は如何に推移し、どの地点に到達しているか。69年以降の後退戦は克服しているか、否である。では支配層は更に強力に攻勢を持続しているのか、これも又否である。

69年敗北は軍事的敗北として如何に克服されんとしたか。それは赤軍派の前段階烽火起「国際根拠地」P・B・M作戦の諸結果として、連合赤軍の浅間山荘攻防とテルアビブ決起を導いた。だがこれは軍事を科学や技術として扱う限り武器対抗論と軍事過程論を、敗北の拒否が更なる敗北を結果するといふ局面を越えることができず、更により根底的には軍事を暴力の階級性、共同性の側から扱えない、つまりはブルジョワ国家、軍隊を解体する根拠を自らの形成核へとりこめなしいという限定により、最も極端に「新左翼」の軍事水準をさし示しつつ敗北を克服しえなかった。我々は、無論主体的に関わった三里塚東峰十字路闘争の側をより高く評価するが、これも連合赤軍と相補的に軍事の階級性をいまだ掌中には収めきれないものである。

③69年敗北は政治的敗北として如何に克服されんとしたか。それはまず、階級闘争の暴力的対峙局面に導かれて、世界

革命戦争への全戦線の闘いの意識的集約こそが重要であるという小結論を導いた。他方では八派の全共闘―反戦運動への政治的ヘゲモニーの解体の上に69年丸裸武装は存したのであり、大衆武装闘争への政治的指導力の復権によってのみ権力闘争の時代としての70年代は切り拓きうるという小結論が導かれた。

我々は前者が、理論戦線派の叛軍一元化路線と72年に至つての坊主ざんげ的撤回を象徴としての、旧ブント系諸雑派（仏、烽火、RG、怒涛等）の軍事へ行ききれない理由づけとしての政治的ブレイキと、世界革命戦争宣伝を党の強化とすりかえる観念論として破綻し、後者がノンセクト・セクトの政治代表部としての任務も果せずに全共闘運動の崩壊と共に政治の持続の根拠を見失ない溶解した事を知っている。

④だが、もっとも考慮せねばならぬのは69年以降の後退戦の主体的領域、団結の質としての側面である。我々は69年秋期決戦の敗北を、街頭武装闘争、中央権力闘争としての69・4・28敗北と全共闘、反戦の大衆実力闘争、社会拠点闘争としての69・1・19東大敗北の結果として、二重に把握した。我々は両者の諸結果としての69年敗北に学び、主体的突破の環を「八派―全共闘」止揚においた。そこでは党派が武装の不充分性を党の軍隊強化として補完せんとする自足的円環に

い出せぬ故に、ブルジョワジーの攻撃の多様化に敗退したのである。前述の政治闘争―経済闘争円環の外にある、民族―国家編成と開発路線に関わる新たな諸課題への取り組みの不備は、結局の所八派―全共闘への回答不能として重なる敗北を結果した。沖繩は、我々が主張してきた様に、砂川や三里塚と同じく、戦略域での新たな質の国家―民族問題への踏み込みを問うたと共に、より重く政治集団と階級、国民と民族の接点と両者の、プロ独へ向けた統合軸を問うていたのである。

これらへの未回答にも拘らず、一対一的なブルジョワジーに情勢を規定されての反応、空間的対応の継続こそ、我々が言ってきた主体的後退戦という現情況把握なのである。我々はこの負荷をプラスに、革命の現実性を八時間Vに根拠づけ転化させんと考える。

ロ、情勢の急旋回と焦点の拡散

①階級闘争は、現象的にも本質的にも動的攻防過程であるから、我々の実体組織の側が沈思し、あれこれ組織いじりを考えていると否とに拘らず、自生し予期せぬ形にまで発展する。我々はその局面を、階級闘争の中と深さにおいて主導しておらず、苦悶の行程であれブルジョワジーの側が情勢のキイ・ポイントを握っている事を指適してきた。ここで、国家

回帰するか、宣伝路線の党の強化に自己限定するかの、誰にも透視しうる後退戦の反動過程に対し、より全共闘運動の質を政治的に評価、内化するという側面に力点が置かれていた。70年代に入り、旧来の政策反対闘争―職場、学園闘争というワンセットの領域をはみ出す、入管、叛軍、部落、女性解放、公害闘争等が花開いた。だがこれらに対しして新左翼は、情勢分析の領域の拡大と、スローガン補充で応えんとしたとあってよい。中核派の入管闘争以降の自己批判の乱発や、解放派の沖共闘における併列スローガン化傾向等がそれである。だが、全共闘運動が有していた党派の戦略内容を媒介にしての結集でもなく、職場、学園矛盾の直接発現でもない、我々が言う所の社会闘争性格故の昂揚をこれらの諸傾向は、清算し、無視しようとし、結局の所、居心地のよい古巣へ「党―大衆」の洞穴に回帰したのである。上げ底化された見学連、ノンセクト・セクトが八派に行けぬ知的大衆、あるいは第九派を目指す擬似八派としてこれら諸党派を補完した事については多く他の所で触れてきた。

古典的な「党―大衆」関係は、政治集団における党―活動家集団―大衆組織系列においても、社会集団との間での政治主義―組合主義対立にしても、結局の所自らの党的団結や組合的団結を異種共同体や包括的共同体と連関させる方途を見ない。市民社会の共同性―共同体自体が崩壊過程に入ったブルジョワジーの焦点なき世界―社会再編劇を検討しておこう。69年以降の、とりわけ71年ニクソン二大声明以降の支配者共の動向は八派後Vそのものを根底から解体せしめると共に、それらは旧来の新、旧左翼の対抗的に伝統化された革命路線の根拠をも変質させるものであるからだ。

②我々は過渡期世界の成立を、国家―市民社会の等質的成熟におき、その危機の根拠を自己の爛熟が即ち崩壊への地獄の道に致るといふ国家―市民社会、双方の統合力の不可避的喪失においた。68年段階での、全世界的な擬制的両体制対峙と別の箇所で成立した革命運動の昂揚、先進国内部でのフランス五月革命や、米黑人暴動や、西独非常事態法粉砕闘争や、後進諸国のベトナムテト攻勢と革命戦争の全インドシナ半島の展開、「社会主義」圏のハンガリー、チェコでの反ソ運動の開示、中国文革の全面化過程で、それらの積極的評価と対象的限定性をこそ我々は問題にしたのである。その点で日本での10・8以降の街頭武装闘争の昂揚と、全共闘運動、職場小教組合運動との結合の必要性とその根拠を問うた我々と、前者を世界革命運動の一環と関連づけんとした赤軍派等と、後者を政治化されるべきものとしてあわてて評価せんとした理戦派等との対質は明瞭であった。68年昂揚がベトナムを唯

一の例外として、全世界的にも日本においても、69年後退へ到る局面は、我々の考えでは赤軍系や関西系の労働者国家を根拠地として根づかせない先進国武装闘争の不充分性指適や、正しい党がなかったからと後から理由づける理戦や、党派統一戦線が解体しトータルな大衆指導が失落したとする構改系や情況派的傾向とは別の所に真因を有していたと考える。国家―市民社会の統合性の解体を感知しながらも、ブルジョワ共はそれを国内階級再編と、世界間交通の擬制により、危機を先へ繰り延べせんとしており、この支配層からの新攻勢をトータルに了解しえず、彼らが克服せんとする古い質へ激突するに止まった故に、69年敗北は準備されていたのだ。

③支配層の69年以降の新攻勢とは何か、それはどのように貫徹されているか。我々は旧来の伝統的な『帝国主義論』にのみ立脚しての、中核の岩田式経済一元化、流通主義の侵略―危機転化論も、労働者国家存在故の根拠地国家に対する諸政治的革新同盟論の政治主義も、両者を帝国主義の侵略と反革命の不統一こそ危機だとして統合せんとした一向理論でも、世界をトータルに了解し、支配層の攻勢の質を把握する原基たりえないと考えた。それらは全て、両体制併立の擬制を前提にし、その上で帝国主義の先進国―後進国関係での貫徹を一般的に強調したり、労働者国家存在、社会主義体制成

で行なっているソ連の修正主義から社会帝国主義への転化批判で片附けられうる問題ではなく中国自身の足下にもぼつかりと穴の空いている国家―市民社会の編成強化と、民族―世界V併存空間への誘惑である。

我々はそれ故にこそ、従来の片目ダルマの帝国主義の侵略―反革命攻勢把握でなくて、一国家―世界関係を基とした支配層の開発路線と軍事外交路線の相乗的展開をこそ70年代基調として見透さんとしたのである。

④全世界を構造的にトータルに把握する方法は国家―市民社会Vであり、それを補完するのは民族―世界V空間連関である。いまだにどのような「社会主義」国も、プロ独過程を経たとし、人民共和国や社会主義連邦の名を自らに冠し、社会主義段階や共産主義段階を名乗ろうとも、いまだに国家―市民社会V編成を突破する政治―社会構成を形成していず、それらのブルジョワ的編成に対する同一構造内での異質な共同体の編成をなしているに過ぎぬ事実認識と、世界革命過程でこれらの諸国の負う特殊な任務を了解し我々が帝国主義国の反革命攻勢を阻止せんと闘う事とは、全く別の領域の事柄である。

世界のなかんずく先進諸国の中心矛盾は、経済過程では過剰資本、過剰生産、過剰信用処理問題に吸引されつつも、よ

立に規定された帝国主義の付加性格を問うてにすぎないのである。例えば労働者国家の経済構造をアウタルキー化して理戦(8号論文)風に二元論へ転落するか、中核、岩田風に見ないふりをしてにすぎず、また青解の反革命階級同盟論は、国家形態を媒介としての政治同盟階級同盟としての把握の誤りとはともかく、社会主義陣営内の、あるいは両体制を横断しての政治、経営協力構造へ一指も触れえぬのである。イデオロギーを規準にしての両体制把握は小インテリの心情的希望か先験的革命的革命観の受容にしか過ぎぬ故に、何が「社会主義」圏を強化するのかを政治的支持や宣伝以上に明らかにしえず、逆にその不充分さが国家―市民社会の世界史的等質的爛熟過程へのめり込みとその正当化を防ぎえなかつたといえるのである。このような擬制の八戦後V体制論が、米帝を主導とする帝国主義の側のロストウ『経済成長の諸段階』に代表される発展段階論に事実として組み込まれている事をこそ見ねばならない。もちろん近代化論に生産力理論のプラグマチズムにサイバネティクスの対置が同一土俵内での米国に対するソ連の対抗理論であり、ソ連はそれへの専念と強大な軍事開発投資によって確実に革命ロシアの共同性の組み方を、西欧的国家―市民社会成熟様式に侵され、それをこそ是としているのだ。これは中国が舌足らずに不十分な論証

り根拠的にはそれらの処理を可能ならしめる国家―市民社会の統合力の解体に求められる。これは単純に「社会主義」圏が成立し東風が西風を圧する故の諸結果というよりも、「社会主義」圏をも包摂して国家間連合を形成し、IMF・GATT体制でそれらを圧迫し、核掌握と米帝主導の反革命政治的軍事同盟で限定せんとした戦後世界秩序総体にその根拠を持つていたといえる。国家興隆期の帝国主義の、レーニンの言う明瞭な態度をもった帝国主義の経済衝動に基づく経済侵略―植民地領有と、世界市場分割―再分割戦争の必然性は、その明瞭な帝国主義の態度そのものがかすんでくる国家―市民社会の爛熟期にあって以下に変容している。

⑤支配層は、国家―市民社会の統括性の解体を二つの方途で押し止めようとしている。そのひとつは社会経済開発路線であり、他のひとつは軍事外交路線であるが、我々がこれらを検討するにあたって予じめ了解しておかねばならぬのは民族Vと八世界Vの相補性である。経済社会開発路線は何よりも国民統合力の喪失を階級統合力の再編、強化として補充せんとする。つまり階級統合力の低下を、貨幣、商品、所有量拡大、つまり賃金環元率の高度化による、徹底した既成階級の個への分化と、個の集合としての併存保障によって階級再編せんとするものである。が、これは逆に消費社会の余剰

△時間△処理の壁、一国的国土、人的物的資源の計画的利用と、私的生産手段所有との矛盾につき当っている。開発路線は、国家―市民社会の等質的成熟のしほり、国家―市民社会の民族的編成の差異性を探索し、いわばのつべらぼうの市民社会の世界的併存と世界大での計画経済を目指しているといつてよい。無論開発路線は、現代世界においては戦略核の独占保有に裏打ちされており、米帝とソ連しか国家基調としては展開しえない局面にある。

軍事外交路線は国民―階級統合力の喪失を民族的統合力へのすりかえと、強調として為さんとするものであり、国家―市民社会の成熟過程が構造的に含んでいるが、経済基盤特に原資源、技術水準、労働力獲得において弱点を持ち、それ故に賃金水準、国民所得の低劣さ、階級矛盾を国家表現へ統合可能な諸国家の唯一の防衛―進取策である。米以外の先進諸国は開発路線への転化を自論みつつも多かれ少なかれ、フランス的孤立を採るのでなければ、必然的にこれへの傾斜を免れず、中国は米中会談、日中国交を機にこの方向に転化したといえる。△戦後△秩序解体が、更に経済危機に追いやって、韓、台、フィリピン等、アジア中進諸国は、それを目指そうとも果しえず、まず国力蓄積へ専念せざるをえないのである。軍事外交路線は、開発路線を選択しうる諸国家（自由

は、国家問題のつまりは政治革命の比重を低減させる根拠をなすのだろうか、否である。

②我々の見解は、一国的国民―階級統合力の喪失を、民族的表現をとろうが、世界へ自己を等置して政治、軍事表現しようが、世界秩序と関連づけてのみ一国的秩序の安定を保持しようという局面への不可避的突入であり、それはより更に△国家△問題こそが関係的世界下の支配層のアキレス腱であることの証左であると考える。

△国家△問題が支配層のアキレス腱であり、それが世界秩序と関連づけてのみ扱おうという事は、まず世界革命があり、それに従属してのみ一國革命は論じうることであるか、否そうではない。我々は世界革命を一國権力奪取の総和でもなく、プロ独△国家△の世界大拡大でもなく、レーニンの飛火論でもなく、戦略領域に△をプラスしてのみ問題にしうるといつてきた。国家―市民社会の統合性の解体は支配層にとって根底的危機だからこそ、世界交通が要請されているのであり、△国家△問題への解決が為されない以上、世界権力―世界プロ独も世界ブルジョワジー―世界プロレタリアートも擬制的にしか想定、形成されえない。我々はそれ故世界革命を、コミンテルン六大会のスターリン・ブハーリン綱領風に一國革命の総和として考案しえないし、ソ連風に

国家）に対して、より宗教国家の性格を残存させており、資源競争、技術蓄積、ブロック編成抗争を通して、民族的表現をとりつつ世界に関わろうとするのである。

列強間の植民地領有―市場再分割競争は、原資源と生産力と消費能力に較差がある限り必須であるが、これらは国家―市民社会統合力の解体を、世界的編成として再統合せんとするか、一国的強度を蓄積させつつ世界競争に伍せんとするかで、大きな意味での開発路線と軍事外交路線に分岐しているのである。これは、マルクスの時代の恐慌―窮乏化と階級矛盾の激化、またレーニンの時代の帝国主義の不均等発展と金融資本の国際的再編に基づく世界市場再分割競争の帝国主義戦争への転化と異なる、現代の△国家―市民社会△統合力危機の△民族―世界△空間での相補的発現形態といえる。これら両者が、△国家―市民社会△、△民族―世界△空間を止揚する方途を有せぬ事もまた以上で自明であろう。

ハ、存在攻防と政治革命の質

①ロでみた支配層の△国家―市民社会△統合力の解体と、再編による危機の繰り延べは、世界の革命運動自体に転質を迫るものとしてある。国家―市民社会の一国的統合力の解体を、民族国家保存あるいは国家性格を後景に退かせた市民社会併存で補完せんとする支配層の国民―階級支配様式の転換

「社会主義」陣営の強化でも、中国風に反米包圍網の拡充でも、ましてや運動における主観的連帯でも、革共同的イデオロギー的浸透でも扱いて得ないのである。民族国家と世界が相補関係にあることを我々は見、ナシヨナリズム―コスモポリタリズム円環を批判してきたのである。国家―市民社会の等質的成熟は、△国家△解体原理を時間性へ翻訳し綱領域へ内化し得たものこそは、どの地域、どの国家、どの民族として共同性の基礎をもつとも、民族―世界空間を解体しうるのである。革命の課題は、政治―社会再編の焦点が拡散し世界大に展開されればされるほど、△国家△の側に、構造化した世界性の側にあるのだということを確認しよう。ここを踏み外したおめでたい諸種の「世界革命戦争―世界プロ独」論争等は、結局、日本列島改造論を、世界大にブルジョワジーより低次元で展開せんとするにすぎぬことも、である。

③国家―市民社会の統合力の低下は、国家による現実の把握、市民社会総括力の低下でもある。では、政治革命は社会改造論の積み重ねの上に想定しうるのか。市民社会内ヘゲモニーの総和奪取は政治革命と取り換え可能なのか、これも否である。政治革命はますます重要であり、強調されすぎることはない。国家の現実支配の弱化は、市民社会の観念的支配の浸透の別の表現である。但しここでいう観念的支配とは、

階級規範、国民の価値意識という意味であり、我々は政治革命の権力奪取とは別の側面、民衆時間の累積の領域でここでいう「国家」を克服せねばならない。

帝国主義への政策反対、「社会主義」への心情支持、後進諸国への人道的同情等は、無自覚であれより「国家」市民社会、民族「世界」空間を延命させ、補完、強化する道である。だがしかし、政治革命が国家解体原理を把え、つまり戦略的世界プロ独の巾を、時間の累積の深度に転化しうる時、民族「世界」空間は止揚される。

我々が語ってきた社会革命を内包した政治革命とは、俗物共が批判するような、経済「政治」矛盾の同時的処理というレヴェルでの外形ではなくて、階級攻防が存在を、持続の根拠をめぐって争われる時代に、階級規範を形成し、包摂する政治革命として、ここに新たな装いで復権するのである。

二、〈戦後〉秩序解体と革命運動の反省

イ、政治・経済・軍事再編と支配の危機

① 71年のニクソン二大声明、独ソ協定、SALT協定、スミソニアン体制、72年の米中会談、ホノルル日米会談、日中国交回復、両独協定、ベトナム和平交渉の進捗は、決して米

社会主義論と官僚型統治への反撥による、反スターリン主義と構改論の産出、また59年中印紛争批判に始まり62年に煮つまる中ソ論争過程での良心的マルクス主義者の沈黙、系列化、日共のソ連派除名とそれに続く中国派除名以上の世界革命運動の一大転機であると考えられる。これは決してあのおめでたい60年ソ連派で70年中共派へ転向した旧構改諸派や、日共内中共派に裏切られ復活したML系、先進国革命主義の誤まりと坊主ざんげした京大C戦線（佐野一派）、大衆路線へ転化した関西赤軍派、そして意地きたなくもバスに乗り遅れまいと実利の為に変節をした烽火派、仏派等の言うように中国の革命外交の勝利的転回ではない。もちろん革マル、中核、4トロ、理戦の言うような毛沢東路線の硬派スターリン主義的性格の暴露とそれ故の世界革命に対する裏切りなどでもなく、単純に中国もまたソ連と同様に近代化、工業化、生産力「国力」増強路線を踏襲し、国家「市民社会」の等質的成熟過程へ政治的に突入したという丈のことである。

③ 経済過程ではドル「金」ルーブル「元」と一巡し「社会主義」が交易を国家統制しつつも、三ブロックの区別なく統一世界市場に組み込まれており、政治過程では架構の「自由主義」圏、「社会主義」圏対立を軸に、一方において国論統一、生産力増強の環としつつ、他方で軍事的には恐慌の核均

帝が言う平和と協調の時代の開始でも、中国が言う悪玉米帝の退散でもなく、世界支配層の政治、経済、軍事再編の泥沼的集約であり、戦後世界、社会構造、秩序自体への解体宣言である事に注目しよう。国家「市民社会」の等質的成熟が即ち各々の共同性「共同体」の集約力の喪失過程であるという矛盾の発想をブロック別にみるならば、先進諸国においては階級統合危機と開発路線による再編を主軸とし、米帝主導、日、民西独続行、仏孤立、英低迷であり、労働者国家においては消費文明の浸透による近代化と自由をめぐる対立であり、ユーゴ、チェコを筆頭に、擬似社会主義チリが続いている。後進諸国には64年国連貿易開発会議でのプレビッシュ報告が南北較差の永遠的解決不能を嘆き、ミルダールがケインズ「国主義」のジレンマを衝き、福祉世界建設の観点にたつて先進国無償援助の救済策を出した所で解決不能な諸課題が出積している。特に東南アジアの経済危機、中進諸国の反共政治路線の強いられた転回は、周知のようにニクソン対中緩和政策以降、韓国、フィリピン、南ベトナム、セイロンを筆頭に徹底した共産主義者、民主主義者、自由主義者狩りとイデオロギー批判、国論統一の強権的進行がなされている。

② 我々は、戦後秩序解体の象徴が72年米中会談であり、これは56年のハンガリー動乱とソ連20回党大会時における一均衡体制の下での共和共存を保っているという戦後秩序は、米中接近でその根拠から崩壊した。自由主義「共産主義」の政治体制、イデオロギー、民衆の価値感の意識的対峙の持続はここに根拠を失ない、政治経済大国はSALT協定、核独占密約を交しつつ、米、ソを先頭に開発路線「福祉社会幻想」をばらまき、「社会主義」圏からベトナムが見離され孤立した悪戦を強いられた対極で、反共自由主義の先兵を為した韓国、南ベトナム、フィリピンは米帝に見離され、はっきりと経済自立、国力蓄積、自力防衛へ転進せざるを得ず、それ故にまず、自由化へ向かう国内世論を統合するための反革命的治安維持が採られ、その中間に軍事外交路線を踏襲しつつ開発路線へ抵抗せんとする日、独、先進諸国がいるのだ。

米中会談の波及は、架構の両体制対立を解消せしめたと共に、ゆるやかな先進諸国、ソ連等労働者諸国に對立し、中国をまとめ役としていた第三潮流、後進国革新派ブロック自体をも転覆の危機に追いやったのであり、これらは実は世界のこれまでの革命運動の既成観念をことごとく破壊する丈の規模と深度を有しているといつてよい。

④ 過渡期世界における「戦後」秩序の解体の次の、支配層の政治、経済、軍事再編策は何だろうか。彼らは米国のプラグマチズム、福祉幻想やソ連のサイバネティクス、生産力理

論としても、自由主義と社会主義の体制イデオロギー対立にも拘らず同時にゴールインした八国家一市民社会Vの爛熟、統合力解体を結局社会秩序の再編の側から克服せんと考えている。だが、歴史を発展過程として、世界を拡大過程としてしか捉えられない彼らは、国民的・民族的（社会主義民族という用語もあるのだ）価値実現を願った諸結果としての八国家一市民社会Vの崩壊局面を自らを否定して逆戻りさせることも出来ず、新たな共同体の組み替えは八国家Vの枠組みでは為されぬことを熟知している故に、八国家一市民社会V矛盾を、民族一世界空間への転化として行なう他ないのである。世界的支配層の70年代基調は、八戦後V解体の了解の上になつた、開発路線の実質化であり、それは政治的には中国加盟後、両独加盟、南北朝鮮、南北ベトナムへも道を開くと称しての新興連体制への外交折衝舞台の一元化であり、経済的にはIMF・GATT体制の矛盾を、公然たる世界単一市場の提唱、西独・日への帳尻負担拡大を経ての、新世界管理通貨体制確定であり、軍事的には米ソ核独占体制への諸強大国組み込みによる世界政治秩序への決定権確保である。

世界のリーダーブロックに対する第二戦線にとつての延命の道、軍事外交路線一小経済ブロック一「民族」政治を、開発路線はそれぞれ武器対抗論には戦略核保有で、関税操作に国家形態をとつた共産党達によって流布され、日本に移入されて、分岐しているハマルクス主義V革命観の宗教国家のシンボル化、物神性を根拠から揺さぶっていると思える。以下に諸側面から簡略に検討してみる。

②文明化論、近代化論 これは外的時間の経過を、野蛮未開一文明への歴史の発展過程として捉え、その発展の内容を段階的に原始共産制一奴隷制一封建制一資本制一社会主義一共産主義社会と捉え、スターリン理論に典型的な、共産主義社会の到来を法的に生産力一生産諸関係の矛盾的展開の必然的産物、下部構造の側よりする人間外的要素から基礎づける史観である。戦後これらは古典ユートピズムとは異なり17年革命以降のソ連邦、戦後の中国、北鮮革命を理論根拠に、東風は西風を圧するという理論的確信から、社会主義の優位論とそれを基礎づける生産力理論として統合され、中ソ論争以降明瞭に互に修正主義のレッテルを投げ合いつつ、どちらかのブロックに編成されるか、両者と友好を保ちつつの統合と「社会主義」陣営の強化を望むキューバ、北鮮、北ベトナムグループに分岐している。だが、それら中国や第三潮流グループにおいても近代化、工業化論は自力更生の態度を取りつつも敢然として在り、その限りで生産手段の国有化、人民公社所有を獲ちとりつつも、依然として八国家一市民社会V

は自由貿易で、「民族」政治には世界秩序で圧迫し抑制可能なものとして扱わんとしている。

だが、しかし開発路線は軍事外交路線を抑圧、制覇しうるが、八戦後V秩序解体後も八民族一世界V空間が相補的なものである限り、止揚することは出来ず、両者は現実には歴史的な共同体の組み方の民衆への時間、空間の蓄積度の母班を残しつつ、生産力、政治力、軍事力強度に決定され複合して登場する以外ない。ローマ・クラブ報告に見られる様に、又ソ連が東欧ブロック統括とインド、エジプト介入、中国牽制に主張限定している様に、支配層にとっては未来は決してバラ色ではない。無論、中国の革命的言辞等も、八国家一市民社会Vと世界関係について、これらに対質すべき原基を持たぬ以上、老年に対する青年の批判と同じく何ら新しい展開を拓かず、ベトナムが戦後世界に対して有した根源的叛逆の歴史的質をも、民衆の側へ蓄積する方途なく、八民族一世界V空間に溶解させてしまふ事も推察可能である。解釈ではなく変革を行なわねばならぬことの困難さは、現在どの八国家Vにおける民衆にとつても等価に存しているのだ。

ロ、既成革命観の解体

既に言及したような八戦後V世界、秩序の解体は既存の革命運動、とりわけ戦後過渡期世界においてソ連と中国を代表

構造の中での共同体の編成の差異性一等質的成熟過程を歩みつつあるのだと断言せざるをえない。

レーニンが『帝国主義論』で述べた、独占一金融寡頭制の強化と、大量のプロレタリアの排出と団結の必然性により、死滅しつつある最高の資本主義一帝国主義段階こそはプロレタリア革命の前夜であるとの見解は、私的所有と擬似共同体的所有の対峙と後者の強調の側面では正当な原因の指摘である。が、先進国であればあるほど大量のプロレタリアが排出されればされるほど、支配の軸も革命運動の統合軸も拡散し、合法政党と、労働貴族が膨化し、逆に後進諸国においてのみ国家ヘゲモニーも、対抗的革命運動の集中力も深度を有ち、政治革命を成功させていること、そして政治革命を成就した「社会主義」諸国が国民の貧窮と生産力の遅れを克服せんとすればする程階級的統合力を喪失するという歴史は、実はレーニンの原因指摘は国家一市民社会の爛熟期には、支配の世界的危機として発現するが結論を必ずしも導かず、その止揚の方途を見出さねば逆に、ブルジョワ的發展段階論に吸収されるのだということを示している。ソ連派、中国派を始め、特に平田清明の個体的一共同体的所有論のプロ独への楽天的短絡的決定的誤謬はここにある。

③革命の「環」の理論 マルクスは先進国における需給バ

ランスの解体による恐慌の必然性を『資本論』で筆をすべらせ、レーニンは綿密な分析から帝国主義市場分割戦の不均等発展における弱い箇所から鎖は切れるとの「環」の理論を提示した。マルクスの言は後に宇野弘蔵により原理論域と段階論の混同であるとして批判されたが、我々はこの先進国論の一般的危機の交番として見ておけばよい。レーニンの「環」の理論はマルクスと異なり、革命主体の側が最も有効に革命運動を推進していく上での場処の掌握として、戦略問題の領域にある。この「環」の理論は一方で、スタ・ブハ綱領による資本主義の一般的危機、革命と戦争の時代における先進国、中進国、後進国各々における革命パターン提示による一般化、また岩田式日本→アジア→世界突破口論による適用、更には戦術環にスライドされて階級攻防における日韓青解派の一点突破→全面展開、そしてスターリンロシアにおいては、何が最も緊要かのレベルへ引き下げられてプロレタリア祖国防衛論等へアレンジされた。

我々はこの場処的「環」の理論は、④の近代化論が歴史を外的時間の累積として限らない発展過程として扱えたのと、交叉して近代世界形成を空間的拡大の局面で扱えるという世界把握に規定されていると考える。それはとりも直さず近代的国家形成を民族、版図、生産力領有の持続局面として把握を外にせり出す民族として固定して、他者解体根拠、自己強化根拠としている点で致命的弱点をもっている。

◎「プロレタリア」階級主体論 このことについては我々は原理的領域での指摘を本誌一号「共同体論」以降展開してきた。プロレタリアートの先験的革命主体化は、イギリスにおける本源的蓄積の無惨な過程の中からの賃金プロレタリアの排出、資本主義的生産過程そのものの機構の拡充に従って逆説的に訓練され、団体化し、結合するプロレタリアートの形成、その完成した登場根拠をもつ機械制大工場プロレタリアートというマルクスの定式とは無縁な地点で起った。我々は賃労働者一般をプロレタリアートとして先験化する経済的階級論、また集合名称としてのプロレタリアートに依拠するとしながらも政治的、党的結集の側から主体を限定する政治的階級論の限定性を指摘し、国家と市民社会の双方から幻想過程→生活過程で二重に除外されるものとしての階級規定→構造化過程を踏え、創るものとしての階級→社会的階級論を提唱してきた。

先験的階級論は、自らの政治主張を正当化する上での依拠する基盤であったり、どこかしらに四六時中、全身革命的なプロレタリアが存在し革命主体として登場するという遠隔化作用に傾斜するコンプレックスであったり、政治的党派色分

している事である。我々は、帝国主義の不均等発展の鉄の法則は厳として貫徹し、生産力較差はより増々、強大国と弱少国との間で拡大される事を了解する。が、先進国ほど国民統合力が喪失し、二流帝国主義や後進諸国はそれに比してより強固に民族的表现に迄共同性を昇華しようという国家→市民社会の相補関係が、経済危機の政治危機への転化を妨げていること、つまり国家→市民社会の等質的成熟の一分肢として不均等発展は位置づけられねばならぬことを確認する。

我々は八戦後→解体が「環」の世界的中心軸としての根拠を失なわせること、また八国家→市民社会の等質的成熟を撃つ共同体→共同性を掌中に把握すれば、逆説的に世界のどの地域、どの国家、どの民族における革命運動も世界的焦点へ転化しうることを了解する。現在、様々な意匠で登場している先進国革命論、後進国革命論、補足的労働者国家革命のいずれかの教条化も、第二次ブントの三者併列スローガン化も革命のリアリティにとってさしたる意味はもっていない。それらは当該諸国の当事者にとっては、自国政治運動を世界革命の第一線として扱いたいという心構えか、被抑圧国による抑圧国の論難と叛逆と援助引き出しか、自国潮流を世界革命運動の主流たらしめたいという願望の表現に他ならない。それらは歴史的に形成された資源、国民、版図、生産力較差

けとからめて外からの闘争評価の規準となったりして、今だに残存している。

我々は近代八国家→市民社会の形成そのものが民族を基盤にしつつそれを分解させての階級と国民の形成過程であることをこそよく見ねばならない。もとより経済的プロレタリアート論の一面化の誤まりは、プロレタリアは資本の集中集積と共に、都市から排出され増大するのであって、都市そのものが形成過程の後進国ロシアの革命において、更にソビエト連邦を背景にしてのスタ・ブハ綱領の段階規定のうちの後進国のみからそれも第二次大戦後に政治革命が成就されたという歴史の逆説が証明している。我々にはも拘らず経済的プロレタリアートが強調されるに至った経緯は皮肉にも、レーニンの労働民主独裁論を批判したトロツキーの理論主義に基づくヘゲモニー移行論と、重化学工業化を必死で歩まんとしたスターリンの生産力理論によってであることを了解したい。

経済的プロレタリアートの先験化は、毛沢東の「中国社会各階級の分析」「湖南省農民運動の視察報告」等での経済的地位を規準にしての敵、友、指導勢力の区別け(当時、中国のプロレタリアートは二〇〇万であり人口の一角にもみたなかった)、またベトナムの人民戦争→民兵路線、北鮮の主体思想等にみられる如く国家→市民社会の形成過程、共同性の

組み方の差異に応じて個別化されている。これは決して一部のおめでたい諸君が言うようなマルクス・レーニン主義の各々の適用ではなくて、諸強大国に収奪され、民族を分断され、労働、徴兵を強制された後進諸国での政治的独立、経済自立への民族的エネルギーの噴出の足がかりになりえたのがマルクス・レーニン主義のみであったという事の証左にすぎない。

プロレタリアート先驗化と民族主体論は「国家」市民社会の等質的成熟の中で、解体され、変質させられる。プロレタリアート先驗化が、最も資本に搾取されている者が最も革命的である事を説き、民族主体論が、抑圧民族に対する被抑圧民族の団結を説くというレベルで、それらは先進国革命論と後進国革命論へ定式化される。何度も述べてきたようにこのような歴史における近代化論、世界における国力区別の双方こそがブルジョワ的「国家」市民社会の形成の、また「民族」世界へのコミットする射程なのだという事を徹底して検討すべきである。プロレタリアート先驗化が対極でルンプロ革命論を産み、民族主体論が辺境革命論を産む背後で、それら全ての革命が「国家」形成の革命であるというブルジョワジの歩みを異なる形でプロレタリアート、被抑圧民族が踏襲している怖ろしさをこそ知らねばならない。この種の革命論

転落するに至ったのである。これらについてはイで別の箇所から検討してきた側面を合わせ、我々の戦略の軸の確定として開発路線「軍事外交路線批判の側から再検討されねばならない。

ハ、オプチミスト諸派へ与う

①我々は70年6月分派以降、政治表現において世界同時革命「世界プロ独樹立を基本戦略に、中央権力闘争「マッセンストライキを運動戦略に、党「統一戦線の構造的創出を組織戦略に定め、第二次ブント内諸分派と自らを明確に分離するのみならず、旧新左翼諸派とも遠く離れて独自の歩みを続けてきた。我々は更に当面の路線、スローガンの軸を、政治路線においては「国家」市民社会「民族」世界「空間」の破碎を、運動路線においては、後退戦下の政治「社会拠点闘争の持続と対峙を、組織路線においては「八派」全共闘」の解体から存在としての組織への転位を提起し、そしてそれらを集中する実践「環」を「沖繩」砂川「三里塚」戦略におき、その摂取と内化と拡充を任務としてきた。

我々の綱領「戦略把握、戦略基調と路線と環の連関、実践における検証と、相対化等について総括、点検すべき事は多い。だが残念な事に「八派」全共闘」止揚を掲げて、綱領「戦略論争の公開的展開を呼びかけた我々は、当の「八派」全

が開発路線に「社会主義」国が取り込まれ国家間共存し、更に先進国による収奪を国家的に許容していくという無惨さをこそ見ねばならない。その克服の為には国家「市民社会」転倒と、大衆の観念「生活転倒をコミットさせる異なる尺度での現実を直視しつつ現実を一步越え出る革命思想が我々の側に獲得される以外ないのだ。

④侵略・抑圧・反革命批判路線 ブルジョワ社会での経済収奪を直視したマルクス、帝国主義の経済衝動による後進国侵略を、革命的祖国敗北主義と民族自決で粉碎せんとしたレーニン、プロレタリアの祖国ソ連邦の擁護、防衛を党系列化にすりかえたスターリン、それら三者の歴史的、空間的特殊性に裏打ちされている反撃に対するブルジョワジの攻撃の中心環の指定と突破口の確定は、過渡期世界において重層化して、侵略「抑圧」反革命体系として登場してきたというる。だが「戦後」世界秩序の解体は、ブルジョワジの攻撃の質を変え、「社会主義」圏リーダーブロックを巻き込んだでの新国連、世界管理通貨、リーダーブロック間の核独占としてのみ長期戦略を可能とする局面を産んでいること。近代化「工業化」経済的先進国化論を脱しえぬ諸「社会主義」国は、「民族」世界「の相補関係を見抜けず、必らず「国家」市民社会」の等質的成熟から復讐され、敵の土俵の中での抗争に

共闘」が自壊し、それ故にその経緯から何物をも学び取ることなく「党」大衆」構造へ回帰する中で、対新左翼論争を介しての再編に見切りをつけざるを得なかった。我々は、砂川や三里塚や職場や学園拠点等で個々の条件に応じて戦術的共闘は行なうが、それは階級闘争の利害の上になつての事であり、諸党派との折衝や連合を一義とするものではない。我々はこの間の歩みの中で、八派や第二次共産同に在る時点での実権派の位置と異なり、革命組織が負うべき理論、実践、組織の全領域を独自に引き受けてきた。我々が理論的限定を有していたとすれば、それは他党派批判ともたれ合いで力量不足をごまかすのではなくて、全てを創り出す側に身を置くという、つまりは政治的たらんとすることの限定であり、それは主要に綱領「戦略の豊富化の契機への幻想諸域の取り込みの、そして実践的社会運動との拮抗を通じての関係を基軸とした相対比の回路の不鮮明さに基づいていたといえる。

この間の経験に関していえば、三派「八派時に比してよりも更に諸派の理論的（思想的には元々論外であるが）音痴ぶりにはなはだしく、我々は殆んどそれらから学ぶ所のものもなかったといつてよい。我々が諸党派の見解を取り上げるのは、彼等を批判し対峙することに意味を見出しているのではなく、ただの情勢の反映としてのそれらを生かしている人情

況の根を浮上させるためにのみそうするのである。

②従前指摘してきた八戦後V世界秩序の解体に併なう諸党派の理論、組織再編状況の特色は、プラグマチスム・ロマン主義円環の内での前者への地沿べりの傾斜である。周知のように69年段階での日共一八派一革マル鼎立は、69年秋期決戦敗北後八派レベルで赤軍一ブント・中核・ML（中央権力闘争ブロック）一解放・共労・共革・4トロ・社労同（職場、学園拠点ストブロック）へ細分され、70年夏ブント再分裂と入管闘争評価で更に中核・戦旗・解放・共革（先進国革命ブロック）一共労・ML・4トロ（アジア革命ブロック）へ転質し、71年段階でML、社労同はつづれ、沖繩、部落評価をめぐって中核・4トロ一解放・共革・共労・理戦（沖共闘）一野合戦旗・赤軍・怒涛・赤ヘルノンセクトセクト（烽起戦争派）へ分解し、72年段階に致って赤軍・左派・RG・共革・共労つづれ、中国、ベトナムと三里塚評価をめぐって又々、中核一4トロ一解放・理戦一赤軍・ML・共労残党十京大レニン研他赤ヘルノンセクト十烽火・仏・怒涛の便乗（8・25共闘）へ分解している。無論「八派一全共闘」止揚を掲げた我々はこれらの情況主義的、離合集散と別箇に歩んできたことは言うまでもない。

③69年敗北以降の、就中72年におけるロマン主義の屈折と共闘グループが、我々に予期されたものとしてうつり、何も新たな衝激をもたらさないのは何故だろうか。それは彼等が先進国主義や小ブル急進主義や構改主義として各々の出生と形成を断罪し自己批判することと、世界革命はベトナム一中国一朝鮮の帝国主義への攻勢としてのみ前進しつつあるという評価を結集軸としてまとまるといことが、現象的なウエイトの転位の選択にすぎず、主体的必然性に媒介されてないからだ。彼らは疎外革命論派（革共同、解放）に現実の運動展開と戦略鮮明化を対置することが、69年秋期敗北で空間的土俵を奪われた時点で、既成の△政治Vそのものを相対化することなく、連合赤軍に象徴される現実遮断、無変化の観念昇華故の敗北に直面し、意識的持続に耐え得ないと判断し事実という名の「現実」に後ずさりして、主体的切開の任を中一朝一ベトナム人民にゆずり渡したのである。もちろん、このような「他者の名で自己を語る」事実主義は、日本共産党が典型的にその党史で示したように、価値規準を他者（他民族、党、軍、人民）に置いてそれを感情移入しているに過ぎないから、結局の所感性を摩滅させて他者を変節しようとしまいと忠実に代弁するか、主観的願望と他者の転質を重ねえず、旧い主観に忠実に回帰する他はないのである。彼らは日本において自らと階級を関係づけることが出来ぬのと同様に、

プラグマチスムへの地滑べりは、連合赤軍敗北とテルアビブ事件に規定されての現象的反省過程を経ての、いとも簡単な烽起戦争派の解消と中一朝一ベトナム派（8・25共闘）の旗上げに象徴的に示されている。

我々はここに60年代での運動のブント、主体性の革共同の立脚点が、一方で権力の物理的壁の前に、他方で開発路線提示とプラグマチスムの浸透の中で解体を余儀なくされていることを了知しうる。60年代党派一革共同両派、解放派の沈滞と、飛躍を試みんとしたブントの分裂の上に咲いたのが、ロマン主義の極点がプラグマチスムへ連らなるという赤軍派の悲劇であり、これに行ききれず便乗し、振り回されたのが、70年代潮流たらんとした烽起戦争派のベトナム派への解消なのだといえる。

④8・25↓9・16↓10・21と快調に時流に乗ったかに見える8・25共闘は、ただそれだけのものであったが故に中国一ベトナムの新局面に規定され時流に見離されつつある。

旧ML系解放委員会の「解放通信」、赤軍派関西地方委員会の「人民の軍隊」や新聞「赤色戦線」の各創刊号、およびレニン研『ボルシェヴィズム通信』等を見ても、豊浦、八木、上野、黒木、佐野諸氏の毛沢東やポー・ゲン・ザップや金日成を紹介し援用しての尽力にも拘らずいわゆる8・25

中一朝一ベトナム人民と自らを媒介させる原基をもちえず、それ故八戦後V世界秩序解体の意味を了解しえずアジア革命派の大躍進と信じ込み、「現実」に裏切られてもそれを希望的に解釈し、ついにはプラグマチスムが事実信仰に迄致ることもまたよく読めたことである。このようなオポチュニスト達には、世界と日本の革命運動の歴史をよく眼を開いて看よというのが唯一の与えうる薬である。あわててベトナム行きやバスに飛びのり正当化にいそがしい烽火、仏等は論外である。

⑤これら烽起戦争派と一周して合致した8・25共闘グループが最終的にはテルアビブ事件に先取りされた、中国共産党日本支部や、朝鮮、ベトナム労働党の出張所へのみ活路を見出し観念的脱日本に致りつくとしたら、いわゆる落日の60年代党派達はどうだろうか。彼等は、先験化された理論であれ自分で考えるという回路を有しているだけ前者より一mmほどましであるが、八戦後V秩序解体を、イデオロギー的になで切るか、片目の経済決定論をゴリ押しするかで位置づけようとしているに過ぎず、△現実Vからも△大衆Vからも見離されていくことにおいては同一地平にある。

中核派の「アジア侵略を内乱へ」は、レニン『帝国主義論』を教条化し革命的言辞を、それも赤軍風ではなくて古

典的に宣伝し、常に危機だとしてもあそぶことが革命的だと信じている純朴な典型であり、革マルは、「和平」策動糾弾、北ベトナム裏切り弾劾に、「七一年間にわたって展開されてきたベトナム反戦闘争の一切の真価が問われている」などとうそぶいているが、これは本来転倒であり、彼等は戦争終結すれば、反帝、反スタの日本での運動材料がなくなることに不満だけなのである。

解放派の田中訪中阻止闘争中止の混乱をめぐっての総括は中間主義の一語に尽きる。中国革命外交のベールをはがさんざんけなしつつ「偉大な中国革命の、しかし深刻な限界を突破しての前進は、帝国主義国の心臓部での階級闘争の発展によって、はじめて本格的に切り拓かれる」と持ち上げざるを得ぬのはなぜか。それは彼等の世界了解が先進国―後進国図式にのっとって、後者の形式的な前進へ、前者の革命の不発からコンプレックスを抱いているというレベルにあるからだ。反革命階級同盟の国家論の不在、経済環元論の誤まりについては別に述べた。戦旗（理論戦線）派の変節については逐一指摘するまでもないだろう。だが「米帝を中心とする世界体制がベトナム人民を中心とする後進国武装民族解放闘争の前に破綻をきたした」などは、既に別の地平にいる我々の68年当時の主張のレベルへの後退であり、これらのことについて

は等質時空上の一点が、異質時空へ再構成する歴史―世界の關係的、動態的把握の方法的視座である。それは外的時間―空間から歴史―世界を扱った共同体論―過渡期世界論に、内的時間―空間をコミットさせる方法の獲得である。我々はそこをかいくぐった上での歴史―世界把握の動態的把握の観点を時空変容史観とでも名称づけたいと考える。

②我々の歴史―世界観は、その両者の不可分な連関を明瞭たらしめるという点で、既成のこの「マルクス主義」主義者に比して画期的であった。つまり、既成革命論の歴史観と世界観の統合視座の欠如こそが、スタ・ブハ綱領での先進国、中進国、後進国における三つの革命の型の設定、また毛沢東に典型的な抑圧―被抑圧民族論にたつ反米、反修攻勢の戦略化の誤まりの根拠である。スタ・ブハ綱領では資本主義の次は社会主義のはずなのに、国家―市民社会成熟度、生産力―生産關係の発展度からはロシアはせいぜい中進国レベルにあるという煩悶を解けず、また抑圧―被抑圧民族論はアウトタルキー経済可能な被抑圧民族もあれば、国家間交易なければ生産諸關係の維持もしえない抑圧国もあるという事態への版図固定化自体に思いを致さない不徹さを示した。

我々の歴史―世界観は外的時―空の尺度を用いてあるが、決定的問題はそのスケール自身に、つまりそれは外的時間の

我々は現実を事実として追認するものと、洞察として予料するものの差だとの他には言葉をもたない。「共同反革命を烽起内戦へ」などというのも、しみのついた衣装を衣紋掛にかけるといふポンチ面にすぎない。

三、革命の現実性―求心点の所在

イ、歴史―世界了解の新視角

①我々は既に二において、歴史観における「唯物史観」として流布されている必然論―経済決定論、近代化―文明化論そして国境に分割された版図の集合としての世界把握が錯綜する△現実△を把え得ず、それ故変革の理論たりうることもないことを検証してきた。

我々は、これまで歴史を時間性の抽象として社会的階級形成史として把握する方法、世界を空間性の抽象として、国家―市民社会の等質的成熟と、民族国家併存場として把握する方法、即ち共同体論―過渡期世界論を提起してきた。だがこのレベルでの共同体論―過渡期世界論は、歴史と世界の時空度をグラフ上で表示しようが、それは等質時空を想定しての構造的、静態的把握である。

共同体論―過渡期世界論に付加さるべき視点は何か。それ

持続は発展―価値形成段階なのか、外的空間の拡大は対象的世界の獲得―豊富化であるのかを問わないで、価値を、内的時間の厚みを捨象して想定してあることに集中される。

つまり我々にはここでスターリン主義を屈服させたロストウ的ブルジョワ「経済発展段階論」をどう粉砕するのかが問われているのだ。我々が価値關係的態度を背景に退かせて了解した現代世界は、等質的に成熟した△国家―市民社会△が併存し地球空間をおおっているという事である。が、これは結論のみたどれば、ロシア革命は後進ロシアが資本主義的近代化を果しうるための、ロシア的に確定された最良の方法であり、世界各国はイデオロギー体制の如何をとわず資本主義の五つの発展段階のいずれかにあてはまるとの予めイデオロギー的判断を除外し、資本主義の「社会主義」に対する優位を立証せんとするロストウ理論と、近しい内容を含んでいる。もちろん誤解を恐れずに言えば、ロストウ理論の方が、二転三転する両体制対立の二元的スターリン理論より、統一的世界把握の方法としてより、正当であることは疑いえないことである。ここで必要なのは、ロストウが分析の背景に退けた国家、民族と共同性の組み方を前面に押し出す事でもなければ、後進社会からの離陸段階の想定がアジア諸国で裏切られてい

るではないかと指摘することでも、反共主義とか侵略、抑圧、

反革命を經濟協力という名で無視したとか、政治イデオロギー的批判をすることでもない。必要なのは、過渡期世界論と共同体論の接点の鮮明であり、国家―市民社会が階級を産みつつ成熟するという事柄の理論化であり、資本主義の發展段階は何ら価値形成的なものではないことの立証である。

③我々は歴史を外的時間の生成としてとらえ、世界を外的空間の拡がりとしてとらえ、個の内的時間―空間と逆立して頭われると考えた。だが歴史を外的時間の持続に環元せず、断面を世界大に切り取った時、そこに浮き出るものは何か。それは、歴史的階級の形成史として把えるといつても、諸個人、小共同体と包括的共同性は逆転して存在し、共同性に累積される民衆の時間の蓄積の度合いに依じて不均衡な諸共同性の組み方の総和の側面が露出し、また国家―市民社会の等質的成熟と国家間併存世界を世界対象の拡がりの基軸にすえたとしても、国家―市民社会の基礎、版図、民族の量と質、資源自体が、自然的条件の発掘と共に異民族追放、征服戦争による略奪により変容しつつ形成された歴史的所産であること、つまり現在の地理的経緯度分布、国土の大小、国力の強弱は何ら固定的に把えられるものでないことを浮かび上がらせる。

④それ故歴史―世界観と、歴史の一断面を切り取った現存に常に転化し環元されるという、人間の自然化過程を指すといつてもよい。その為には個―対―小共同性を自己の自然場として受容―欲求しようという空間視座転化と共に八国家Vへ外化されない共同性の把持という時間視座転化が、構えとして不可避に要請されるといってよい。

⑤我々は、外的時間としての歴史、外的空間としての世界は人類が階級対立を産み、国家間抗争を経て形成した時空の諸結果であり何ら価値化されうるものではないと考える。つまりは野蛮―未開―文明過程は価値化過程ではない、もちろん先進国―後進国関係もそうであり、また版図、資源、国力の大小も何ら価値序列化を迫るものではない。

我々はその観点にたつて、外的時間の経緯を發展として、対象的世界の拡大を豊富化として把えるブルジョワジー、およびその土俵の中で經濟發展段階に依じて、あるいは空間的抑圧度に依じて、理論的に、その実質は事実的、恣意的に、特定の場所―被抑圧民族や、特定国プロレタリア階級に価値を置き革命の時間的、空間的中心環を形成する既成被支配層の歴史―世界観をつまらないものとみなす。

このことは無論、ひとつのカテゴリをいっているのではなく、先進国に対し後進国を、文明に対し原始共産制を、プロレタリアートに対しルンプロ貧民を対置する誤まりをも、

世界の交点は、国家―市民社会編成が国民的階級を産み落としつつ生成し、国家間併存世界がそれを民族間対峙として再編しつつ、今だに世界史的な共同性―共同体の根を民衆の側は見出しえていず、それは逆説的に国家―市民社会の総括力の解体としてその糸口をさし示しているということが了解できる。

我々は単線的進化論、対象的世界に即自的に規定された地理的国境区分観が、アジア的生産様式論争ひとつ、一国政治革命が世界性を内包しうる交通形態ひとつ結論づけ得なかつた既成「マルクス主義」に対して、先に示した歴史―世界の統一的把握の視座を示すと共に、現存世界とは地球の表面に人類が種をもち、対をもち、労働をし、生活範囲をもち、包括的共同性をもち、国家形態として対立し友好しつつ、はいつくばっており、生をつないでいることを、時空の累積の観点から提示し、現実を我がものとする一助としたいと考える。

現存世界が人間存在の総和であり、現存歴史は個と共同性に蓄積されたエネルギーの総和であるとの把握は、共同体論―過渡期世界論の動態的把握の視座、理論レベルの相対化装置である。価値過程とは生活者大衆に累積される時間が、空間的に社会関係から薄められず、時間的に上げ底された包括共同性にかすめとられることなく、系承され正のエネルギー

等質的時間の發展としての歴史、等質的空間の外延としての世界把握の限定として同時に撃っているのである。

⑥我々はそのような、等質的時間、空間把握が、個の内的意識を神へまで結びつけ、あるいはレセフェール、感性的解放として主張され平板的な内的時間、空間把握と表裏の關係にあったことを知っている。我々が歴史―世界観と内的時空をコミットさせるにはさしあたり二つの手続きが必要である。その一つは環界と個をつなぐものとしての共同性―共同体の軸の挿入、他の一つはそのために混然としたものとして扱っていた内的時空から生物的生理的時空を分離し、内的時空に動態化の契機を与えることである。その手続きについては、次のロで詳しく触れるが、さしあたり時空変容史観を我々が確定するためには、歴史―世界と個―対の関わりは、市民社会水準での諸共同体―国家水準での包括的共同性の綱目の中にあり、これは未開―文明国をも、地理的民族的特質をも包括して、八国家―市民社会Vこそが人類の形成し得た共同性―共同体の最高の質であることを了解せねばならない。

そしてその了解は、何故人々は自らにとつて生き暮らし死ぬ過程での自己に必要な領域での他者との関係が一義的なものであると熟知しながら、観念を国家に逆倒し、生活を生産力―生産諸関係の矛盾を受容していったのかの解明と共にその

裡から解体しつつある「国家—市民社会」の共同的総括力へ
とってかわるものは何か、外的権力—監視者を粉砕し、歴史
—世界を内化する、内的時空の質として共有する道は何かを
さし示す事を当然にも要求しているのである。

ロ、時間と関係の弁証法の提議

① 外的時間—空間を、現存—世界へ関連させ、価値づける
には、共同性—共同体の軸の挿入と、内的時間—空間概念の
鮮明化が要請されると、時空変容史観への視点で述べてお
いた。

内的時間—空間は、歴史—世界と意識的—感情的個の交点
所在を示す原基たりつつも、それだけでは共同体論—過渡期
世界論として抽出された外的時間—空間レベルと同じく静態
的、類—個対置の把握に留まってしまう。私が凡百の「マル
クス」主義者の、認識—存在論や、歴史—論理説や、三段階
論や、目的意識論の無効を宣告してまで、時空四者カテゴ
リ—を提出したのは、ごく単純な現実の存在を運動の相で、弁
証としてつかみ取りたいという意図に拠っていた。

時空四者は存在として絡みあつて誰の前をも通過しており、
これを外的時空—内的時空へ分岐して把握する時には境界と
個のレベルを、外的・内的時間と外的・内的空間とを分岐し

しての把握であるといつてよい。

③ 原理的にいえば、体験が経験化される過程が典型的なよ
うに、空間の堆積は時間度をくぐらねば蓄積されない。時間
の堆積は、空間度をくぐらねば他者を取り込む、関係度を持
ちえない。歴史—世界—人間の存在規定たる時空四者は、社
会過程における存在の運動としての相において、共同体—共
同性と自立した個へ引きさかれ、分離した形で発現する。共
同体—共同性における時間、空間の堆積は、内的時間と外的
時間を概念化操作で関連づけてのみ、個体にとっての現実性
へ内的時間の蓄積へ転化する。また個体における時間、空間
の堆積は内的空間と外的空間を関係化操作で構造化してのみ
個にとっての感性的現実性を保持しうる。このことは、個体
と境界の第一次的關係が、社会との存在的異和、とらえよう
のない（歴史は個体より多くの輪郭の不明瞭な時間堆積であ
る）情況の感性的個への威圧感として存し、継起する故の自
然的必然である。

④ 我々が途りついた現存、世界へコミットする地平は、よ
うやくにして共同性—共同体と個の逆倒を再逆倒する検討へ
至る。ここにおいて検討すべきなのは、この逆倒の質であり、
次いで克服の方途である。個体と共同性—共同体との逆倒は
何よりも個体は一個の他者と分離された身体として存してい

て把握する時には幻想諸域と社会生活域を扱かっているの
である。

我々は、歴史—世界的には、人間は類であるにも拘らず、
個として対を営み、産み、喰い、働らきながら、そして自ら
と逆立する外的な共同性を幻想し、その擬制秩序を受容して
現在していることを了解した。ではそのような共同性は、そ
してそのような共同性を架構する個は時空四者の連関でどの
ように把握されるのだろうか、ここが時空四者の主体—階級
—民族を経由して把握される、運動的把握の入り口である。

② 内的時間—空間を動態的に把握するためには、そこにおけ
る生物生理としての時—空と前者とを区別せねばならない。
内的時間を生物時間として把握ればそれは生命の燃焼と新陳
代謝、一個体の誕生—死滅への総過程であり、外的時間—老化
死滅することとその構成分岐へ転化する異和にすぎない。内
的空間を生理的空間としてみれば、個体防衛する上での最少
限の他への関係、一回的感性的反応の累積—消去過程に他な
らない。

外的時—空を動態化する軸が共同体—共同性への時間、空
間の累積度であるのに対し、内的時—空を動態化する軸は生
理的時空を対象化した、つまり動物的時空と自らを分離した
個体（これは類概念を前提する）への時間、空間の蓄積度と

ることに拠っている。つまりは、共同性—共同体における時
間、空間の堆積は象徴化や労働対象化によってのみ累積され
るが、それは不断に風化、解体にさらされており、外的時間
としての蓄積という架構においてのみ、伝承され規範力を持
つ。個体と共同性—共同体との正接はそれ故に、共同性—共
同体への時間、空間の堆積が外的時間へ吸収される、その
カラクリを転倒することに他ならない。それは個体にとって
は、ひとつは個と共同性—共同体連関の内的時間の凝縮と構
造化による確定、時間的構造化の位相において内的・外的空
間をとり込み思想化することである。他のひとつは、個と他
の個との一次的關係、「対」の自体的獲得における時空受容
を、共存する他者との倫理として確定し関係化の位相にお
いて内的・外的時間を規範化することであるといえる。

⑤ 世界の現存性が、個体と共同性—共同体の逆立にあり、
その再逆倒は時間化の側において外的時間へ収斂しない共同
性—共同体の組み方の方途の鮮明と、空間化の側において対
—小共同体間関係を転質させ、普遍性—自然性の根へ漸近さ
せてゆく作業として二重化される。

我々が時間の弁証法—綱領の確定過程と呼んだのは前者に
ついてであり、空間の弁証法—関係規範の確定過程と呼んだ
のは後者についてであり、この両者が存在へ向かう過程こそ

存在の運動の相における弁証法的展開である。

⑥我々は、現存の個々共同性・共同体逆立が、△国家―市民社会▽と個々対の乖離としてあることを了知しているし、更にその内部で生産力―生産諸関係に抛り自然的共同体が市民社会的秩序にからめられ、また市民社会総体と国家が逆倒していることを知っている。我々はさしあたり△国家―市民社会▽構造の解体を、時間の弁証法の内化による個々共同性への正接（一体感や共同体への解消ではなく構造化である）への綱領的洞察と、関係の弁証法の内化による共同性―共同性へ外化されない規範創出の両者から推し進めてゆきたい。

⑦△国家―市民社会▽秩序の解体局面にあつて、関係度はより深化され、つまり現況から相対化して確認される方途を要求している。またよりいっそう△国家―市民社会▽△民族―世界▽空間を越える共同的ビジョンも求められている。

革命の現実性は、政治集団が綱領―時間の弁証法から相対化され、関係―空間の弁証法からも相対化される局面において、既成共同性―共同体の崩壊局面であるが故により前者を掌中にし、展開することが必要なのだ。革命の現実性は組織―時間の側に、その意味での構造化の側にかかっている。ここは△共同性―共同体▽をめぐる修羅場である。

渡期世界論である」(「叛旗4号」70・4)という我々の「綱領―戦略」観は現段階で如何に把握しうるのかを、分派以降の独自政治組織形成故の△綱領―戦略▽観、内容確定の必要性と、公開綱領論争方式自体の限定性から点検してみよう。

③我々は綱領―戦略指定を、流行もののスターリン主義、反スターリン主義、労働者主義、戦略主義等の諸党派の綱領や戦略と呼ばれているものが、それ自身の内容においては無論のこと、むしろその領域、立脚点、視点においても、何ら我々の考えている革命の現実性を魅きつけ得るものたりえないとの断念から出発した。時空概念を綱領―戦略域に持ち込んだのは、既に検討済みの先驗化された歴史発展論を信じ込み、その限りなく共産主義へ接近してゆく歴史外的時間を恣意的に切断して、綱領―戦略を分岐したり、最大限綱領―最少限綱領、過渡的綱領、綱領―戦術―組織「論」争が展開されている地平に、異質なパースペクティブを持ちこまねば左翼は救われないと考えた故である。つまりは、革命運動において古典を問いつつも戦術とは無縁で、人間の解放を語りつつも組織硬直の常態化、綱領を語りつつも現実政治(議会政治+プラグマチズム圧力)に合わせて内容を切り詰め、結局の所マルクス・エンゲルス・レーニンの学説の知識と現実的な政治、社会矛盾と、運動として成立している諸領域の三

ハ、「綱領―戦略」論の豊富化

①ロで検討した、時間と関係の弁証法とは、時間の弁証法△△革命▽のかくめい過程であり、関係の弁証法△△関係▽のかくめい過程であるといひ換えうる。両者は観念域と物質域の分化の観念域内部への投影を踏まえた上で、各々から現実には不可分なものとして観念域と物質域が統合されている生活―存在の転質と構造化、いわば存在の弁証法へ向かうのである。△国家―市民社会▽逆倒の再逆倒は綱領域で、個々共同性―共同体関係の、△国家▽を越える国家を死滅に至らしめる(経済的基礎に直接環元されない)残存する共同性のイメージを問うと共に、個々対―小共同体が包括共同体そのものを不要とする関係のかくめいの射程を問うている。

②我々は、共同体論―過渡期世界論が、歴史―世界の総体的ではあるが静態的把握に止まる根拠を、外的時間―空間把握の限定性から解き、個々包括共同性逆立と、他方で生産力―生産諸関係と対小共同体の強制的空間限定として動態的なかつ日常的な歴史―世界の存在構造はあることを検討してきた。

次にここでは「綱領―階級闘争の時間性に於ける抽象」、「戦略―階級闘争の空間性に於ける抽象」という原規定の上にならち、「綱領の基底は階級形成論であり、戦略の基底は過者が何の統一性も有していないことを問うたのである。極論すればそれらは既成左翼は実利政治、藤田若雄のいう所の二流の出世コースとしての△生活▽政治であり、新左翼は学生か、収入源泉を先世代の名声や寛容やに依拠し、闘争を飲の種にして恥じないドラ息子達の△趣味▽の政治(マスコミ、映画、演劇、ジャズ等の文化左翼はその典型である)であり、それらの二つ以外に組織形態を定着させてこなかった故に、日本左翼は自閉症か生活相談屋に止まり、限りなく大衆からも革命からも疎遠になってゆくのだとの覚醒の上に我々の足場はたっていたのである。

④我々の綱領―戦略指定は、既成新左翼の理論、作風における批判的意識からとりかかれ、ブント内分派闘争局面で定立された。我々の「綱領―戦略」論は、綱領や戦術に至る内容としてではなくて、綱領―戦略観と党组织の位置把握として、分派―党派闘争材料となり、その端的発現が「八派―全共闘止揚」の主張と、そのための公開綱領―戦略論争の提起(という提起)であった。

我々の「綱領―戦略」論はそれ故、時空四者と自然―歴史―世界観から規定自体の不充分性を豊富化してゆくことと、既存の階級関係の中での政治集団自体の限定の、両者の視点から拡充されねばならないと考える。

⑤「綱領―戦略」論の狭まきは、まず後者の側から、その内容論争においてでなくて、扱い方、主張形式―組織の限定から発現してきた。つまり「綱領―戦略」論のもち込み自体が、つまり論争提起自体が「八派―全共闘」止揚の党派性となるという形においてである。我々が「綱領―戦略」を意識の私所有形態から解き放ち、それに能う限りの豊富な内容を盛り込まんとすること、だがしかし我々が政治集団という規定を自ら止揚しない限りそれは、我々にとっての思想―理論としてまずあるのである。つまり「綱領―戦略」論が権力、党、階級の死滅を射程にしながら、「八派―全共闘」止揚への党派性となるということは、政治的に等価な政治集団間、対政治的大衆間の関係において、我々の思想―理論がたたき台に、論争軸になっているという事である。ここでは、一つの理論としての「綱領―戦略」論は、他政治集団、政治的大衆組織と拮抗しつつ、時空四者を論理に引きつけた把握として社会集団の側から、生活過程から、つまり△関係△の側から限定され、その限定をとり込み豊富化されるものとしてあることを了解せねばならない。

⑥「綱領―戦略」論の狭まきは、理論自体の内容の問題からいえば次のようである。つまり、共同体論―過渡期世界論がそれ自体では歴史―世界の静態把握に留まり、運動過程、

存在の動態把握を為しきれない（否、その断念の上に理論化されたもの）という限定は、両者を各々基底とする「綱領―戦略」論自体の限定でもある。つまり綱領―時間性、戦略―空間性連関を規定しても、総体としての「綱領―戦略」論は、政治組織における時間性に収斂されるのであり、時間の弁証法へ、革命（論）のかくめいへ、その射程と獲得、実現過程を置いているのである。

このことは、政治集団の主張自体が卑少な事実関係と、他諸集団に限定されたものとしてあるという存在形式における限定ではなくて、時間の弁証法が関係の弁証法と絡みつつ△存在△へ迫まる往還の鍵を為しているという、理論形式の限定である。

我々はこの限定を△綱領―戦略△論総体への空間的相対性の集約、関係からの制約として把握、△綱領―戦略△論の内容に常に集団規範、関係倫理が時間的構造化されることにより豊富化されねばならぬと考える。それは、いかえれば革命へ到るイメージ、理論は、政治、生活、社会過程からの実践とアプローチをとり込みうることによってのみ、運動の触手をもち△存在△へ漸近しうるのだともいえよう。

⑦更にいえば、権力を打倒しつつ新たな共同性を形成せんとする革命運動のイロニーは、常に△政治集団△の現実を離

れることはなく、我々は日常の観念域と社会関係域の双方からの限定を常に覚知し、時間の弁証法へ構造化することによって持続の根拠を保持しうるのである。我々が「綱領―戦略」を創り出すのであり、それは我々自身の実在と、観念限定に制約されており、それが△宗教△や△国家△のように到達目標とされたり、我々を規定したりすることは限らない泥沼への一步であることを、「綱領―戦略」論、政治思想―政治的共同性の豊富化の原基にすえておけばよいのである。

このような単純なことも、日本の理論―組織へ貼りついている左翼や、生活―関係に密着している大衆は、己を相対化し、かつ思想―関係を豊富化するという方法―弁証法として体得しえていないのである。

我々は、日本革命運動の困難な壁を、自省しつつ破砕して行かねばならない。

II 革命組織の位相と規準

一、政治―社会闘争の基本性格

イ、個―対△共同性―共同体の逆倒と二重化

①我々はIの三において共同体論―過渡期世界論の歴史―世界観の静態的把握の限定性を、共同性―共同体軸と、個体軸の挿入により豊富化、動態化せんと試みてきた。この方法意識は各々の△国家―市民社会△の逆立構造が、民族国家として世界空間を分割しているという、衰弱過程に突入しながら、今だ最後の解体には至っていない戦後の世界・社会秩序の閉塞性自体をも切開することを要求する。つまり△国家―市民社会△の共同性―共同体の総括力の喪失は、その各々の内部で個体―対△どのような関連にあるか、それらは公的―私的階級と各々の闘争、性格をどう規定しており、社会的階級成熟へのどのような契機、規準を有しているか等についてである。

②市民社会―国家の逆倒を、我々は観念域と物質域の逆倒として把握、歴史的に社会と共同体の相即関係が、分業と所有を基軸に、社会における対△諸階層の共同体における内部的個の平等と対外排他性の異和を招来し社会と共同体は分離し、社会は賃労働―資本関係により私的階級に分断される市民社会に、共同体は共同性幻想としてそり立ち宗教―法規範を産み国家へ二重化されたと把握した。だが国家と市民社会における最も初歩的な考察、つまり生活者は近親と同僚と隣人と日常関係を取りもちつつ、何故生活と疎遠な△国家△を

受容するか、国家は何故包括的共同性の仮象をまといつつ行政権力の行使を行なうか、宗教国家における幻想の累積は何故その強度を下部構造から打ち破られ、また恣意的自由を許容する自由国家へ致るか、等に応えうるためには、右の分析視座に個体1対の軸が挿入されねばならない。

観念域1物質域の逆倒は個体において包摂され、共同性1共同体をかくくぐって生活域として統合されているからである。

③社会11共同体が社会11共同体へ転化し幻想の共同性(幻想的共同体)を産み出す過程は、私にはエンゲルスの手に為り、「マルクス主義者」の常識とされている、原始共産制が社会内分業と私所有の発生により階級社会へ転化する過程だとは考えられない。社会11共同体という時の共同体は、意識により他者と自己の分離を知るが、自ら選択したのではない小集団内に両者が在る事を、生産と戦闘と日常において自然として受容しているという位の意味である。共同体の原基が想定されうるとすれば(凡百の原始共産制+自由性愛論者と異なり)、対関係を自覚的に拘み出した近親者相互が、外敵、自然に対しては必然的に、意識においては自然に組む小集団という日常存在態である。人間は誰も一個の身体としてまず存在し(そのことを意識化するの意識であるが)ており、

程と錯覚するが故に、結局スターリン主義1アナキスム1フアンズム円環を超え出ることはない。

⑤発生1形成過程での1個1対1と1共同性1共同体1逆立の、意識的側面と関係的側面での二重化は、もちろん現存世界の当該領域に受け継がれ、よく明瞭に発現している。

国家と市民社会の総体としての両者間逆倒として扱われているものは個の意識のオートマチスムと、対の関係的限定を根拠として、両者内部での二重化を結集している。国家が産み出す二重性とは、自由な意識的判断主体たる個の数量的集合としての国民的階級と、共同性幻想として数量化はしえぬが、丸ごとの構成員の等質的表現としての民族である。市民社会が産み出す二重性とは、職能1職種に応じた私的階級としての発現と、他方で関係的な生活単位としての家族(対と家族とは世代間結合で異なる)の集合的発現である。国家1社会の二重化について、国家における、社会における地理的人種的、風土的、地縁的要素は、付随的な時容変容可能な二次的形成要素であり、暫次的現存関係要因と考えてよい。

⑥国家は、まず人権的に平等な個の、自由な政治選択が、現象的、経済的利害に規制され国民枠での支配階級と被支配階級に政治的に分化されている。そこにおいては合法的に、実定法を基礎にしての、立法、司法、行政が国民総意を擬制

彼はまず自体からの意識の分離において共同性へ関わり、他方で1対11関係の受容により共同体へ関わり、時空を累積してゆくのである。私は、社会11共同体とは1対11を受容しつつも、自体からの意識の分離がうまくゆかない、回路を脈絡をつけて把えられない観念的に分化していない個と集団関係を指すと考えられる。

④個体と共同体との関わりはヘーゲルに拠る個1家族1市民社会1国家1世界史への観念の弁証過程でもないし、エンゲルス風の階級闘争還元観、支配の道具としての家族、国家でもない。ヘーゲルにおける観念の弁証は個1家族へ最も秀れた規定を与えつつも、共同体意識(自集団に環元される共同意識)と共同性幻想が分離する交点を、日常と世界との関わりとして把み取ることが出来なかった。つまり日常の存在への時間蓄積から歴史を取り出せなかった故に、観念の弁証は、時間の弁証と関係の弁証が分化しつつ存在の弁証(唯物弁証法ではない)に統括される回路を見出し得なかったのである。エンゲルス1レーニンに致る階級国家1暴力装置論は、包括共同性としての性格に応ええないために、遂に1国家1止揚の糸口を見出しえない。つまりは個1対1共同性1共同体との逆倒を、後者に前者を環元し、後者の意識的強調がブルジョワ的性格の剝奪過程、プロレタリア的価値付与過

して統括され運営され、暴力装置が行使され、死刑さえも合法的に遂行される。この側面での国家は行政的国家、制度的国家といってもよい。

国家は次に、細分化された個々の国民の集合としてではなく、丸ごとの総体としての対内1対外表現をなす。これは通常、民族としての表現と呼ばれるが、近代世界の対外交渉の変化に伴って形成されるのではなく、国家の本質的要素が、その局面で発現するにすぎない。総体的国家表現は、歴史的に蓄積された時間の水準を示し、個々の主体意志総和と別個の集団的共同的性格をなすと感受される。この側面での国家は、政治的国家、幻想的国家といってもよい。

⑦社会は、まず自由な労働主体が自由に職業を選択し、労働力を提供し、賃金を私所有するという擬制が、資本1賃労働関係に包摂され、個別企業の労使関係(私的階級関係)の総和が横断的に、資本家階級と労働者階級として経済的階級関係に分化する。国家が市民社会の政治代表部であり、政治的自由と社会的不自由と呼ばれる領域は、先の行政的国家とここでいう階級関係の逆転を指しているのである。搾取される自由を、ルンプロへ転落する自由の側ではなくて、より高く労働力を売りつける自由の側で了解する生活1労働再生産の必然的傾斜が、いわゆる通常の1国家1市民社会1逆倒し

た対応の根拠である。この意味での社会は、ヘーゲルの卓見に依りて私的階級社会、政治的市民社会と名付けてもよい。

社会は、だが次いで家族の家庭としての総和として発現している。ここにおいて労働における共同性、仲間意識は、家庭エゴ相互の対立を媒介した家庭内平和維持へ転化している。労働者は物質的生活の再生産を軸に、ブルジョワジーとの對抗様式の枠組みを定められ、他方で人間の再生産の小枠の設定により横断的階級の結合を解体せしめられ、労働生活の自己(一対)統括から遊離させられているのである。この意味での社会を八間V家族社会、家族併存社会と便宜的に名付けておこう。我々が八国家一市民社会Vを逆倒するということは、この各々の二重側面に対し、制度的国家一私的階級社会と闘い、かつ幻想的国家一間家族社会を止揚するという事に他ならない。

ロ、国家一社会との衝突の四側面

①我々はイで、発史的に個体が時間(自己意識)と関係(対)を媒介に共同性一共同体へ触れること、現存的に国家は個一共同性意識をめぐって行政的国家一幻想的国家へ二重化され、社会は労働一対をめぐって私的階級社会と間家族社会へ二重化されていること、そして国家の二重化が国民(公的階級)一民族を、社会の二重化が私的階級(労働一資対抗総

私有の自由の貫徹する、自由市民社会一私的階級社会における、個別的資本家と賃労働者の自生的対立である。労働条件賃金、労働時間の現水準を確保しつつ、賃金環元率の高度化を目指して、まず個別職場を舞台に闘われる。

社会との衝突は、他方において、人間の生産の場一家庭においても顕われる。それは一部の自由性愛者の言う如く家族の中の男一女関係は、抑圧者と被抑圧者の経済的階級関係の根拠であり、反映であるからではなく、ごく単純なブルジョワ社会は、八家庭Vにおいて、人間の生産と、物資の生産を生活の生産として統合し、その持続が生活一労働力の再生産過程であるということに掛っている。家庭において、自由な個の意識は、他者を取り込まざるを得ず、他方で労使対立の非和解性は薄められるということは、ブルジョワ的家族制度が旧来の階級闘争(政治闘争一経済闘争)の桎梏になっていくからではなく、逆にブルジョワ共が自然関係としての八対Vを家族制度の基にすえて、社会単位としての家庭を、個と国家の調節弁としている故なのである。我々がここで言っているのは制度、機構としての家族(それは賃労働一資本対立の基盤であり、行政的国家による法的区分である)ではなく、生活と生産の原点、関係の原基としての家族の反省である。対と共同体逆立を、自然関係を基にして関係度として再逆倒

和)一家族を産み出していることを検討した。だが国家の二重化、社会の二重化は、各々において非和解的対立局面を産み出しつつ、常に再編されんとし、更にそれをめぐって、更に対立が産み出されるのである。

②国家との衝突は、一方において行政的、制度的、社会的国家をめぐるものであり、これは諸暴力装置一警察、牢獄、裁判所、軍隊との、ブルジョワ共の利益を自由主義と民主主義、議会によって普遍的国民階級として代弁する官僚機構との闘争である。

国家との衝突は、他方において、包括的、幻想的、政治的国家をめぐるものであり、これは民族一戦争へ象徴されるエネルギーの根をえぐり出し、共同性の水準においてそれを超えることである。ここにおける共同性の質をめぐる対立は、いわば見えない壁をめぐる対立である。ただはっきりしていることはブルジョワ共が民衆の共同性の歴史水準の蓄積の上に八国家一市民社会Vをその民族的占有者集合として八世界Vを築いており、我々は諸暴力装置と衝突しつつより深く日常、存在、歴史を取り込み共同性一共同体の新たな水準と、共同性幻想を解体する方途を導き出す以外、勝利の道はないということである。

③社会との衝突は、一方において搾取される自由一無制限しうるか、そこにおける八関係Vの構造とは何かを内的空間の緊張度から明らかにすることを問うているのである。無論、公的一私的階級関係と異なり、民族がそうであるように、家族は、解体されるのではなく、止揚されるのである。

③共同性一共同体の八組み方Vから言うとき我々は以下を了解しうる。行政的国家は、一個の基本的な人権を有すと擬制された個の等質的一票の総和である。幻想的国家の民族としての発現は、いわゆるアジア的共同体特質を承けており、総体として一個の共同性形式が持続し、構成員の変化は無視する(固定した観念の共同性)であり、個々人はその有機的構成部分といえる。これは個体の側からいえば共同性意識が、一個の自由意識空間へ内化するか、総体共同性へ解消されるかの構成的差である。

ブルジョワ私的階級社会は、個が社会分業下で一つの職能をもち、一個の労働力商品として、生産手段として扱われ、その領域での職場一生産、流通、事務機構を前提としての雇用户との闘争である。つまりは自由な個の、自由な職場選択擬制での限定された共同体制(技術、労働工程の共働、共同行使、計画的分業による)である。これは、労働者大衆の対、生活、再生産過程が就業現場の背景に退けられ、金銭所有量に還元されて換算されるが、だが職場共同性を通して行なわ

れる、個（一対）―職場の共同体制である。家族対家族として発現する社会は、ブルジョワ共が労働者に与えた息抜き、かつ労働力再生産の場、最小社会単位であり、それを労働者大衆が地縁、大家族制から分離されてゆく過程で武器となし得ず、一世代の核家族相互結合の△対▽関係へ輪郭を明らかにしつつも関係を構造化しえず、排他的対抗関係に止まっている場である。ここで対は家族へ地滑りし、家族集合としてののみ社会成員を構成しうる共同体制を組んでいるのである。

四者の逆転契機はそれ故別々の形相で表われざるを得ない。

④我々はここで、旧来いわれていた政治闘争が行政的国家との闘争であり、経済闘争が私的階級社会での個別支配抑圧者との闘争であることを了知しうる。それらは我々からいえば、国家―市民社会の各々の一側面のみを対象としているにすぎず、自ら限定性を有しており、無論、おしなべての日本「レーニン主義者」のようにこの領域で「経済闘争を意識注入によって政治闘争に引き上げる」などという主張は、意味のない努力であり愚昧の一語に尽きる。

我々は、国家―市民社会逆倒を了知しつつ、再逆倒の方途を、イメージと抽象化の方途でしか把み取れていぬ頃、右の政治闘争―経済闘争の硬直した理解を納得しえず、ベトナム反戦闘争、全共闘運動へ至る学園大衆闘争、三里塚、王子、

しているが強いて分離すれば以上のようにいえると思う。

⑤我々は国家の二重性との対い、社会の二重性との闘いについて語った。我々が付言せねばならぬのは旧来の政治闘争―経済闘争に対して我々が直覚した社会闘争を国家と社会のレベルへ区別けすることが、領域の確定や、理論的整合化ではなくて、個―対と共同性―共同体逆倒を打破し、とりわけ止揚する上において必須であるということだ。

我々が世界プロ独を言い、社会的階級形成―「階級」の死滅・止揚の過程を言った時の不充分性は、国家の死滅、階級の死滅の（方向ではなくて）根拠をどこにおくかにあった。

このことは、△国家―市民社会▽△民族―世界空間▽を言い、党―軍―統一戦線を言った時にも依然として理論が飛びこえる間隔が不明瞭で抽象的であるという形で残っていた。ここで私は、国家を二重の相で扱い、また社会を二重の相で扱うことで、打倒すべき対象、止揚すべき対象、闘いの方途、我々の諸準備の内容がより鮮明につかみ取れることを強調しておきたい。

我々は行政的国家を打倒し、かつ幻想的共同性（現在水準としての民族）を止揚することで、国家（公的階級）の死滅の、他方で世界プロ独（他に適当な用語がないのであるが）形成の根拠を引き寄せることが出来る。また我々はブルジョ

佐世保、砂川闘争等に二分法をはみ出る異質な要素を直覚し、これに社会闘争の名称をつけた。（理論誌『叛旗』1号等参照）。我々の当時の社会闘争理解は、政治戦略的理解というよりむしろ、闘争を遂行する主体の側に視点を置き、旧来のレーニン型政治的階級論、社民型経済的階級論を統合し、全体化する契機を社会闘争ははらんでおり、これを我々は旧来の政治的、経済的階級と異なる社会的階級形成への契機を為しうると把握したのであった。

我々の右の直覚的な社会闘争―社会的階級論は、我々の闘争経験の上からいっても正しい指摘であった。だがここで必要なのは、国家―社会の二重化との観点で、当の社会闘争がどのような領域での闘いかを明らかにし、そこから再度社会的階級概念を鮮明化することである。

我々の言ってきた社会闘争は、国家の二重化との関連でいえば幻想的国家―民族域に、社会の二重化との関連でいえば△間▽家族社会、間接的生産現場、何より社会的日常の領域に、その両者に未分化なまま両在していた。ベトナム反戦闘争、佐世保、王子闘争は前者にくくられる新たな質の社会△政治▽闘争であり、全共闘、三里塚、砂川（一九七〇年まで）は後者にくくられる新たな質の社会△経済▽闘争である。両者は、社会性―階級性の主体的側面で分離しがたい部分を有

ワジ―を打倒し、かつ間家族社会関係（これも最適の用語がない）を止揚することで、階級（私的階級）の死滅の、他方で社会的階級形成の根拠を引きよせることができる。

⑥個と国家の逆立は、自由国家における等価な一票の集合として擬制されつつも、個から共同性が疎遠なものとして定立されるといふ等質空間を解体すること、つまり個の身体的、存在的限定を観念の普遍化、対象遠隔化作用で突破せんといふ意識の自律的オートマチズムに、別の軸を挿入することにより逆過程への契機を付与すること、つまり内的時間（意識空間をほらむ）が内的空間（関係の構造化をほらむ）と抵触し、個へ環元されつつ自然的共同性の射程を引く、そのような時間の弁証法を掌中に行うことなくして止揚しえない。

個―対と社会の逆立は、家族がその農本的な自然的基礎、地縁―職住一致、血縁―大家族居住を解体され、土地から追放され、都市プロレタリアに転化する中で、生産、伝承機能を失ない、一消費単位化したこと、この側面へ資本家階級打倒の過程で止揚の方途を見出す、つまり対△関係▽が事実化し、拡散する相互空間過程に、時間化の軸を挿入し、日常を一步喰い破る予料と△対▽との往還の中で、関係の弁証法を掌中に行うことなく、遂に止揚されることはないのである。

ハ、革命組織の政治的任務

①現代が「国家—市民社会」の共同性—共同体の集約力の解体過程にあるが故に、政治的戦線での闘いにおいて革命組織はまず以下のことに留意せねばならない。

日本国家は、行政的國家の質として十二分に爛熟している。日共や社会党の主張するブルジョワ民主主義は貫徹されているのであり、そうであるが故に逆に彼らは、国家秩序への反逆—国民義務違反者を徹底して弾圧し、みせしめにし、合法的に追放し、獄舎へ隔離せんとしている。我々の国家権力、暴力装置との闘いは苛烈を極め、69年秋以降の後退戦下で、非公然ゲリラ闘争と、その掃揚作戦との対立が、組織をめぐる、非公然領域を主軸にした存在防局面へ三里塚東峰十字路攻防をその象徴として突入している。我々は行政國家との闘いに組織を重層化させ、我々自身の組織に行政的機能分担を（機能として）主体化し、全戦線での闘いを担い切ると共に、公然—非公然組織化、弾対部門の拡充、内化を獲ち取らねばならない。

②だが我々は「国家—市民社会」の共同性—共同体の集約力の解体が、ブルジョワ民主主義の完成が即ちその解体への歩みであるという行政的國家の爛熟局面においてよりも、より民衆を個々の国民の総和としてではなく、単一の包括的共

値づけながら進行する。政治組織にとっては、自らの存在としての限定、日常的限定を豊富化させるものとして、この関係のかくめいを了解し、政治内構造化しなければならない。④当面の政治革命を目指す革命組織の主戦場である「行政的國家」の闘争は、まず幻想的國家を止揚する個—共同性のビジョンにおいて、次いで日常の關係の側からの組織成立への緊張度において、限定され、豊富化されるものとしてある。つまり革命組織は「行政的國家」で全面激突しながら、革命のかくめい—時間の弁証法と、關係のかくめい—關係の弁証法をわがものとし、二重に存在の弁証法へ漸近せねばならない。この回路を見出してみ、政治革命は「民族—世界」空間を破砕し、社会革命の質を内包した、國家の死滅への歩みを自ら歩むことが可能なのである。

⑤我々の運動戦略たる中央権力闘争—マッセンストライキは、右の考察に従って、性格規定をより鮮明にさせ、現在の性格が確定されねばならない。即ち、行政的中央権力打倒闘争が、中央権力形成闘争に質的に致るには幻想的國家の止揚の課題をとり込まねばならない。また、マッセンストライキは、いわゆる労働者ゼネストでもなく、政治的圧力ストでもなく、政治性をもった社会闘争としてその広さと深さを保障されねばならない。そして主体的後退戦下の運動戦略は、よ

同性として基礎づけ動員する幻想的國家の側で壁にぶつかりお先真暗の状況にあることを見ねばならない。つまり共同性の時間的蓄積の民衆への内化に支えられた、戦争担当能力に象徴される民族的表現の根拠が、戦後自由國家としての日本がデスポットとしての天皇を横へうっちゃった復讐として、私生活民主主義とプラグマチズムの社会構造の側から解体しているのである。我々はこの領域で、ブルジョワジーをつまりは彼らが学んだ共同性発現の最高形態、民族としての國家を止揚する思想戦争に打ち克たねばならない。このことは、政治組織にとっては、あれこれのプロ独への道のプランよりも、現在のには、時間の弁証法をわがものとする事、つまり共同性幻想に蓄積された民衆の時間を、新めて問い直し、時空変容の回路により、民衆の側へ奪回し再構成すること、それを我々自身が政治思想の方法としてつかみとり、持続の根拠へ転化することとして問われている。

③職域、地域を媒介した（家族域は、先に述べたようにそれ自体としては集団との媒介たりえない）社会集団においては、闘いは資本—賃労働關係の非和解的対立を遂行しながらも、その対抗局面の職域に切りとられ、物質生産過程に切りとられたる狭さを、異質な家族域も、何よりも共同体制の転質、社会闘争の質の、關係度の持ち込みとして包摂し、価値政治的に「時間」化され、社会的に「關係化」されて、先行的に政治的「社会」拠点闘争と「経済的」社会拠点闘争として意志的に持続され、相互を鏡としつつ、質への転化を量へ突き放なす作業を準備せねばならない。もちろん拠点闘争を持続しつづより詳細に、大胆に、政治革命過程、下の政治組織、社会組織の編成と任務についての内容を獲得せねばならない。

二、革命組織の位置と限定

イ、政治集団と社会集団の位相

①政治集団と社会集団の形成は、國家と市民社会の分離、逆倒自体に根拠をもつ。だが、政治集団と社会集団はまずもって政治關係と社会關係のひずみに応じて自然成長的に形成される。

②政治集団は、行政的國家への参与の国民的権利と義務に従って、まず自然成長的に形成される。これは、既にあちこちで述べたように宗教國家から自由國家への転位に従って、國民が等価な一票の投票権を持ち、それぞれの政治意志に従い、自由に政党を作り、また政党を選択し、議会へ送り込むという擬制形態をとってなされる。國民に選挙された國民政

党は全体で議会を形創り、国会は立法権を持ち、相互に分立するとしながらも行政、司法を統括する。ここで言う行政的國家とは、市民社会内の資本家と労働者の、生産手段の私所有と生産過程の共同性格の矛盾をめぐって、つまりは生産力と生産関係をめぐっての階級対立、個別企業内の私的階級対立を基礎にして、私的階級対立を、基本的人権にもとづく平等な一票投票を媒介して公的政治的階級対立（議院内野党と野党）に置き換え、国民の合意の名の下に膨大な行政官僚群がブルジョワジーと与党に雇われ、実務に携わる國家である。

ここにおいて市民社会における賃労働―資本関係が、労働者大衆の生活の生産、再生産過程を支配している限り、それに基づいて労働者の資本家との対立が企業内闘争、生活、労働条件向上闘争に止まる限り、経済生活を支配している資本家の思想は支配的な思想であり、平等な投票は政治支配の合法的正当性の確保の過程であり、ブルジョワ独裁國家は決して国民↓国民党↓国民議會を通して打倒されることはない。

③ 社会集団は、右にも触れたように、賃労働と資本の対抗関係の中で、職場労働支配を通して日常生活、再生産過程をも支配している少数の資本家への、支配されている多数の労働者の、抵抗、闘争、団結として自然的に形成される。資本は農村から都市へ追放されたルンペンプロレタリアートに徹

のように接近方法は異なるが、労働者の普遍的階級的団結を労働者存在の被搾取者故の革命性、正しい労働者階級の反帝十反スタによる主体性の獲得を基に、労働組合の強化を主張してきた。

⑤ だが、右の新左翼の国民党批判は、その対象が同一な行政的國家である以上、その國家批判は対象的規定性を免れない。それらは結局、中核派風な政治宣伝内容と政策批判における急進性、議會参加（都、区、市議會）と議會への街頭圧力闘争の折衷として、國家批判の方法と手段の差で国民党と対立（反スタ主張をバネとして）するに過ぎないか、第二次ブントのように國家を解体する國家批判として議會の土俵を拒否しつつも、暴力革命、プロ独の国民政治外部からの注入と、行政的國家の実体的発現―諸暴力装置との激突の自己目的化、暴力装置の解体ではなくて反暴力装置闘争の展開による政治焦点化、武装によるプロパガンダに止まってきたのである。我々は行政的國家は、議會内外の批判勢力の拡大によっても、特定部門での暴力闘争によっても解体しえず、結局暴力形態を採っての行政國家批判として扱われ弾圧されるという既成構造に対して、行政的國家の解体はそのような暴力的批判、突出に、幻想的共同性としての國家批判と止揚の視点を加え、綱領化―内化することによってのみ可能な

底して血の搾取を行ない本源的蓄積を為すが、近代的國家―市民社会編成の確定と共に、自由な労働契約の擬制による労働力確保を行なうようになる。労働条件の確定、団結権、闘争権の獲得は、まず個別労働関係での階級的闘争の成果であるが、資本家の総和はこれらをも行政的國家の法―政策制定過程を通じて、自由國家においては恒久的労働力確保手段として許容するようになるのである。賃労働―資本関係を軸に形成される私的労働者階級は、法定立とその保障への圧力闘争を通して政治的に（国民党支持強化の範囲で）横断的に結合しうるが、そのみでは社会的には団結しえず、私的階級対私的階級は企業所属意識と自らの職能への（資本家に奨励された）自負心により、互に競争し排他関係に止まる。

④ 自然的政治集団（国民党）は、価値意識を、政治、議會、法に転倒して吸引され形成される。自然的社會集団（労働組合）は、価値生産を職場に限定し、職場に固定されて、職場秩序―賃労働し資本関係を前提とし、その枠内での要求獲得集団として形成される。このような段階にある議院内野党（社、共、公、民）と労働組合（総評、同盟、新産別等）に対し、それを越え出んとした新左翼は、ブント、中核派に代表されるように暴力革命、世界革命、プロレタリア独裁等の政治内容により議會政党政を批判し、また解放派、革マル派

だということをはっきりと明らかにせねばならない。もちろんその為には彼らが、党派や、党派の路線や、それを裏付ける「マルクス・レーニン主義」やの、政治革命の先行を社會革命への優位ととりちがえたり、階級意識形成ととりちがえたり、國家―市民社会転倒に見合った観念的転倒を再転倒することが、党形成を目的化し、価値化過程と取り違えるロマン主義者のアメ玉を捨てる事が、困難であろうが不可欠の前提である。

⑥ 社会集団の自然成長性は、個別賃労働者と資本家関係に在る限り、より資本のくびきを自らに課してゆく經濟主義を脱却し得ない。無論ここにおける經濟主義の団結の基礎は自由選択した職場の同一性に拠る偶然的契機ではないから、經濟主義は必ずより高価に労働力を売却する競争に、資本家からの分裂工作と労働者の自己保身から、戦線分断され、質の高い闘争を展開すればするほど第二組合、組合離脱、御用組合が形成され、統一と団結が解体することは必至である。經濟主義を社会集団が克服しうるのは、自己の生活手段、属性としての労働者性と、それを担保する日常的な対立關係を軸にした生活者の位相を絡み合わせ、職場へ逆流させる事である。解放派や革マル派の經濟主義的団結の克服の方法は、共にプロレタリアートの感性的、理念的先驗化に拠っており、

労働者の抑圧者故の反逆の不可避性、あるべき世界的、普遍的階級的団結や、政治意識化され階級意識を持ち反帝反スタ理論を受け入れるべき真の主体的階級的立場の高見にたつて、学習や指導を語るが故に、組合の経済闘争における左翼傾化や、組合内党派へゲの拡大を結集するのみで、決して経済主義は克服され得べくもない。

⑦政治集団の自然成長性は、遅れてきた赤軍―旧野合戦旗派諸分派に代表されるように、スローガンや方針や宣伝における暴力的、革命的言辞の羅列（何処の集会や、個別闘争においても革命戦争や、烽起や、内戦をしゃべらないと気分が体まらない）やこじつけ（部落、入管、婦人、学園、職場あらゆる戦線での闘いを世界革命戦争の一環と称する）によっては止揚されず、それは逆にますます意識的自然成長性に拝跪しているにすぎない。

社会集団の自然成長性は、「レーニン主義者」のいうような系統的に全政治攻撃との関わりを明らかにし全人民的政治闘争においてのみ、個別経済闘争は止揚されると主張し、指導する事においては克服されない。それは八国家―市民社会―逆倒を再逆倒する視野をもたないが故に、ルンプロ、左翼ゴロとして社会集団から叩き出された労働者群を目的―価値としての政治集団に何の保障なく抱え込む位がおちである。

殆んどないといってよい。党組織論はこれまで、それが如何なるイデオロギーを有するか、あるいは如何なる現実的立場点を有するか、更に現前の要求に如何に答えるかとして立てられてきた。だが第一の革共同に典型的な反帝反スタ戦略―イデオロギーの主体性論は、党を目的実現集団（共産主義的人間の団結としての党は永遠の今を体現する）として価値化して把える点で、先にイで述べた意識的転倒―政治集団の自然成長性の枠の中にあり、それは相対化視点を組織過程に繰り込み得ぬという点で自覚的根拠をもちえない。第二の解放派に典型的な労働者階級に依拠した労働者党というのは、いわば労働者の普遍的団結たるべき労働組合の政党化論であり、またプロレタリア物神化―社会集団の自然成長性の枠内での想定である。彼らの労働者自身の労働者党（出身階層を問わぬレーニン党への否定）願望が、結局前衛―労働者党―行動委員会が意識化（対象領域の拡大）度によって区分されている事により破産している事については指摘済みである。第三の、運動主義による党形成は、安保闘争以降、革共同―解放派の党―プロレタリア物神に対し、共産同によって主張されてきた。だがこれはレーニンが前提を抜かして『何をなすべさか』で述べた社会民主主義者の実践的任務、即ちツアリとの闘争、経済主義者との闘争、経済闘争への政治意識の持ち

またそれは、労働者物神化にもとづく、如何なる経済闘争の徹底化からも、組合内政治集団員の拡大によっても克服されることはない。彼らは、労働者を物神化し持ち上げていように見えて、自らの観念の上でのプロレタリアートに拝跪し、それに自ら接近し、安堵を得るための材料として、社会集団としての労働組合、社会運動としての労働者運動を利用しているにすぎないからだ。

我々は政治集団における自然成長性の克服も、社会集団における自然成長性の克服も、共に各々の対国家、対社会における異質な要素を取り込み自らを相対化することによってのみ可能だと考える。このことを再度確認して、革命組織を指す政治集団としての我々の根拠と、相対化側面と、また対個、対生活、対社会集団関係における自然成長性を逆倒した関わり方を明らかにしてゆきたい。

ロ、革命組織の自覚的根拠

①革命組織の自覚的根拠は様々な側面からスポットをあてられつつ、結局個の思想的政治的―集团的表現の根拠の鮮明に行きつく。ここで政治集団にとっての規律は従前の内部規律の他に、対外関係の規律の根拠をも与えられる。

旧来の組織論は、組織それ自体を扱って展開されたことは

込みによる労働者大衆の政治的組織化を、そのまま党機能として横すべりさせたにすぎない。それ故ここからレーニン党の機能の至上化―戦略戦術の党、計画された戦術が産まれた事は必至であったといえよう。

②硬直した党先験論の革共同、プロレタリア先験論の解放派は救われないうとして、いわゆる運動主義―実践の中からの政治組織形成を掲げてきたブント系＋それに影響され続けたきた諸潮流の自然成長的末路を一寸見ておこう。

赤色戦線の黒木龍思は「我々にとって結合の『核』は何か」（『読書新聞』35周年特集号）に「共同態は、近代的なそれであろうと、また前近代的なそれであろうと、常に労働と生産に向けて編成されるものであった。しかし、歴史的には、結社存在のみが、生産と労働に対する自生的関係を断つたものとして、独自のである。かかる結社存在を、共産主義政治のもとに把え返す時、国家権力と持久的に対峙しつつ、人民を「近代的―前近代的な」疎外された共同性から解放し、権力主体へと打ち鍛えていく、共産主義者の党が獲得される。無償の団結たる「共産主義政治結社」は、したがって、近代世界の全体に非和解的な敵対者としての「権力闘争の意識的実体」―「人民の指導的核心」なのである。」と述べている。共産同赤軍派の八木健彦は問に対し『もし我々が今再び

「団結の核は何か？」といった問を発するならば、それはあたかもカントの「 \wedge ものそれ自体 \vee を問うかの如く、觀念論と解釈学の沼地に陥りかねない。 \wedge 純粹意志 \rightarrow プロレタリアデー \rightarrow 永遠の今 \vee や、 \wedge 主体的原理の展開 \vee や、関係性についてのえんえんたる解釈や情念論や、原始共同社会へのロマンの志向や、未来の共産主義社会のあるべき人間への志向等々といったように。それは実践的に形造られる他にはなく、日々の革命的实践活動の持続によって鍛え上げられる以外にはない。』(その革命的中核 \parallel 指導的核心として党が組織されねばならない。)」と書いている。

レーニン主義党機能論と毛沢東人民路線の日本的結合が両者の差異と同一の全てであり、何ら「団結の核」に自覚的に答えている訳ではない。彼等には党組織の位相も水準も根拠も、その領域区分さえもわかっていないのである。それでいて我々をも批判しているつもりなのだから世話はない。本稿読者諸君には彼らの誤りを一々指摘する必要もないだろう。無論それ故、こういった両君が呼びかけ、領導しているベトナム \rightarrow 中国 \rightarrow 北朝鮮潮流の結集 \parallel 「8・25共闘」が、情勢変化により浮沈するのは当然のことであるとも了解されるだろう。

③我々もまた革共同の党・理論主義に対して大衆・運動主義を採ってきた共産同の血をひいておる。だが我々は諸派と

出すこと。第三に、 \wedge 政治 \vee 活動、日常的な権力との激突の蓄積、体験化を通してのみ、現実的な国家権力打倒の回路を見出すことが可能であり、個の思想はその必然性を主張するに過ぎないこととして了解する。

b、革命組織は何故政治組織として形成されるか。それは \wedge 国家 \rightarrow 市民社会 \vee 逆立を再逆倒するにはまず国家権力を打倒せねばならぬからである。ブルジョワ国家権力の打倒は自然成長的国民党によっては為し得ず、政府の交替ではなくてブルジョワ政府形態自体を打倒するには国家暴力装置と日常的に対決し、幻想的共同性を止揚する、権力死滅の回路を繰り込んだ意志的革命組織によってのみ可能である。

c、革命組織の結集基準は何か。それはまず、国家権力を打倒する政治革命の戦略、戦術、路線、政治内容の選択によってである。政治内容の選択による組織選択は、自ら形成している政治思想に最も近いものを選ぶという意での対象的選択である。この基準は生活域と綱領域から相対化される。

d、革命組織は何故、政治集団として形成されるか。強大な敵に立ち向かうには密集した実践力が必要であり、これは戦線の拡大、半公然 \rightarrow 非公然域活動への突入により更に必要である。集団における相互了解、機能分担、共同目標実現活動における規律と対権力闘争における戦線離脱、転向者、協力

異なり思想的理論的に革共同型党至上論の自然成長性を批判し、相対化の視点を階級による党の限定におき、社会的階級形成の一環に党形成が位置することを述べてきた。だが、この党の相対化視点、価値 \rightarrow 意味再逆倒等は、革命組織自体の自覚的根拠を外延から扱っているのであり、内包を明らかにし得てはいない。以下箇条的に明らかにしておきたい。

a、 \wedge 政治 \vee 選択の契機 \rightarrow 根拠は何か。国民党は議会を通しての民衆福祉を言い、左翼は国家権力の弾圧、存在自体の理不尽性を言ってきた。だが、国家権力の支配は国民に及んでいるにも拘らず、民衆は一票の行使不行使等の政治活動を行なわなくとも生活出来ており、思想家も文字者も、觀念領域を対象とするが、政治活動を行なわなくとも自足している。ここにおいて、何故 \wedge 政治 \vee を選択するかが、国民義務や、弾圧への反撃としての自然的対応としてではなく別の領域で問われる。レーニンはこれに国家権力打倒の政治的目的意識性を対したが、これは同義反復に過ぎない。我々は、政治活動選択の根拠を、まず \wedge 政治 \vee は自然、歴史、世界、生活を最も普遍的に扱いうる抽象性のレベルを有しており、觀念的世界了解欲求 \rightarrow 至る意識の自然成長性は必然的に \wedge 政治 \vee を選択すること。第二に \wedge 政治 \vee を通してのみ抽象的自然、世界、歴史了解はその集中環を国家権力打倒 \rightarrow 止揚として見

者への措置、自然的に発生する对生活、対社会集団関係の処理等の共同経験蓄積と体験への内化により形成される気風によって、 \wedge 政治 \vee は大衆の信頼と友誼関係を獲得しえ、政治的意識的自然成長性を日常的に克服可能なのである。

ハ、規範 \rightarrow 規律と綱領 \rightarrow 戦略

①政治 \rightarrow 集団としての革命組織は、その日常的現実的活動において戦略内容を政治的結集軸とし、集団運営において共同確認事項を内部規律として有する。ここで問題なのは \wedge 政治 \vee 集団としての革命組織は、その戦略内容を何によって担保しうるか、政治 \wedge 集団 \vee としての革命組織は、その内部規律を何によって他領域とコミットさせるかである。つまりは政治集団の自然成長性の克服は、政治 \rightarrow 集団においては如何に為されるかの切開である。

69年共産同内論争は、政治過程論と戦略戦術の党を最後の克服するものとして綱領問題を祖上にのせたが、遂に諸分派は我々の言う「党派の私から解放された綱領」の意味を理解する事なく、戦略の時間的射程を延長したものが綱領だという所に留まった。戦略射程は、世界プロ独までか、社会主義までかとか、共産主義を組織する党、共産主義までの永続革命戦争等の論争内容がそれであり、それらは結局田原芳

の世界一党独裁（プロ独）論に典型化されたように、国際党派闘争遂行とスターリン主義的墮落を防ぐ為には、革命党の任務は更に強まるとして、革マルとは異なる回路を通して党至上へ致り、政治集団の自然成長性への拝跪を盲目的なまでに押し進めたのであった。

組織規律については、60年代党派にあってはおしなべて名目的規定であった。これが改めて問い直されたのは、67年以降の暴力闘争展開と大量逮捕、弾対問題の浮上によってであり、特に我々にとっては、昨秋東峰十字路戦闘、沖縄批准阻止闘争展開に対する、報復弾圧、デッチ上げ逮捕、実刑判決攻撃との組織存在をめぐる攻防と、その過程で登場した自供、転向問題等への回答の困難さに拠ってである。だが連合赤軍における私刑殺人に象徴表現を示したこの領域に対して、一向健はじめ旧赤軍派指導部は毛沢東の人民路線「党内のあやまった思想の是正について」を援用し、党内矛盾の処理方法の原則確立を語り、他党派は党の軍への従属や革命路線の誤まりを指摘していたにすぎない。

②我々の考えでは、革命組織における戦略は綱領によって相対化―総体化され、規律は規範によって相対化―総体化される。

綱領―戦略についてその内的連関については様々な箇所

それは政治党派―集団を限定対象としたものではなく、諸階級、諸階層総体を対象とし、世界的、社会的階級形成―死滅を目指すものである。政治集団に対する社会集団の評価の軸は、ここでいう綱領域にあり、直接的には政治内容にとり込まれた綱領域にある。ここで政治党派は戦略を政治的結集、党派闘争基準とし、綱領を自らの日常性、存在域での社会性の扱いも含めて社会的結集基準とすと言ひ換えてもよい。

③革命組織の規律は、階級規範によって補充され、相対化され、総体化される。このことは、我々が抱える現下の課題との関連では以下のようなものである。

④行政的政治過程が社会関係総和の幻想的疎外態であるという意では、政治集団規律もまた恒久的なものではなく権力闘争性格に規制された時空的制約を有している。これに対し階級規範は、人間史の成熟度に規定され、集団関係の中の個―集団相互レベルにおいては言語化されない社会規範の性格を有しており、日常、存在、生活に根をもち、普遍性を貫通する根拠をも組み込んでいる。

⑤政治規律が権力闘争性格に規制されているとは、攻防局面が議会折衝―街頭圧力行動―街頭―社会拠点武装闘争―持久戦下の存在攻防への転換に応じて全左翼を変質せしめた事で自明である。69年転換といわれるものがこれであり、24

述べてきた。だがその双方が党派にとってどのような意味もつかについては殆んど述べていない。党派は政治組織として国家権力と対立し、それを打倒せんと様々な戦線での活動を持續している。この領域において問われるのは方針提出政治指導、闘争遂行であり、政治的結集の軸は路線であり、戦略、戦術、政治内容である。戦略、戦術、路線、総じて政治内容は一党派における結集軸であると共に、党派闘争の軸でもあり、大衆的討議、党派支持の素材でもある。つまり政治内容、戦略は政治党派内の結集軸、権力闘争の質を定めると共に、他の政治党派、大衆的政治団体との拮抗、評価の軸でもある。党派は政治内容を軸に結集し、党派闘争を行ない、大衆にその支持を問うのである。

だが、この戦略は、行政的国家を打倒し、プロ独を形成するための政治革命戦略である。戦略は必然的に打倒、止揚対象たる「政治」の枠組みの限定を有しており、また意識的にしろ無意識的にしろ政治へ踏み込み、踏み込みつつあり、踏み込むだろう諸政治集団、大衆を組織対象の限定として有している。ここで戦略の正しさは、旧い政治を相対化し、廃絶する共同的イメージを問う綱領を鏡として、その戦略がどの位綱領的位相を政治化し得ているかで定められる。ここにおいて綱領は、形式的に一箇の党に属していても（形成過程）、

時間の党生活論や、非合法規律、軍と党論争等はこの端緒をなしていた。連合赤軍を頂点として政治―軍事過程を主眼に組織規律を定める、いわば旧い皮袋に新たな酒を盛る方法はそれ故破産し、我々はその破産根拠を政治集団の限定性と階級形成の視野から明らかにしてきた。組織規律における綱領、軍規・生活倫理の区別と階級の統合の視点がそれである。

⑤権力攻防を政治のオートマチスムから、自律性を受容して扱えば、存在攻防はレーニンの政治意志、献身性、英雄主義の強度に還元され、更に組織防衛が一人歩きする事は必然である。革命過程と主体意志のずれは、政治悪や、スターリン主義の裏切りや、党代行主義批判として為されてきたが、止揚の道はそのようなリアリズムという名の事実主義、イデオロギー、組織構成の領域にはない。

⑥政治規律を動態的に行動、戦闘過程からみれば、党派が如何なる段階にあれ集団行動―防衛規律は必須であり、その内化の度合いが集団力の強度を示すことは自明である。だが我々が留意せねばならぬのは第一に権力、ブルはここで対象としている行政的、強権的、暴力的、性格の他に幻想的、共同的性格を二重に有していること、第二に行動、戦闘過程は権力攻防が煮つまる程、作戦、兵、救対、弾対、財政等の非公然域の比重が強まること、第三に右述の第二領域は、

カンパニア、スケジュール闘争と実践内容が異なると共に、逆説的ではあるが「政治の日常性」を常に問われるごとくあるということである。

④我々は右述のような権力闘争の二重性を、規律―規範関係へ結実させねばならない。それは、政治集団内部にとって政治的共同性、戦略域に拠をもつ規律と、政治思想、綱領域に組み込まれる規範の構造化である。

⑤規律は実践行動過程を律すと共に、行動の徹収、集約、弾対局面をも律する。大正行動隊テーゼ等行動集団、社会集団の行動規律は、前者を扱うが、後者（殺人と山崎自死対応等）を扱いきれず、つまりは日常組織へ回答しえなかった。我々が現局面で重視せねばならぬのは、大衆闘争経験で自然成長的につちかわれる前者の側ではなくて、権力攻防水準を把握れば明らかに後者の解明である。このような事後規律は制裁、罰則としての性格から、日常規律（規範）としての性格へ転質させねばならない。

⑥現在我々が直面している規律問題は、弾対領域に集中しており、当該問題について、はっきりと政治集団規律と階級規範の二重の規律で回答を出さねばならない。つまり組織利益違背者に対しては、政治集団内部問題としての組織と任務の縮少、格下げ（？）、権利停止＝思想点検任務付加を主軸

得るようになり、欲求や禁忌や脅威をはらみつつ共同体意識が自らと逆立した架構の幻想の共同性を産み落す。ここにおける個と逆立する共同幻想はそれ自体が人間（個としての）を抑圧し、制御する自動作用を持ち、宗教へ遂には自由な法へ擬制される。個にとつての政治の、就中集団の選択はこの共同幻想と個の逆立の観念的理解を、再逆倒への欲求と現実的推進への参加として克服せんとするもの、矛盾の選択である。そこに於て観念の上では自立した個々と共同体の融和が希求されつつも、現状での最上位の共同性（国家）が異和と感受されると同様に政治集団自体も予め異和と感受されており、その壁を理論的確信や共同的体験や、自己救済欲求によって、強引に飛び超えようとする事だからである。

⑦自由な政治選択、政治の恣意的選択の限定とはそのことであり、その限度において個は自己責任を取りつつ、いつでも政治を止すことが出来るが故に現在の政治へ全力を賭けるというS。T。166によって提唱された政治はその典型である。私は逆説的にS。T。166の政治スタイルによって日本における自由国家は定着し、政治的民主主義―基本的人権尊重、社会的民主主義―搾取の自由と私有財産保障の貫徹との逆倒を最もラジカルに衝き得たと考える。戦前の天皇制―大衆ナショナリズムと醒めた知識層という構図と逆に、戦後の社会過程の大衆

とする処理と、政治集団から追放するが、階級敵としては扱わず、自己教育を軸にして再起する余地を留める階級的措置の二重の回答が必要なのである。

⑧行政的権力との闘争においては、特に弾対領域においては個人の些細な不注意、ミスも数等倍の重さで組織マイナスへはね返ってくる。特に政治思想、共同性を深く支持しながらも、政治集団外要因―家庭、獄中等よりの圧迫により、戦線離脱、獄中自供に到る部分等は組織に決定的ダメージを与える場合がある。だが我々は、そのメンバーの一回の行為が与えるマイナス局面を、時間度に置換して長期射程で、政治集団員としての資質の適否、階級利害の幅で同じ戦線として扱いうるか否かを、慎重に定めねばならない。そして右述の領域で扱いうる部分と、直接の利敵―通敵行為者、自ら政治思想・共同性を支持せず、あるいは支持することを擬制して組織破壊をなした者への、組織追放＝階級敵としての処分とはっきりと区別しておかねばならない。

三、政治集団と規律

イ、個と政治集団

①個は意識発生を契機に、対象遠隔化操作を抽象して行い

は金を稼げず、貯める事は美德であるというアメリカ的価値感を受容し、のびのびと「私生活」を享受し、知識層は政治過程で「マルクス主義」に縛られ、これと「憲法理念」との切断面に規定され放しであるという構図自体の解体を、安宝プントは萌芽として、S。T。166は存在主張そのものとして示したのだということだ。問われるべきは、（国家―市民社会）構成の度合いと、その中の主体の解放度―階級の成熟度なのであって、支配のイデオロギーが、天皇制か憲法かマルクス・レーニン・スターリン・トロツキー・毛沢東主義かはさして重要ではないことを戦後の過渡期世界は示した。その意味では、中国は宗教国家であり、日本・中国の「マルクス主義」は宗教の水準にあり、戦後日本国家は自由国家であり、戦後ヤンキー民主主義は法の水準のイデオロギーであったと口惜しくも言えるのである。このことはスターリン主義批判、主体性論の提起の帰結が日共―革共同の経済決定論と主体的反映理論の円環が如実に示しているものである。知識層は、プロレタリアコムプレクスや、罪意識や、革命幻想への参与で疑う事なく、あるいは黒寛式のあらかじめ定められた主体的意識回路をたどつての主体的参加の擬制によって文字通り頭から「戦後マルクス主義」を受容したのである。

②だが、「宗教としてのマルクス主義」への反措定、恣意

的政治選択はどのような位置を占めてきたのだろうか。党至上、中央優先、多数優先、機関優先の美名のもとに、ブルジョワ政治の擬制をそっくり革命組織に移入した国民党―日共に典型的な様々の形をとった「スターリン主義組織体制」に對置した、個の想像力の駆使とその範囲での検証と、個々がやりたいことをやるという規準の下での行為責任論は奈辺を占めるかである。自由な小ブルと開き直った政治選択、運動の展開の為のみの組織結集は、それ故にこそへおもしろい闘争が尻すばみになると同時に、政治運動の根拠も、組織持続の根拠も崩壊し、これまでのあらゆる宗教的政治組織と異なり、自らの主旨通り、自由意志で組織離脱し、解体した組織を踏みつけ、次の戦場たる学園や職場や生活やに分散したのであると私は考える。

つまり恣意的政治選択はそこにおける逆説的な戦後民主主義の最良の個人主義とその自由結集による最大エネルギーの統括を、理念的にまた生活原理として転質させる方途をもたぬ故に自ら進んで解体したのであって、それらに對してもともとそのような恣意は架構の自由なのだとか、小ブルの主體的自己満足の論理だとか批判してもまったくの外れなのである。

④恣意的政治選択は、民衆レベルにおけるプラグマチズム

のでもなく、他者に対して集団および私は決して侵してはならぬという自己内倫理を、他者および集団にたいしては―それぞれがそのような自己内倫理をかかえた所の集団として。』とテーゼ化して、これを『私が信じたへ共産主義がこのよくな像である』とし、それを『捉えたのは、革共同をはなれてである』と続けている。私の感慨は、小野田もこれまでかという所である。『へ夢を信じた私を笑ってよい』もなにもない、その夢へ共産主義の集団―個人把握が誤っているのだ。行動集団が不可避とする非情なへ毒を語り、吉本隆明の連合赤軍批判に近代個人主義として与えた批難は、まったく逆説的に彼自身にはね返ってくるのである。右の共産主義のへ集団―個人へ像自体が、近代個人主義、相互不干渉のアナキズムの水準にしかないことを、小野田は知るべきである。4号以降が進歩か退歩か、それはどちらでもよいが、私はここに致って小野田は、存在も日常も歴史も、また時間―関係の弁証法の糸口をも放棄した：否実際は何もわかっていなかったんじゃないかと同情し、かつ落胆するのである。

⑥スターリン主義と恣意主義は共に止揚されねばならない。つまり政治―社会運動の空間的、感性的解放感、時間性への繰り込みの回路を通してのみ組織へ観念的（観念論とは異なる）に蓄積され、持続の根拠を持つのである。個は意識を

の定着、消費文明―情報社会化と、他面での権力と革命組織との存在攻防局面への突入によりへ政治選択そのものへの拒否として現出している。政治運動の恣意性は、政治過程が吸引力と大衆的波及力を保持している局面で、政治の相対性を熟知しつつ全力投球するというやり方によりエネルギーに転化したのであって、「やりたいことをやる」という規準は「やりたいことも、おもしろいことも何もない」という白けきった拡散状況の中で、一個の恣意をも支えきれないことは自明である。逆に言えば、党倒錯者群は別として誰も好きこのんで、市民社会の末端までにかわ状の支配（それ故統括力を欠くが）を貫徹している国家権力との、生活の非日常化と、肉体の摩滅と、膨大な精神的エネルギーの集中と出費を賭けてのへ政治選択を恣意的に行なう訳がないのである。

全共闘運動の後退局面で、昂揚過程でもっとも生き生きとやりたいことをやり抜いた連中が、60年後の三池、大正ではなくて、よりポテンシャルの低いフォークゲリラや自給自足運動や、文化運動に流れ込み放しであることはその象徴である。

⑤小野田襲二が久方振りに刊行された『遠くまで行くんだ』5号の、連合赤軍事件を対象とした文章の中で、へ集団―個人へ問題に触れて「私にたいしては―私は集団にとって何も

媒介した国家との、対を媒介した社会との連結と逆倒のすじ道を掌中に把握し、意識を時間の弁証法へ動態化し、日常を関係の弁証法にとり込み、政治の限定を了解して、恣意とは異なるレベルで政治（思想）を選択（受容）するのである。

組織は、個の自由連合の総和でもなく、個々人を統合し理念的に止揚する価値でもなく、自らを革命戦線の一翼としてまず政治的に規定し、次いでその限定を常に時間と関係の弁証法で豊富化することにより、組織の神秘化も解党主義も克服しえ、権力と階級の両者に規定されつつも、時間化された自由の領域で共同性を保持しうるのである。

組織が、組織成員である個に對する政治規律（禁止事項―罰則、弾対―組織防衛）は、相互批判と申し合わせ事項、文言化されぬ階級規範に裏打ちされてのみ、個―組織逆倒を防ぎ得るのである。

ロ、対―生活域と政治集団

①政治集団にとつての生活問題はこれまで二つの形でしか扱われなかった。その一つは社、共、民社、公明の国民党政党に代表される、政治集団は即ち擬生活集団であり、政治運動は即ち生活富裕化運動であるというズブズブの経済主義、組合的政治の完成である。他の一つは新左翼に代表される政治

純化主義、生活のタブー化、学生や文化左翼としての政治外収入の安定を前提しての坊ちゃん政治であった。社、共、民社は労働組合の政治代表部として形成されており、政治的地位の上昇は組合内地位の上昇（給料増大）に伴ない、出身労組となれ合つての利害代弁政治、二流のブルジョワ政治である。ここでの政治運動―組織評価の基準は、労組内支持率、得票率であり、これは個別労使関係―行政的國家秩序を前提にし、それには一切手を触れず、組合―議會を固定し、それに安住した上での量的評価にすぎない。

②新左翼の生活問題の扱い方のいびつさは、日本知識層のいびつさに対応し、既成野党の組合政治への過度の観念的反発に規定されている。

かつて『叛旗』4号等で述べたように、たかだか10年の歴史に過ぎぬ新左翼は、学生の観念的急進性を評価し、学園自治会費の効率的、合法的運営にその組織、闘争費用を負っていた。そして個人闘争費用、生活費は、寮、学館の共同生活利用と、シンパ層へのカンパ依頼によって、あるいは親からの送金の転用によってまかなってきたのである。ここにおいては、政治運動―組織の評価の基準は、政治能力（戦略、路線、闘争指導）と組織化能力（組織活動、オルグ）であった。もちろんそこでは、レーニンの『共産主義者は出身階層の如

職員個々にとっても困難な、だが眼を外らし得ない、日常的課題としてある。この領域の規律に関する我々の見解はこうである。

②政治組織は、組織体としては原則的に個々の生活問題を規律的に扱わない。組織体として扱う範囲は政治行為と抵触する範囲での（組織的）生活問題である。個々人にとっては生活は日常的に必然的のどのような形をとってであれ遂行せねばならぬ、せざるを得ぬ、かつ価値源泉としての具体事である。だが政治集団にとっては、それらの個別営為が政治集団内、協力、融和、緊張関係にマイナス材料をもたらす局面においてのみ、その限りで不均等は正、政治的気風の形成、大衆的信頼度の獲得の問題として扱われ、全体化される。

③だが政治内容・戦略を内的結集軸、対外評価軸とする政治集団にとって一義的ではないといえ、政治集団は人間集合としての関係の側面を有しており、そのレベルでは生活問題は規律関係としてではなく、文言化されぬ階級規範に則った相互批判関係として絶えず切開かれねばならない。

④生活問題については文言化された規律は必要ではなく、組織の集団的運営を円滑にしてゆく上での申し合わせ、取り消めが各級小集団単位でなされることで可である。

⑤我々が、あえて政治組織が組織総体として、個々の生活

何を問わない』が、ブルジョワ子弟も、プロレタリア子弟もルンプロも政治的等価として扱われ、生活的不均等は政治家の触れるべきでない個人領域であり、カンパ要求額の多寡によってのみ組織の介入しうる領域であったのだ。

③新左翼にとつての生活問題の浮上は、端的にいえば全共闘運動の解体によって多側面から表われた。

その第一は、学園基盤の解体である。自治会、学館、寮への当局の攻勢もさることながら、白けきった69年敗北後の、官憲―当局―ガードマン包囲化の学園闘争は全共闘パターンへの逆転を阻止する努力自体を、闇を対象とする位の困難な局面に追いやった。闘い切れば自滅する他ない局面を闘い切るにより突破せんとする意気は、思想的拠点の獲得と引きかえに多くの現実的学園拠点を、当局、権力、ガードマン支配の結果的受容として失なうに致つたのである。このことが、金銭的な基盤の喪失を招来したことは必致の過程であった。

その二は、全共闘運動は、69年秋までそのエネルギーを政治化しつつ持ち耐えたが、69年秋期決戦の敗北により、拡散状況へ突入し、観念的日常を反政治主義として模索、選択し、新たな入生活Vパターン化せんとしていったのである。

④生活問題、住宅問題、財政問題は、組織自体としても組

問題の統括、介入、保障を行なわれないというのは次の理由によつていられる。

我々は前提的に経済主義―組合依存の社、共、民社型政治を拒否した。だが新左翼の学生に基盤を置く観念的政治への様々な批判が、まず権力との激突の高次化が招来する権力―ブルジョワジー親からの攻勢として生活手段の扼殺として進行していること；また社会集団にとつての闘い切つた後の生活問題処理が退職者―処分者同盟の共同労働、共同分配としてそれなりの進展を見せ多く学ぶべきことがあること；更に革命路線として中国、ベトナム、北鮮等の現実化された戦後革命運動は、戦闘―生産―生活を統合する場（解放区等）を形成してのみ成就しえたこと等を理由として、新たなレベルでなされており、ここへの回答がそれなりの政治思想的な重要な意味をもっていると考えたからである。

我々は10年前に黒田寛一の永遠の今を体現する共産主義者の団結―観念的団結に運動を見失なつたブント系大衆運動主義者が流れたことに比して、69年敗北以降、赤軍派や神奈川左派が現実的共産主義的団結―共同労働、共同分配論に流れ、またそれを政治の為の手段としてではなく共同目的として、全共闘残党を中心に山岸会やキブツや群少コミュニティや性格が異なるがコレクティブやが膨化した理由もよく視える気

がする。

觀念の自足性が解体し、生活実感が失せ、人間不在のかわ状支配の貫徹の下で、前者は軍事遂行と生活との連関を毛沢東主義の教条化で為さんとし、後者が生活場の移動と共同生活者の変化と、日常生活スタイルの転位によって人間回復生活リアリティ獲得を目指さんとしたのである。だが、にも拘らず我々は政治集団の生活集団化を拒否する。我々は時間の弁証法に抛り、日常生活を時間化して綱領域に組み込み、政治持続根拠を獲得すると共に、それとは別次元で関係の弁証法に接近し、個々の職域に地域、家族域を加えての生活場での関係のかくめいを獲ちとつてゆきたいと考える故にである。

中国が公明党（これは冠婚葬祭共同処理、生活、人生相談、相互扶助を一義とする生活円滑集団である）を過大に評価し、ゴリゴリの中国派新島淳良が山岸会入りを発表したりする根っ子をpushえねばならない。つまり「国家―市民社会」秩序崩壊下の、解放区、根拠地運動、政治と生活の結合運動は、日本ではブルジョワジーに許容された『新しい窓』の再版にしか到りえず、政治運動と社会運動の混同であると共に、特殊条件下でのどのような政治―生活一体化の試みも現下の中国の末路、生活的共同性自体が固定され国家持続の根拠をなすという帰結を越えぬ故にである。もちろん、社会集団にお

という意の発言である。

我々は、右の主張に対し、政治そのものの関係的限定が前提であること。△対▽関係矛盾はその空間的な性を媒介にした解放―自由感を△対▽自体への時間度へ組み込む以外解決策を見出し得ないこと。性的差別は社会觀念として現在するが、性差別は女にとっての個人的自由（あたかもS・E・Tが自由国家に対して行なった）の獲得↑更なる賃労働者化への歩みとしては解体も止揚もされず、△対▽を媒介した社会内家族↑家族対立をときほぐす関係の弁証法によってのみその糸口をつかみ得ると応えてきた。

日常的、現実的生活矛盾が、△政治運動▽の共同的持続を脅かすなら、収入倍増、生活費切りつめ等の可能な形態で兩者持続するか、相互了解下の分業へ致るか、毎月の収入に依りて生活すること等しい、自然的な矛盾である。その際、男女どちらが持続の側を採るかは全く、個々の△対▽自体の問題であり、決して男と女の一般的差別ではない。総体として現象する一般的性差別は、あたかも賃労働―資本関係と同じく、個々の△対▽関係の質として応え切る以外止揚への回路はない。個が意識を媒介にして共同性と逆立し、個が△対▽を媒介にして共同体と逆立する、このことの内化を関係度の定着と時間化、関係の弁証法への接近過程でなすことで

けるかかる試みは、その限定性を了知しつつであれば、展開可能であり、觀念的共同財産化しうるのであり、やるべきである。

⑥生活問題としての△対▽関係に触れておこう。政治集団員にとつても誰にとつても、生活問題は△対▽関係を媒介してはじめて、日常的、現存的に登場する。更に男―女は子を媒介して不可避的に地域、職域での持続的社會関係に入る。政治集団は、その生成根拠を生活過程におきながらも、その現象形態は生活過程と逆立する、觀念的に転倒した性格を負わざるを得ない。党至上集団は別として、自らを相対化する術を觀念的に心得ている政治集団は、この組織員と生活者としての日常的逆倒に対しては、評価と回答をせねばならない。70年秋より大衆的に登場したウーマン・リブは、そのエンゲルスの性関係理解に抛り対関係と一夫一婦制の区別もつかぬ故に、結局それによつては差別反対宣伝を行なうのみで、止揚の方途を提出することは先験的に不可能であると考えられる。

彼女等が、提起した内容で日常的現存感と体験に裏打ちされている故に我々に刃を突きつけているのは「互に政治運動をやっている男女が性関係をもち生活に入ると共に、互に足を引き合い共倒れに至るか、男の政治運動持続（例外もあるが）の為に女は働き、小生活空間にとじこめられる以外ない」

のみ、性的差別は個々に解消する。政治集団が、自らに觀念的相対化契機をもつと共に、関係的相対化契機を組み込みえているか否かが、一般的解決の前提である。もちろん、一般的△法▽的女性差別の現実的克服は、自由国家の完成過程に組み込まれて可能となる、行政的国家との闘争であり、そうせねばならない革命運動と逆比して、何故最先進国から女性解放運動が昂揚するかを考えねば、日本のリブも米共産党とSWPの対立のレベルを越えなと思われる。

ハ、社会集団と政治集団

①兩者の生成と関連、自然成長性の克服の方途の分岐等については既に述べた。ここでは、政治集団の側からみた社会集団の評価、関係の仕方、具体的処置に簡単に触れる。

②政治集団はこれまで社会集団を、政治運動の予備軍として形成されるべきものとして、またそれ自体に依拠して社会集団の矛盾展開を政治的圧力として扱ってきた。これらは結局、どちらも政治主義―経済主義の、行政的国家―私的階級社会円環を破れぬ、それを前提とした関わりであることは自明である。

③社会集団は、その自然成長性を、自らの領域への△問▽家族社会の組み込み、その関係化された度合いに依りて克服する。政治集団の政治集団―内―問、関係の評価軸は、政治的

共同性、戦略であり、社会集団の社会集団―内―間、関係の評価軸はその関係度にある。

④では政治集団の社会集団に対する関係は何を評価軸とし、如何に展開されるか。政治集団は自らの結集軸を綱領により相対化し、社会集団は自らの結集軸を弁証法的、時間化により相対化する。政治集団は、この綱領的位相により、社会集団の各々の矛盾の基本性格を説明する。社会集団は、逆に自らの小関係を、階級―綱領域で相対化することにより政治集団の現存的質を説明する。

⑤政治集団と社会集団間関係は、(戦略と関係度を評価軸にする異質な各々が)政治集団が綱領域の把持―時間の弁証法展開により、社会集団課題へ接近し、社会集団が、関係域の深化―関係の弁証法の獲得により政治集団課題を了解する拮抗関係である。

⑥政治集団と社会集団間関係には、通常的理解と逆に、政治的不均等↓等化というものさしは使えず、只、社会的不均等(関係度)を綱領的位置と、人間集団としての存在的位置から、社会的等価として扱いうる領域においてのみ、生産的相互関係を形成しうる。

⑦互に他に学び、他者の異質な要素を摂取しつつ、自らの自然成長性を克服してゆくという、政治集団と社会集団の関

々は、学園―ベトナム反戦闘争の諸経験を踏まえ、階級形成論―共同体論的視点から「党―大衆」論止揚を掲げ、明大敗北への反撓としての理戦派の党至上論、外部注入論の再確認また68・11・7+69・4・28敗北を反省しての赤軍系軍の中の党論等と対立してきた。その後の神奈川左派の世界党―世界赤軍―世界革命戦争統一戦線や、仏派の階級関係論や、関西の党独裁プロ独論や、情況の大衆叛乱願望も含めて、68年秋―69年夏のブント内論争は我々と赤軍の対立を主局面としつつも、最も基本的な組織問題についての対立であったため多極化し、非和解的に展開され結局全面組織分裂を招いた。

⑥共同体論の目指したもの 階級形成論―共同体論(叛旗1号)において、我々は主に日共―革共同両派の党至上論、意識的階級形成論と、その対極の社民―解放派系の労働者物神感性的疎外史観を、旧プロ独―Seit 6の自立論の検討から批判していった。我々は、啓蒙主義、機能主義を批判しつつ、階級形成の一環に党があり、党は自らをも包摂する階級の内にありながら、国家―市民社会逆倒を再逆倒する政治革命過程で独自の理論的、実践的任務をも持つとした。

組織論とは国家批判であるとは、旧来の新旧左翼とは異質の、一方で国家を解体しつつ形成される階級成熟の質を射程にしての、他方では権力奪取へ向けた階級国防下の運動と組

係は、△国家―市民社会▽逆倒下では、当面、△拮抗▽関係としてしか表われない。政治集団に要請される対社会集団評価の軸は、この拮抗局面を、対抗関係として敵対的に扱わず、価値序列化して扱わず、社会的に等価な相互の、緊張関係として扱い、相対化契機へ組み込むことである。

⑧政治運動の組織展開に、とりわけ暴力的、半公然―非公然展開に不可欠な、弁護士、医師との、グループ的・個的關係の処理は政治集団にとって以上の規準に則ってなされる。知識層や学生運動や労働者運動における、一般的協力者、支持層、カンパ提供者等との個々の関連も以上の了解軸にたつて慎重になされねばならない。

四、組織路線の検討

共産同、共青同、反帝戦線の相互関係、具体的組織指導線括については本誌第三論文に、詳述してある。ここでは『叛旗』バックナンバーをたどりつつ、歴史的に提起した組織路線の発展の経緯について明らかにし、今後の組織戦略深化の為の視点としてコメントを付しておくに留めたい。

④第二次ブントの組織論をめぐる分裂 戦略主義の第二次BUNDの欠落点は、組織論であり、67・3マル戦派脱落後我

織の結合の様式についての内容を把握するということがあった。我々は、前者の社会的階級形成との関わりでの政治集団の位置と相互関係を、インテリブンド―大衆ブントと党派との連携と、拮抗過程として把握し、後者を党機構内での純党活動への非合法部門の取り込みと、社会集団と接解する地区党の独自活動の推進として把握したのである。

⑤党―軍―統一戦線論 「党―軍―統一戦線」論(叛旗4号)は、ブント内論争渦中で提案された。我々は「党―軍―統一戦線」を、階級形成過程での空間的発現、組織形態と把握し、神奈川、関西風の毛沢東教条主義への自力厚生―解放区を準備するものとしての党―軍―統一戦線、仏派の党の内部機能としての分化論を批判してきた。無論、ここでの論争に無縁であった他の部門は、理戦は革マル風レーニン理解に逆転し、情況派は何が問題なのか、いまだにわからぬ状況である。

④八派―全共闘止揚 70年6月分派過程で我々は、「党―大衆」運動、組織、構造の止揚を掲げた。これは④における社会集団からする政治集団の限定と相互関係、いわば知識人―大衆論域からの党―階級意識形成論批判に重点を置いた把握と異なり、前衛―大衆論域に視点を置いたものであった。

膨大なエネルギーを有した68年全共闘は、69年全共闘敗北過程で、八派―全共闘構造へ固定的にくくりこまれ、学園社

会闘争を展開しえず、政治的に持続せんとする個別全共闘は第九党派志向かノンセクト見学連へ到り、これら総体を含めての八派一全共闘構造こそが階級闘争の極核と化しており、我々はこの党派と大衆組織が互を嘲笑しつつ、もたれ合っている関係をこそ断ち切り、飛躍せんと、対戦旗党派闘争をその基盤に対する闘争として非和解的に貫徹してきたのである。

⑥号スローガンのあいまいさ だが、分派闘争以降（叛旗6号）新聞創刊過程）我々の掲げた「党一大衆構造を止揚し、党一軍一統一戦線を創出せよ」のスローガンは間違っていないが多義的な解釈を可能ならしめる、あいまいな部分を残していた。これは前者と後者を関連づけるトータルな視点の不明瞭さと、我々の主張が当為へ転化し、理論か理論としてのみ扱われるという運動の特殊局面に限定されていたのだと考える。

⑦6号路線の内容深化 我々はこの間へ党一軍一統一戦線論Vについては、まず綱領的位相での党一軍一ソビエトと戦略的位相での世界党一世界赤軍一世界統一戦線の分化、次いで戦術的位相における政治集団一社会集団併存局面での階級の空間的発現様式としての党一軍一統一戦線と、それへの媒介契機としての綱領、軍規、生活倫理を、更に政治集団にお

ける階級発現様式の内的構造化、等価な政治的位相に支えられての機能分化としての党一軍一統一戦線等を検討してきた。

また、「党一大衆」論 については、まずかつての前衛一政治的大衆の固定化を、国家批判一政治内容、戦略の質を規準として、等価な政治集団内、間関係として扱い転質を指すこと、次いで知識人一大衆論を政治的集団、社会的集団間関係を律するものとして把え、社会的等価性にもついた拮抗関係として扱う、等として検討してきた。

現在、我々はこの以上の検討を政治集団一社会集団視点を基軸にして統合し、「党一軍一統一戦線」と「党一大衆」止揚論をトータルに把握することができると考える。

⑧政治集団一社会集団視點 自然過程としての政治集団、社会集団は、国家一市民社会編成自体に基を置いている。政治革命過程を通して、政治集団はその権力獲得への回路の提出と、それが有する世界性一社会性の広さと深さを問われる。社会集団は逆に小共同性の排他性故の強さを、異種共同体間交通を経て如何に持続しうるかが問われる。

我々は、権力奪収一国家廢絶の政治一社会革命過程を、階級總体の時空度の再編過程、世界的一社会的階級の形成過程として把えた。それは国家一市民社会編成との関わりで言え

ば、政治集団、社会集団は独自の抗道を掘りつつ、限定を突き抜ける武装行動集団（ソビエトに代表される）を産み出し各々の転質契機を把み取る。それら動態としての三者（静態としては一者）が、社会的階級へ歩む過程であるのだ。

⑨政治集団、社会集団の相互関係 我々は、政治集団として内部的には、かつ政治集団相互関係においては、戦略一政治的共同性を結集、評価軸とし、对社会集団関係においては綱領一政治思想を共同、拮抗軸とするのである。我々は、対他政治集団関係（内部関係において、更に徹底することは前提として）で、いまだに八派一全共闘の夢を追う諸派、ノンセクトセクトに「党一大衆」止揚を本来的戦略論争の開始に向けて呼びかける。ここにおける対立は、政治集団の位相をめぐる対立であり、戦略一戦術内容をめぐる対立と異なり、非和解的である。また、对社会集団（三里塚、砂川、労働、弁護士、医者、知識層、協力者を含む）においてはその綱領的位相での政治思想の包括性を、彼等の小共同性の関係意識に對置し拮抗する中から、政治集団、社会集団の各々の内部関係とは異質の協力関係を獲得するのである。社会集団は自らの根拠を自然的小共同性におき、その基準を関係の強度におくのである。社会集団内政治集団員（職場同盟員等）は、

社会集団内の、意識的異質部分として、綱領一政治思想、時

間化された社会性の質で、経済主義や、組合主義や、政治主義に拮抗し、闘争過程を通じて集団再せんとするのである。

⑩まとめ 以上の「党一大衆」止揚を、政治集団域に、政治一社会集団の空間域を加えた広い幅で了解すれば、党一軍一統一戦線は、現存の政治集団一社会集団が政治革命過程で、持続的ではなくそれ故日常的な行動集団を産み出しつつ、双方共により強度に再編成されるという階級形成の時間的構造化の位相と方他、政治的共同性を軸にしつつ形成される政治集団内部での機能分担における、機能自体を相対化しつつ深化させる鍵として、時間軸に沿って二重化してかつ限定して把えられるのである。

△了△

われら過渡期の途上にて

— 国家・戦争・革命への序 —

三 上 治

I 情況の根柢と対峙する照準

— 戦闘への視座 —

この暗い時代を雄々しく切り抜けたと思うならば、ソフォクルスのアイアスのように、空だなる望みでいい気になって
いられない』(シモーヌ・ヴェーユ「抑圧と自由」)

『われわれは過渡期にある。何に向っての過渡なのか？』

社会主義は明後日来るだろうという牧歌性はもはやどこに

それについては誰れも少しもわからない。人が過渡期の中に、
まるで決定的状態でもあるかのように落ちついている無意識の安心ぶりは、それだけになおさら目立つ。制度の危機に
関する考察はほとんどいたるところで、ありふれた状態に移
ってしまったほどである。なるほど、人はいつでも、社会
主義は明後日来るだろうと信じ、この信仰を義務、あるいは
徳とすることが出来る。人が毎日、明後日とは今日の翌々日
だと思っている限り、決して裏切られる心配はないであろう。
けれども、こういう精神状態はたとえば最後の審判を信じる
善男善女の精神状態と区別がつきにくい。われわれは、もし

もないが、「情況の根柢」にひとつの指標をあたえんとすれ
ば「過渡期」としかいいようのない事態が進行していること
は疑い得ない。そして「過渡期」の中で、激しい解体や流動
に見まわれ、状況の総体や根底を押えなければ何事も始まら
ないのだということがよく実感されながら、そのことの異様
に困難な局面に在る。われわれはこのように異様な局面の中
で、たたかひの座標軸としてなにをたてるべきであるのか。
この座標軸へのいくつかの前提的事項を「過渡期」の諸問題
として提出、もしくは総括することから始めよう。この前提
的事項は二つの錯綜する構造のうちにあるものであった。周

知のように、われわれは二、三年の状況を後退局面として掌握してきた。この後退局面という指標は六〇年安保闘争の後退の経験や闘いが敗北したあとと再生していくにどのような時間を至ることを必要とするかという歴史的類推から考察し導いたものである。ここ二、三年の動向は後退期の様相をみせているし、その諸特徴を抽出し得る。このことは後退期、もしくは後退局面という情況への指標が妥当なことを示している。だが後退局面という指標一般では情況把握が出来ないのであり、六〇年安保後の経験の幅を越えている事態が進行しているという認知をしてきたこともまた事実である。

『七〇年の秋、私たちは醒めている。醒めて「運動のない時期」を維持している。その持続の根拠は何か、何に固執せんとしているのか。私達は自からを含めた現局面を、先行する特に六〇年安保後の思想的追体験によっても、学園闘争一〇・八―後退戦の体験の思想化によっても掌握し尽せない事を熟知している。七〇年代に課せられているのは、市民社会―政治的国家の世界史的、等質的成熟の根を撃ち得ていない階級闘争に於ても、自己史の体験に於いても、全く未踏な領域であることを確認しよう』(神津 陽、七〇年代のルビコン)

ここ、二、三年さまざまの事件として生起する情勢の流動

(1) われわれの時代を特徴づける「過渡期」の「過渡期」たるゆえんは、これまで人類が数千年の歴史を経て到達してきた民族的、政治的、国家・市民的社會と称せられる諸共同性が統括力を喪失し、解体にみまわれながら、その止揚の方向を誰れも明らかに出来ないということである。なるほど人々は次のようにいうかも知れない。このような「過渡期」への突入はすでにレーニンやマルクスが宣言し、ロシア、中国革命が止揚の具体的展開をなしつつあると。だが、ロシア、中国が実践しつつある問題は民族的・政治的国家・市民的社會(諸共同性)の止揚の諸問題、つまり止揚への過渡の問題でないことは明らかである。ロシア、中国が実践しつつある諸問題をいわゆる社会主義的過渡期の問題とみなすことで、われわれがここでいう「過渡期」の諸問題として、提出せんとしたことと重ね合せようとする見解がある。われわれは社会主義的過渡期など言語をのぞいてどこにも存在しないという立場にたっているが、社会主義的過渡期という見解の致命的欠点は、ロシア、中国がその存在的敵とみなすべき資本制的国家や社会と相互変容している事態や世界を総体として押えることが出来ないということである。ところでレーニンやマルクスが人類史の「過渡期」への突入とその究極的姿について提出していることはユートピアないし誤謬であろうか。

(例えば米中、日中接近や連合赤軍、テルアビブ事件等々)は六〇年安保後の経験や体験の幅を越えた何かの指標なくして情況の根底が押えられないことを示している。後退局面という情況掌握と未踏な領域としての情況という二つの判断がいれば錯綜した構造をとってきたのは根拠のあることであった。後退局面という情況掌握は実践的判断からくる要請もあつたのだが、又われわれの軌跡を経験の内化として蓄積していきたいという欲求に根ざしており、その表現であつたのだから。人々の持ち得る理論、思想は究極的には経験の別名であり、経験の内化こそ重要であるから。他面、未知で、未踏な情況という判断や認知は「経験の内化」と「経験主義」のちがいが、不断に未知なものとしての情況をくりこめるかにあり、その欲求にねざしていたし、その表現であつたのだから。後退局面という情況掌握と未踏な領域とその情況という判断がなかなかうまく統合されず、錯綜した構造となつてきたとすれば、それははかならぬ経験の内化が「経験主義」を越えきれず、新たな情況のとりこみが「新しがり屋」の水準にとどまっていたということであろう。いずれにせよこのような判断基準の錯綜があつたとはいへ、われわれが「過渡期」の諸問題というべき前提的事項を立ててきたのは事実である。「過渡期」の諸問題を项目的に述べれば次のようである。

われわれはレーニンやマルクスが、民族・国家・市民社會の止揚についての方策として展開したもの、階級形成・党・コミニューン等々については深い検討を必要とするが、彼等が究極的なものとして提出したものは「過渡期」の指標の根底にすえうると考える。例えばマルクスの自然論やレーニンの政治の死滅についてのイメージである。

(2) われわれにとって「過渡期」の問題は民族・政治的国家・市民的社會(諸共同性)の解体、止揚の問題であるが、かつ「権力問題」である。現存の権力を構成するもの、その危機の性格、われわれの権力への道等々としてこの内容はおいつめられなければならないのであるが、その前に前提をはつきり押えておかなければならないし、そこでの内容が当面なによりも重要なのである。前述したレーニンやマルクスの人類史への究極のビジョンというものはここで重要なのである。周知のようにわれわれは先驗化された「社会主義」、「階級」論をすてるということを宣言してきた。そして次のようにも語ってきた。『「革命」や「階級」、「組織」や「運動」がまず存在するのではなく、私達の実存の必然性から、そこへいたるようにせねばならないのだ』(八かくめいへの越境)。このような判断は「プロレタリアート」や「革

命」が死語化していく情況の認知の中で必然のごとくやってきた。このとき、われわれに迫ってきたのは闘いの根拠をどこにさだめ、何を準備するかというぎりぎりの問いであった。先験化された「社会主義論」や「階級論」、その在り様としてのロマン主義（ニヒリズム）、プラグマティズム等々の批判の果てにわれわれが提出したのは恣意としての政治活動、△創るものとしての階級論△であった。この提出は先験的な諸理論、思想、活動に対して優位をしめているがいくつかの欠点をまぬがれていない。例えばそれは次の二つの見解を検討すれば明らかとなる。『私たちは、唯物論の根拠を生活総体の基底、生活の生産（生殖＋社会的生産）においた。がそれ自体は自明の理の確認であり何ら説得力を有しない。私達は唯物論の基底と、唯物史観を結ぶ環を、「意味」、「価値」として指定する。……人間生活の基底たる具体的生活過程は経済のヴェールをかぶせてみると、生活の生産（社会経済構成体の一要素）として抽出しうるが、実は生活の生産は現実過程として物化するものと観念領域の一体化である。比喩的にいえば、「現実」とは別の謂ではない。……唯物史観とは全人間生活を二分する物質域と幻想域の間で幻想化されない生活（＝生活の生産）に価値を置くことである。ここにおいて、幻想化されない生活とは、生活過程のことであり、

か？ 私達はそこへ執着する。』（三上治、階級への道、△かくめい△への越境）。

前者が闘いの根拠をギリギリの問として鮮明にしているのに対して、後者のあいまいさは明らかである。人間の存在の究極の根拠、したがってその闘いの根拠が前者で鮮明であるのに、後者は曖昧なのだ。前者で提出している「価値」という概念では吉本隆明のいう「大衆原像」と連らぬものであり、マルクスやレーニンの思想の核心と同じなのだ。人はいまさらマルクスやレーニンなどといったはならぬように「大衆原像」などというべきではないのだ。吉本隆明の思想は戦後史の中で情況に屹立しえる唯一のものであり、座標となる唯だひとつのものである。

『結局どう考えたかというところ、つまり何が価値かという場合に全部ひっくり返さなければいいじゃないかと考えたのです。つまり人々が偉大な思想家とか偉大な政治家とか偉大な宗教者といっているのはいちばんだめなやつだというふうに考えればいいということです。人間が（あるいは集団的に考えていいですが）如何に生くべきか」というふうに考える場合に、もっとも価値ある生き方というのはこれとても仮空なのですけれども、自分の生活のところ、具体的に当面している問題とか自分の家族とか兄弟とかさういうことならば、かな

広義にはさまざまの技術や伝承、慣習、話しことばそして沈黙の言語を産む自然過程のことである。』（神津陽、過渡期世界論、蒼氓の叛旗）

『けれども共同体と個性体は対立概念ではない。対幻想としての個性性一般はないのであり、それは関係によって生成するもの、関係なのである。ある個体にとって関係が、現存性のふくらみであり、それでこそ個体の成熟であるものと逆であるものが存在する。このことは問いつめれば、他者の存在を自己の存在へ、自己の存在を他者お存在へ転化することが可能かという問へいきつく。その問はどこまでもつづく。このとき恐しいのは、人間が共同性をうみ出すことで現存性となること、そもそも負的なことではないのかということである。確かに人間のもっとも活動的で意欲的關係とは、自然、直接的關係である。人間が動物から分離した過程は直接的、自然的關係からの離陸としての共同性の蓄積である。これは自然必然史ではないのか？ これを意識的自然史へ転化するのには共同性の所有ではないのか？ だがもともとこれは負的ではないのかという問は誘惑的で恐しい。現存性のふくらみとしての所有、私達の言う個体的ー共同体的所有に執着する。が現存性のふくらみとなるような關係として、意識過程ー行為過程ー生活過程での共同性を創出することは可能

りの程度深く考えるけれどもベトナム戦争がどうかあんなに遠くのほうにあることは考えないという、そういう生き方をしているやつが、いちばん価値ある生き方ではないかと考えたわけです。いってみればこんどは相対性の極限ですよ。そういうやつがいるかどうかということはすこぶる疑問なのです。だからそれはある程度ひとつの像（イメージ）になるわけですけれども、イメージとしてはわりあい可能なイメージです。その種の人は身辺によくいると思います。その価値ある生き方に対して、人間はだれでも観念の世界の特有な性質によるものだが大なり小なりそれからそれてしか生きられない。で絶対的にそれているのは、たとえば共観福音書の主人公のようなやつなわけです。だからそうならば私達は自分が大なり小なり絶対的な生き方、つまり遠くのこととは考えないという価値ある生き方からそれているということについて自覚的であらねばならない。つまり、それていることに、たしようにでも価値観をくつつけたらだめなので、もっともそれているやつ、偉大な宗教家とかいうのはもっともえらいのだと思っただけだということです。それはいちばんだめなやつと思ふべきで、自分はそれほどでもないけれども価値ある生き方からは、たしよはだめだというふうに絶えず考えなければ、ほんとうにだめになってしまうということです。

これが思想だと、そういうふうには考えたわけです。だからまったく逆になります。逆になるかどうか知りませんが、少なくとも価値観というのはひっくり返えるわけです。それが僕の中の根底にある問題なわけです』（吉本隆明、「宗教と自立」）

『ここでとりあげる人物は、きつと、千年に一度しかこの世界にあらわれないといった巨匠ののだが、その生涯を再現する難しさは市井の片隅で生き死にした人物の生涯とべつにかわりはない。市井の片隅に生まれ、そだち、子を生み、生活し、老いて死ぬといった生涯をくりかえした無数の人物は、千年に一度しかこの世にあらわれない人物の価値とまったく同じである。人間が知識―それはここでとりあげる人物の言い方をかりれば、人間の意識の唯一の行為である―を獲得するにつれて、その知識が歴史の中で累積され、実現して、また記述の歴史にかえるといったことは必然の経路である。そしてこれを見れば、知識について関与せず生き死にした市井の無数の人物よりも、知識に関与し、記述の歴史に登場したものは価値があり、またなみはずれて関与したものは、なみはずれて価値があるものであると幻想することも、人間にとつては必然であるといえる。しかし、この種の認識はあくまでも幻想に属している。幻想の領域から現実の領域へと

の歴史上はじめて住民大衆が立ちあがって投票や選挙だけでなく、日常の行政にも、自主的に参加するからである。社会主義のもとでは、すべての人が順番に統治するであろう。そして、だれも統治しない習慣がまもなく出来るであろう』（レーニン、国家と革命）。

吉本に於ける「大衆現象」や、マルクス、レーニンの究極的な人間や政治へのビジョンはユートピアや左翼的常識に帰せないで数千年の人類史を貫らぬき、人間の原基的、日常的存在として、一切の源泉であることをはっきり押えるべきである。吉本の思想には戦中、戦後にわたる日本民衆と己の血にまみれた体験と経験が脈打っている。マルクスの思想には人間の存在の一切を自然に解消してしまう恐ろしさを秘めている。たしかに我々もこのことに無自覚であったのではない。『対的、性的関係の外の政治的、社会的共同性は人間の実存にとつて負的なものであるか。政治的、社会的関係、共同性のもたらす現存性や生命的充実が負的なことであろうか。ちやうど、戦争の悲劇性が現存性や生命的充実であるように。社会的、政治的關係―共同性への欲求の衝動は地獄への道行であるか』（三上治、「世界―民族」「国家―市民社会」を超えるために）。虚無（ロマンティズム）と自然とが紙一重のところにあることを自覚してきた。今日誰れも

はせくだるとき、じつはこういった判断がなりたないことがすぐにわかる。市井の片隅に生き死にした人物のほうが、判断の蓄積や生涯にであったことの累積について、けっして単純でもなければ劣っているわけでもない。これは、じつはわたしたちが考えているよりもずっと怖いことである』（吉本隆明、マルクス伝）。

『われわれが出发点としてとるところの諸前提は、どんな勝手気ままな前提でも。どんな教条でもなく、それはただ勝手に頭の中のみ度外視されるような現実的前提である。これは現実的諸個人、彼らの行動、及び彼らの物質的生活諸条件―既存の生活諸条件ならびに彼らの行動によって産出された生活諸条件―である。したがって、これらの前提は純経験的な方法で確かめる。あらゆる人間歴史の第一の前提はいくまでもなく生きた人間の諸個体の現存である』（マルクス、ドイツ・イデオロギー）

『理論的矛盾の解決は、実践的方法を通じてのみ、人間の実践的エネルギーを通じてのみ可能である。したがってその解決はいかなる意味でも単なる知識の問題でなく、生活の現実的問題である』（マルクス、経済学哲学草稿）。

『社会主義のもとでは、「原始的」民主主義のうち多くのものが必ずふたたび活気づくであろう。なぜなら、文明社会

へ政治をやるなということが最高の政治だ」ということを思うことなしに政治運動へ関われないうこともよく了解してきたつもりだ。けれども依然として、われわれに曖昧が残っていたことは真実である。幻想的、観念的契機を人間の実存の価値として根拠づけたいということである。いいかえれば具体的生活からそれていく己の存在にどこか積極的な理由があたえたいと考えてきたのである。それなしには政治活動の理由が喪失するのではという秘かな恐れを抱いて。この曖昧さは共同性と個性の関係についても残ってきたと思う。ここでも吉本隆明のいう個体の共同体からの逆立というテーゼはわれわれの根底的な指標であると思う。個体的―共同体的所有のあいまいさは徹底的に総括されなければならぬ。

先験的な「社会主義論」、「プロレタリアート」が死語と化し、支配的、時代的な思想や理念が拡散、解体していく局面の中で、恣意としての政治活動（これは一切を根底から疑い始めようという自省や自戒であったにすぎぬが）という宣言をしたあとの曖昧さはこれらの理由に根ざしていたのではないだろうか。「過渡期」としかいいようのない時代で、人間の存在（実存）の根を、その日常的存在をふかくとらえ、幻想と現実の総体、個と普遍性の全体から押えんとするとき、これまで語ってきた二つの座標軸（「価値と意味」、「個と

「共同性」に関する立場)は根底にすえられるべきものである。

(3) これら(2)での展開内容は過渡期の諸問題の前提の前提にすぎぬではないかというかも知れぬ。然りである。過渡期の諸問題としての第三の指標というべきものであり、本稿の主要構成をなすところであるが、ここをまず簡単にふれることで、前提へ近づこう。これは次のようなことである。それは人が具体的生活からそれ、逸脱した存在へいたっていく契機はその個人の意志をこえたある特定の時代や社会に依っているということである。『誕生したとき、すでにある時代の、ある環境のなかにあった、という任意性は、内省的な意識からはどうすることも出来ないし、意味づけることができないものである。わたしの考えでは、さまざまなニュアンスをもった「存在」論の根拠は、つじつめれば、かれ自身にどんな意志もないにもかかわらず、ここに「在った」という初原性に発している』(吉本隆明、初期ノート)。

『わりあいに動物に近い生活に出来てしまった人間の世界をもう一度もつていくということは究極的にはものすごいむずかしいことです。人類が四千年かかってやっと到達したのはせいぜい資本主義という制度である。それは一見自由そう、勝手に能力があつて儲けたいやつはいくらでも金が儲け

られるし、儲けたやつは金を出せば何だつて手に入る。それはいいようにみえるけれども、こっちのほうをみると、あすどうやってかうか困っているやつがいるというふうになっていて、ちょっとそういうのは困る。しかし、その制度をよとしてくるまで人類は少くとも有史以来六千年ぐらいかかっているわけです。六千年かかって、人間の最高の知恵がうみ出した最高の制度だということです。だから資本主義というのは単に悪ばかりでできているのでなくて、やはり四千年から四千年、六千年なら六千年の知恵がその中にあることは確です。つまり前代にくらべて、封建時代なら封建時代比べてよりよい知恵があることは確です。だから、それでせいぜい四千年かかって何かといったら、それは資本主義だということ、これが人間が制度的に考えて最高のものだということ、それでこれをつくるに四千年とにかかかっている、というようなところがあるでしょう。だからそういう意味においては、みんなひとりひとりが悔い改めれば、いっぺんにこの世は天国だというようなことをいって、そんなにかんたんなことではないということ。かんたんなことでなくて、そういう迂回路を、しかもわりあい正確に検討しながら通っていかないと、そこにはいけないという問題がやっぱりあるのです』(吉本隆明、「宗教と自立」)。

『すなわち特定の仕方では生産的に働いている特定の諸個人はある特定の社会的および政治的関係を結ぶ。経験的考察はそれぞれの個々の場合に社会的、政治的編成と生産との関連を経験的に、そしてどんなごまかしもなく思弁もなしに示すはずである。社会的編成と国家はたえず特定の諸個人からの生活過程から出てくる。ただし諸個人といってもそれは自他の表象のなかにあらわれうるような諸個人のことではなく、現実存在しているような諸個人、すなわち、はたらき、物質的に生産しているような諸個人、したがって特定の物質的な、そして彼らの意志からは独立な諸制限、諸前提および諸条件のもとで活動しているような諸個人のことである』(マルクス、ドイツ・イデオロギー)。

われわれが具体的に生活しているところから必然のごとくそれ、逸脱していくのは個人の意志をこえたかたちで個人が存在し、関係を結ぶことを余儀なくされている特定の社会的、政治的水準に依っていること、及びこの逸脱をといっていく、つまり内省的契機はこの回路、迂回路を不可避なものとするということである。

このとき重要なのはこのような回路、迂回路をたどろうとするとき、その対象把握(広範な意味での階級分析)とわれわれの活動(存在の掌握)である。ここではじめてわれわれは

特定の(歴史的な)社会的及び政治的編成(共同性)の分析とその組みかえとしてのへかかめい、われわれの活動としての時間、空間の弁証法を明らかに出来るのである。社会的、政治的再編成(共同性の現段階)と分析視座は後の展開にまわして、ここではわれわれが回路というか、迂回路のとは口に立たんとして苦闘してきた過程で問題となつた「政治」と「自立と共同性」についてふれよう。われわれが60年BUNDの遺産としてうけつがんとしたのはおよそ三つであつたといつてよい。その一つは第一次BUNDの実践的展開と、その逆説的な死であつた非日常的、非存在的な閉じられた理論、思想の体系と、そこから現実的なものを裁断する日本マルクス主義、日本革命運動の負的伝統への批判である。つまり、観念としての政治が呪縛の構造として作用してくることへの批判である。第二のものは「党派、組織」の優位として至上化される共同性への批判を生み出したことである。第三には自己が持つ理論や思想の限界によって世界、日本の左翼の水準を白日のもとにさらしたことがある。60年BUNDがこのような遺産を残したことは「先験的な社会主義論、階級論」の死語化、革命論の破産、時代的、支配的思想の拡散、解体という情況に支えられていた。これは現在も引き続いて世界的、日本的戦後の成熟であり注目す

べき唯一の兆候であるが。この中でわれわれのたどった道は現実のマティエルから出発せんとしたこと、非日常的、非存在的に閉じられた体系としての綱領主義への対決をせんとしたことであった。これは前述した政治活動（観念）の恣意宣言、大衆、運動主義としてあらわれた。これらはたしかに過渡的な意味をもっていたが又弱点を有するものであった。政治活動（観念）の恣意性というのはそれ自体情況によって強いられているものであり、今日の自由的国家が積極的なものとして「思想」「政治」の自由、選択の問題を提出するものと決定的に異なっていることを明らかに出来なかつたことである。そしてこの恣意性が徹底性へいたりえない弱者の安堵として作用してきたことである（べ平連、ノンセクトに象徴される）。そして「大衆」が「大衆原像」という思想的に想定されたものか、現存のあるがままの大衆か、つまり自己のあつかっている位相を徹底的に明確化出来なかつたが故に、「党」「政治」至上主義と「人民の海、大衆暴力主義」を生んできた。赤軍派に象徴されるようなこれら二つの傾向はいつでも相互に逆転すべきものである。われわれがここで明らかにすべきであったのは大衆原像や生活過程の考察によって、政治（観念）の相対化とその自然性を明らかにすべきであった。この点に関してはかなり明確にされてきたが、『ここで「党」

義」主義者である（例えば赤軍派から情況派へ至るである）。観念的過程自身は相対的なものであり、なんら価値的なものではないが、がそれは部分の請ではない。観念過程が、観念を本質とする政治が普遍的な根拠を（不可避にそうすること強いられるといつてもよいが）持つことも真実である。われわれはこれを広範なものとして「意味」というように呼んできた。観念過程、観念過程を本質とする政治に「意味」という概念を与えたとすればそれは次のようなものと異なっている。観念過程を「価値」へすりかえている旧来の目的意識性論（哲学的にはヘーゲル流の観念論）、また観念過程の力も根拠も olmayan 現存の大衆の物神者である（哲学的には唯物論）。もっとも、これら二つの傾向は詐術のごとく相互転換する。これら二つの傾向はもともと同根のものである。この理由は観念（幻想）過程又は政治過程と生活過程（社会過程）の位相の差異がわからないからである。ともあれ「意味」としての政治は前述した回路、迂回路ということである。ただわれわれに若干の曖昧さがあれば恣意的なものとしての政治という宣言が選択（意志）としての政治と強いられたものとしての、迂回路としての政治と微妙なちがいをもち二つの内容を自覚出来なかつたことである。選択としての政治はプラグマティズム、主体性論、ロマンティズムを超えることは

の自然成長性を止揚するもの、「党」の意識過程が問われる。「党」の意識過程は何か。それは、旧左翼の「目的意識性」と異なり、自己を含めた「世界」総体の対象化過程であり、自己の存在拠点の確認を、大衆との結合の深さのうちに求める道である。大衆路線に対して党を対置する旧来の方法は誤っている。それは必ず、党の意識性の強調となり、党の意識性自体を価値へすりかえ、党の純化が党の安全性へと後退するのである。人類史に於ける政治の位置から党の過渡性を了解せねばならない。「党」が大衆の外にあって内にあるとは、こういうことだ』（神津陽、共同体論へ）。観念的過程（旧来では意識的、目的意識的過程）もまた自然過程なのであり、そこでの真の意識的過程は自己を相対化し、大衆の生活過程を不断にくり込むことである。レーニン流に言えば自然発生性への拜跪は自然過程としての意識性（観念性）自体を価値へすりかえていく方向と、現存の自然過程としての大衆の生活過程を物神化していく方向である。後者についてはわれわれが「価値」について言及したことや吉本の「大衆原像」との関連を問う諸君がいるかもしれない。これについては明確である。吉本の「大衆原像」やわれわれの「価値」についての言及には現存の生活過程へのどのような物神化もないからである。現存の大衆の物神化はごまんとする「人民、大衆主

ないし、そこへ傾斜することを免れ得ない。強いられたもの、迂回路としての政治は、そこで生れ、育ち、子供を作り老いていくという生活的日常と同じように、思考し、理論化し、行為することを観念的日常として展開するといつところへいたりつくのである。ここを経ることなしに観念（政治）の中に日常を、日常の中に観念（政治）を発見するということはないのである。これなくして「日本には生活に媒介された思想も生活を越えた思想もない」ということを克服出来ないであろう。「意味」としての政治はこのとき、観念論とちがうかたちで、観念の力とその存在根拠を明確にするのである。われわれはこの弁証法的展開（政治）に時間の弁証法と呼び名をあたえてきた。そしてこの最高の表現として綱領とということ語ってきた。『綱領は革命の現実性が、空間↓戦略↓時間へでなく、時間・観念諸力↓空間・戦略へベクトルが集中する時代の根拠地である。「綱領」は全世界、全社会の運動を時間として構造化したものであり、この構造化の過程が存在へ向う時間の弁証法といふべき運動である。政治的、観念的日常での地獄との闘いであり、そこから新たな共同性へ向う拠点である』（情勢の新局面と社会的運動の諸問題、叛旗紙36〜37号）。

観念を本質とする政治活動をはつきりとその根本で掌握し

たとき、ただちにその表現構造（行為との関係）が問われるのであるが、この点に関しては後にまわす。

もうひとつの「自立と共同性」についてはふれよう。共同体や共同性という概念が登場したのは、そしてそれが本格的な意味で検討されてきたのは60年代後半なのであって前半では組織論や国家論として展開されてきた。60年BUNDは組織そのものを目的とする、価値とする日共一革共同の破産を宣告した。レーニンが国家死滅へ持つていく、国家批判の武器としてあみ出した組織論は、国家そのもの、権力そのものを目的とするスターリンの時代に必然のごとく変節した。日本の革命運動で組織の原基をなしてきたのはスターリンの時代に変質したレーニンの組織論であった。組織そのものを目的、価値とする日共一革共同の思想の破産の背後には同時に、国家（政治的）、市民的社会の成熟と解体があったことはいまでもない。この情況の中で新たに提出されたのは吉本隆明の「自立」の思想であった。この自立という思想は究極的には個体は共同体と逆立するということである。一切の共同幻想は消滅さるべき対象であり、存在するとしたら絶えず過渡的なものであると押えることだということである。第一次BUNDの崩壊のあと日共一革共同流の目的としての、価値としての組織というテーゼに対し、手段としての（運動の）過渡

せざるを得なくなったのは迂回路の鮮明な提出（権力問題）が又同時に究極的内容を問うたということである。われわれは共同体一般を論じたのでも、あつかったのでもなく、このような課題としてあつてきたのである。

幻想と現実、個と共同性の総体のからみのなかで過渡期の指標を究極的な像と必然的な迂回路の双方から明らかにせねばならない。これまでの展開はうまくいったかどうかかわからないが、究極的な像も迂回路の双方ともユートピアやあるべき姿でなく、錯綜しながら現実としてあるのだということだけはよく了解されなければならない。そしてこのことはまた経験的にたしかめられることなのである。ここで若干いわゆる「存在」論についてふれてみよう。『少なくとも、わたしたちの現実的な体験が語りかけるところでは、「類」の論理は何らかの度合と形式で第三次大戦中の日本では死滅している。この死滅はただ「類」と「個」が交錯する接点の思想を深めることによってしか回生できないということとは、「特殊」の「普遍」として明瞭なことである』（吉本隆明、初期ノート）。

「存在」論が流行し、広く論じられる根拠について、吉本隆明は初期ノート（過去への自注）の中で簡潔に述べている。『「存在」論が、ある時代的な意味をもって主張されるのは、

（過程、ルカーチ）としての組織というテーゼで対抗した。このわれわれのテーゼの弱点は「運動」自身も目的ではないし、価値としての「運動」はないということに象徴された。過渡（過程自身）がどこへ向っていくのか明確でないが故に、このことは何も意味しないという場面があらわれる。組織自体が目的でもなければ、価値でもないように、運動自体もそうである。このことをはっきりさせなければ第二次BUNDのように革共同、毛沢東派への逆転をうむであろう。ここで明確にしなければならぬのは次の二点である。共同幻想の一切が消滅されなければならないという究極の問題として個体の幻想的共同体からの逆立ということを了解しなければならぬこと。そして共同幻想は過渡的なものであり、目的や価値へすりかえてはならないことである。マルクスではないが、すべての革命運動は幻想的なものとして、何らかの共同的なものとしてたちあらわれる以上このことは重要である。他の点はここでいう過渡的ということは何らかの手段一般ということでも、意志の問題でもないということである。これはわれわれが特定の国家と社会の編成段階に存在することを強いられているということであり、前述の迂回路にあたるものなのである。

60年代後半にわれわれが共同体や、共同性をそれなり検討

生まれ死んだりする「個」そのものが、現代ではあまりに自身からも、自然からも、みじめに遠ざけられているからである』と。われわれにとっても「存在」論は何か断えず己の底をつつくようにあつたし、何かの不安はそこへ収れんするもののようにあつた。今、われわれは「存在」論を促す根拠やそれへの回答を部分的で整理することが出来る。

その第一は、吉本隆明のいう「類」の理論は何らかの度合と形式で第二次大戦中の日本では死滅しているということとわれわれの世代も異なつたかたちで体験しているということである。例えば「国家」、「民族」、「ナショナリズム」というものにどこか疎遠な感情をもって来たということである。今もよくおぼえているが、竹内好の書にふれたときの最大の異和感が「民族」、「国家」というときの感性であつたことを。もちろん、この種の疎遠な感情はいわゆる脱国家からコスモポリタンの世界主義へといつても転化する。そして逆に興隆期の「民族」や「国家」への復古的な憧憬へ転化することもあり得るし、また疎遠な感情を民族責任に原罪論へ説的に流しこむことがあるが、いわゆる無関心も含めて、このことは広範に存在すると思う。この根拠は先進地域における国家の衰退、硬直及び膨大化する時間や空間の累積（幻想、生産諸力の急速な累積、交通の拡大）が相乗化し、より進展

することにあり。

第二のものはこれと相補するように、「個」や「自然」も何か疎遠なもの、また卑劣感を免れえないものとして存在する。象徴的にいえば日本の自然風的生活倫理も近代的都市風のそれも何ものかに八侵蝕Vされるように存在することである。主体の意識力や自然力によって時間や空間を成立させたり、占めたりすることはないし、そのことが自然であり、普遍的だという衝動がつのつていくようにあらわれる。これは「自然」としての、生理としての個体に膨大に累積する時、空を背負うことの困難さを象徴させているのではないか。

第三のものは先述したこれら二つの理由と同時に、これらを客観的な世界了解として意味構成、主体的表出いずれの側からにせよ関わる思想、実践の不在である。主体性論、実存主義を含む観念論、また唯物論も存在の根底にせまるものではないということである。これら三つの理由は、「存在」論ということを通じてしまったわれわれ自身になにを迫るか。それは「類」と「個」の交錯する接点の思想の深化という前出した吉本隆明の提起へいくのだが、ここへの二つの接近である。そのひとつは「幻想と現実、個と普遍性」の総体に前述した「意味と価値」から接近することである。われわれはこのことに対して多くを語れないし、何度も強調

措定するということがある。内的時間—空間は外的（歴史的）時間—空間、また個体の生理的時間—空間（固有時）から分離されないが、同時に位相の異なるものとして措定されるのではない。自立、経験の内化、持続、価値としての時間、「類と個」の α と ω 等々と呼ばれてきたものいい直せるようにも思う。内的時間こそ歴史的時間や固有時を内化した、ちように歴史的自然と身体的自然を内化した意識的自然のごときものだと思う。

(4) 「階級」や「権力」好きの諸君はそれが少しもあらわれないではないかというかも知れないが、そこへ行くには手続があるのである。この場合前述の究極的な像と迂回路の双方のからみで、幻想と現実の、個と共同性の構造と現段階を推えることである。この中である側面が後景にしりぞくのは迂回路自身の性格によっている。周知のように69年秋の敗北のあと「革命論」の再生から始めなければならないと主張したのは現段階の認識が方法からやり直さなければという事情を物語っていた。国家と社会の編成の現段階と構造を推える方法を「綱領、戦略」、「過渡期世界論—共同体論」等々と表現してきたことである。別の言葉でいえば革命の現実性の変容過程と呼んできたことである。国家と社会編成の現段階の構造と運動の道筋の解明であり、この内容は本稿の主題で

することになるが、人間の生活的存在と自立という究極の像がユートピアでなく、現存性だということである。究極の像が現存性だといった時、この現存性は比喩的にいえば八空想Vとも八即時性Vとも紙一重のところであらうのである。他のものはわれわれの「存在」を構造と運動の弁証法として掌握することである。マルクスは人間の存在の構造と運動を物質史でなく、自然史的な弁証法的展開として押えた。マルクスの場合、この展開を「類」へ収れんさせ、かつ時間と空間の位相を厳密に区別させてはいなかった。周知のようにわれわれは—主要に神津陽によって提出されてきたのであるが—「関係的把握と構造的把握」、「外的、内的時間、空間」として展開してきた。これに所有論、関係論、交通論等々を付加してきた。が今一步のところにあつたのはマルクスのいう自然史展開を時間—空間の累積度として掌握できなかったことであつたと思われる。この時間—空間の累積度、過程を、進化論または発展段階論、その対極での原始回帰でもなく、マルクス流の自然的展開とすべきではないか。そこに時—空間の弁証法と構造概念が成立すると思われる。そしてもうひとつは内的時間、空間を外的（歴史）時間、空間、個体の生理的時間、空間から疎外された、それをくりこんだものとして

あり(II)項以下で詳しく展開する。方法についていえば人間の存在としての時間—空間の構造と運動、共同性や共同体の組み方のからみとしてなすということである。過渡期の諸問題の最後の指標として闘い方について展開しておこう。いわば姿勢についてである。これは否定の弁証法というべきものである。60年代の過中のうちに、私は二つの経験を持った。そのひとつは未知で未跡な領域へふみこんだ闘いの多くは非常に偶然的なかたちで展開されていくということである。他のひとつは神話はいつでもよみがえるということである。前者は闘いが結果論的、客観主義的に総括されるのと異なっているということである。これはレーニンやトロツキーが彼らの予想を越えて展開される闘いに対してもった驚きであり、必死に「経験」としてくり込まんとしたものである。ある時毛沢東がいきすぎや混乱を歓迎すると述べたのものである。われわれのささやかな経験でもこれらは次のようにある。例えば、60年代後半の闘いの突破口を端初を切り拓いた67年10月羽田闘争や大学闘争、その戦闘空間や封鎖は非常に偶然なかたちで活路を開くというように生み出された。いわゆる計画された戦術という類のものではないのである。もちろん突破口のあと計画された戦術の発現はあつたのだが、われわれがこの経験から学ばなければならないのはここでいう偶然

とは何かである。それは次のように要約できる。闘いの回路というものが、とりわけその戦闘空間の展開がそれ以前からみれば未跡で、未知なものであるということ。けれども、きわめて偶然的なかたちで展開されるものは無から有が生れるという類いのもの、又事物の脈絡や連環が全くないというのではない。事物の脈絡や連環の構造が否定的累積であるということである。無から有は生れることはないが否定的累積は有へ転化するということである。前出した羽田闘争や大学闘争にしても偶然的な戦闘や運動の背後に旧来の戦闘や運動の否定と拒絶を(たとえ空しさというかたちであれ)つみ重ねており、そのような脈絡があったのだ。そして、われわれが生きて、闘い、老いていく過程は否定的累積のうち、耐えていくことが多いのである。未知で未跡な領域を切りひらき、その栄光をわがものとしたレーニンや毛沢東にしてみても、その背後に否定的累積や過程のうちに死に、消えていった無名の膨大なレーニンや毛沢東が存在していたのである。後退局面、過渡期の中でひとつの背定的な回路が発見できなくとも、否定的な闘いの累積という方法があり、それを姿勢としなければならない。神話はよみがえるとは何か。60年のあと、われわれは共産主義者同盟や全学連(第一次BUNDと闘い)の遺産として、例えばスターリン批判や毛沢

の遭遇する困難性と糸口はどこか。それは膨化するかたちで累積していく時間、空間を構想力として構成することの困難性であり、同時に旧来の理論や理念が無効であるということである。又、ブルジョアジーによつてジャーナリズムの手で流布される膨大な情報と三文左翼によつてまきちらされる「階級闘争」の講談である。さしあたってわれわれのなすべきことは、つまり糸口はつぎの諸点である。(イ)われわれの理論と実践の総括のうち膨化するかたちで累積する時間―空間の運動へ接近すること。(ロ)ブルジョアジー、ジャーナリズム、三文左翼の諸神話を粉砕することである。前者の基軸はわれわれ理論的集大成である「過渡期世界論―共同体論」の諸実践の総括を時間―空間の累積としての共同体(とりわけ政治的、幻想的)の組み方と累積把握のうちになすことである。そしてこの環は共同体の組み方と累積を歴史的把握としてなすこと。集中的に現在を象徴する共同体の把握としてなすこと及びこの表象としての民族―世界―国家、戦争の分析へ至ることである。

(1) われわれの世界把握や世界理解はいわゆる「過渡期世界」と「共同体論」であった。われわれの「過渡期世界論」はベトナム戦争のもたらした衝撃によつて、それまで秘かに

東路線批判をうけついで。これはわれわれの前提であった。が60年代後半の過程で突然の如く毛沢東神話がよみがえったのは大変ショックであったのだが、ひとつの前提的事柄がいつも簡単に崩されていくのはたいへんな経験であった。ここに象徴される神話のよみがえり方をみていると、否定的累積としての神話の破壊は徹底してなされなければならないということである。

これら否定の弁証法というべき姿勢は暗中摸索というべき時期の闘いの重要な指標である。

Ⅱ 国家―社会編成と革命の現実性

― 共同体と

戦争・革命 ―

戦後史の、いや近代世界の終焉と超克が人々の意識の中に、国家や社会の解体意識とともにひろがっている。それを象徴するいくつかの事件が起っている。この時代の中でわれわれが闘い抜く指標というか視座については前述した。われわれがそれをより具体化するかたちで前進せんとすれば何が解明されなければならないか。われわれは現段階の国家―社会編成の運動と構造の把握にそれを定める。このとき、われわれ

直観していた戦後世界秩序―構造の新たな把握を必要とすることへ回答したことである。『先に要約すればといった過渡世界とは、どのような内容であるか。①戦後世界を過渡期世界としてとらえる第一の指標は発展段階やイデオロギー的性格は異なるが、国民経済―民族国家をメルクマールとする近代的な共同体の全世界的登場である。②第二の指標は、このよきな国民経済―民族国家自身とその世界(他のそれとの交通形態)関係に、新しい特質をもちこんだこと、これである。これを比喩的にいえば、マルクス、ヘーゲルの時代が、かかる国民経済―民族国家の興隆期であったのに対して、レーニン、トロツキーの時代は成熟期であり、現代は老化期である。三〇年代、この成熟と老化の過度である。……③第三の指標は、従つて体制間対立は階級的対立(共同体の転変が新段階への移行としてのみあること)でなく、共同体の内―外の再編成とそれに見合う階級統合軸を必要とした支配階級の必然的産物である。……④第四の指標は、かかる共同体のイデオロギー的、経済構成上のいくつかのちがいは、「社会主義」

か、「資本主義」というものでなく、普遍的相違でなく、共同体の発展段階に応じて国家資本主義から国家社会主義へ至る種々の形態をもつこと、かつ相互変容すること。⑤第五の指標は、民族間対立や戦争は民族解放―独立が地域的課題

のうちにある限り必然であること。⑥いわゆる帝国主義国家間・内部の階級対立は全世界の共同体相互で、その内部で存在することが必然であり……⑦現存の支配階級、あるいはブルジョアジーは、国民経済―民族国家の不断の再編成過程において自己矛盾に逢着する……』(三上治、情勢の新局面とわれわれの道)。他方、共同体論は「階級・党・国家」についての了解や把握を大学闘争、三里塚闘争の実践的展開に依り、先験的な「階級論、社会主義論」からの訣別との格闘のうちで、つみあげてきたものであった。その要点は、つぎのようなものであった。『私の考えでは、今、最も普遍的なものとは、 \wedge 所有論 \vee を含む \wedge 生活思想 \vee 、あらゆる価値意識の転倒による関係の転質であろう。その水準で知識人―大衆の枠は止揚される。自然過程としての大衆の市民社会からの疎外、知識人の国家からの疎外は、 \wedge 何を媒介として \searrow 意識過程としての大衆の国家からの疎外、知識人の市民社会からの疎外と結合するか。私たちは、結合の環は、 \wedge 個体的所有―共同体的所有 \vee に基礎をおく、 \wedge 生活者思想だとい切る。所有論を含む \wedge 生活思想 \vee は総体であり、それ故、個的所有―共同所有の実現つまり搾取の廃止、関係の革命をはらみつ、新たな共同体の創出(階級の止揚)にまで及んでいるのである』(神津陽、共同体論へ)。

われわれの「過渡期世界論―共同体論」の再構成―深化発展も含めてやってみよう。

(a)前述したように、われわれは人間の存在を、マルクス流の自然必然史的展開になぞらえれば、時間―空間の累積過程として了解する。そしてこの時間―空間の累積過程は「個体」―「対」家族、「共同性」対、個体以外の世界」という構造を媒介として成立する。われわれはこの時間―空間の累積過程を共同体の累積過程、組み方として把握する。それは二重の意味をもっている。「個体、対」以外の世界としての共同性の累積過程を独自のものとして考察出来るということと、「類」という概念が「個」や「対」を包摂してきたように共同体、もしくは共同性は存在総体としても考察できるという事。「個」、「対」を逆立的に包摂した共同体が「類」の表象、存在構造として展開されてきたということの考察とその共同体の消滅を企図することは同じこととしてある。(暗に含んでいるということが適切であろうが)。われわれはこの共同体を「国家」「市民的社会」として考察するが、これは次のようなことに照応している。『現実のわれわれは市民社会から階級によって疎外され、国家からは法によって疎外されている』(吉本隆明、マルクス伝)。階級は廃絶され、国家は死滅されねばならない。唯だ、階級の廃絶と国家の死滅は

『私たちが、「組織論とは国家批判である」と了解したとき、主要な問題意識は、次の五点であった。1、第一は、60年安保総括から導き出した。私たちは「ドイツ、イデオロギー」にいう「市民社会―政治国家」関係が、安保過程で全面開花したと考えた。天皇制、戦争期、戦後民主化を経て無神論社会が公的民主主義、階級分解の双方で成熟したと考えた。……2、第二に「日共」神話からとき放れた諸グループの「疎外された労働論」批判である。それは労働者や団結の質を当為や課題で語る限度で経済決定論+主体性論の短絡ではない。……3、第三は、インテリゲンチヤと大衆の結合の環を実践の内容において、提出しきれなかった。……4、第四に、ブルジョア組織とプロレタリアート組織の差異についてである。……5、最後は、「政治」の枠のせまきである。新左翼が政治に関わるるとき、なぜ閉じられた宗派として登場せざるを得ないか……』(神津陽、共同体論へ)。

われわれは今、この諸内容を再構成される必要があると感じられる。それは次の諸点からである。(イ)第一は、国家・社会編成への言及が同時にその止揚を含む内容からである。(ロ)世界了解を押えるときの方法と基準についてより鮮明化が必要とされるという点からである。これは先験的な「社会主義論、階級論」への訣別をより徹底しなければならぬからである。

単純に短絡させてはならない。

(b)われわれの世界了解、世界掌握はつぎのような言葉に象徴される。国民経済―民族国家をメルクマールとする近代的共同体の全世界の登場、もしくは「ドイツ、イデオロギー」にいう「市民社会―政治国家」の全面開花等である。これはわれわれが「過渡期」という言葉に国家死滅、階級廃絶へのという主体性をこめ、その客観性として表象したものである。支配階級すらも突きあたって壁、そのような情況への表象であったともいえる。また共同体の世界的、普遍的同一性を提示したものである。そしてマルクス、ヘーゲルの時代が国民経済―民族国家の興隆期であり、レーニン、トロツキの時代は成熟期であり、現代は老化期であるという言葉は何か。これは共同体の差異性を発展段階論風の時代区分と先進―後進地域性でとらえようとしたのである。これらの背後には共同体の普遍的性格と特殊性とを「資本主義国(国家群)、社会主義圏(国家群)、旧植民地(国家群)」で区分していくこと、一九一七年ロシア革命を時代区分していくことの拒絶を含んでいた。例えば「社会主義国家」などというのは形容矛盾という以外、なにも意味ない。またわれわれはソ連、中国、キューバ等の社会編成を資本制的社会構造から社会主義的社会構造へ突入したとも、それへの過渡だともみていない

らだ。共同体の構造的普遍性と歴史性累積、共同体の普遍性と特殊性という視座からこれらは再構成されなければならない。

(c) これらをなすとき、つまり共同体の構造的普遍性と歴史性累積、共同体の普遍性と特殊性という視座から考察を進めんとするとき、ここではまず二つのことを問題としなければならない。そのひとつは、共同体の構造的普遍性と歴史的累積との関連である。他のひとつは共同体の把握の基準をいわゆる近代的な共同体の組み方か、もっと包括的なものとするかである。正直なところをいえばこれら二つの問題の整理はわれわれの手におえない気がする。ただこの整理は今後のわれわれにとって重要な突破口になるであろう。

(d) 共同体の普遍性と特殊性から進めよう。ここでいう普遍性は、構造的という視座からみれば、共同体のどのような構造が普遍的かということであり、マルクス流に言えば宗教、国家へというときの共同体の内部構造のようなものであり、また例のアジア的共同体、古代国家的共同体、ゲルマン的共同体等々である。繰り返すまでもなくこれらは歴史的、時間的な概念であり、ここでいう普遍性は共同体の構造度である。これらはつぎのようにいえる。共同体の内部的構造は必然のごとく国家的構造、編成へいたると。国家的構造—編成

のような共同体への考察の重要性も。

(e) 共同体の普遍性と特殊性、共同体の累積方法の同一性と差異性等々について考察することに、多分自己の共同体が普遍的、世界的と信ずることに疑問を感じずにすんだ部分はさほど切実さを持たなかったであろう。例えば西ヨーロッパ諸国やアメリカでは、何故なら彼らは自己と異質な共同体を地域的、自然的（地理的、空間的）特殊性か、発展段階風に位置づければよかったからである。なるほどこれに対抗するよう異質な共同体に普遍性を、原始回帰論を主張する部分がいなかったのではない。ただその時も彼らの敵対者の主張を前提的にみとめていたのである。彼らにとってこの検討は国家、市民社会という共同体の不可能性を意識せざるを得ない、いわゆる「過渡期」状況が登場してからである。これに対して、遅れて近代的な共同体形成をなした部分にとって、それはまったく違っていた。そこでは自己の共同体形成を西ヨーロッパやアメリカがたどった道をたどらねばならないという衝動と独自の道があるのだという主張が強烈に意識されなければならなかった。広範な意味での近代主義と土着主義の私たちとして。「国家、市民社会」に象徴される共同体が近代の果てとして行きついたという自覚にとらわれたとき、このことは革命への回路としてより強烈にである。「近代の超克」

へ転化する共同性は自然的、地域的、あるいは種族、異族的に、村落的に累積されてきた精神交通、規範、つまり土着的な宗教、神話（掟）等々のそれである。もちろんここでいう地域的、自然的、精神的交通、規範は空間性や場所性に非常に近いのであるが、時間的（歴史的）なものである。だから歴史的な国家とはもともと多くこれらを累積したものであり、世界性ともいいかえることも可能である。国家を世界的にとらえようとすれば、歴史的にせねばならない理由である。

それ故にある国家は重層的、複合的にこれらの地域的、自然的精神交通、規範（比喩的に歴史的、時間としてのアジア的共同体、古代国家的共同体等々を想い浮べてもよい）を累積している。最も普遍的な国家は共同性の（時間的）累積度であるということとはヘーゲル流の理念の発展史として価値づけているのでもない。国家死滅を暗示しているのである。今日、国家を輪切りにして考察してみたとき、共同幻想の構造（法等のそれ）、他幻想（「個」「対」）との関係がみえるはずである。歴史的にみたととき重層的、累積的構造がみえる。ここから先の回路は定かでないが、国家死滅させるといふ手前まできているよう思える。そして共同体の累積方法の同一性と差異性の考察の重要性がわかる。また時間的な遡行、そ

という言葉のひびきにこれは象徴されている。『「近代の超

克』は、いわば日本近代史のアポリア（難関）の凝縮であった。復古と維新、尊皇と攘夷、鎖国と開国、国粋と文明開花の段階で、永久戦争の理念の解釈をせまられる思想課題を前にして、一挙に問題として爆発したのが「近代の超克」議論であった』（竹内好、「近代の超克」）。

進化論風の発展段階論から原始回帰論まで包括する——そしていわゆる複合的発展論（二重構造論等）も含めて——諸論争は存在してきた。われわれはこのように議論の拒絶から出発しなければならぬ。以上の諸点を総括してのわれわれの世界理解は何か。

(f) それは要約すれば以下のようにまとめられると思う。

(i) いわゆる「過渡期」概念は「国家」または「市民社会」と呼ばれる共同体が近代の果てとして行きついているという。もちろん中国、ソ連等々「社会主義、労働者国家」と呼ばれるものもこの共同体に包括される。そしてわれわれが「過渡期」という概念を用いるときはこの共同体を止揚する「国家の死滅、階級の廃絶という」ことを含む。

(ii) 「国家の死滅」と「階級の廃絶」は当然にも連環するが、巨視的にあって、短縮させてはならない。われわれ

の「過渡期世界論」と「共同体論」の連環のあいまいさはそこにあつたと思われる。国家と世界の連環、市民社会と世界の連環の位相のちがいを明確にせねばならない。たしかにマルクスもいつているように国家—社会の編成は個人の生活過程から出てくるし、民衆の存在に源泉がある。ただその入りかたと出かたは同じでないのである。これを対応させるには巨視的な視点がいるのである。△マルクス主義の概念や思考になれた人々からは反論が出るにちがいない。理解はともあれ、これをわれわれは吉本隆明から学んだ。たしかに、かつてわれわれも吉本隆明の立論を論理的に納得しながら、感性的にはひっかかりを感じてきた。

例えば△政治△の本質を観念(幻想)という時、又、△個人的幻想△、△対的幻想△、△共同幻想△といったとき、論理的には納得しながら、それらの区分を拒否するように混在させているのが人間なのに、何故というように。がこのことは具体的生活よりはるかに遠いベトナム戦争を、よくわかっているように議論することに自問を発してみればよく了解されるはずである。あえていえば△存在△、△死△等々に考察をすればともいえるだろうか。

(イ)「国家の死滅」はたしかに世界的にしか不可能である。それは二重の意味である。第一は「階級」の廃絶なしに

国家の死滅が世界的でなければ不可能というのは、国家(共同幻想)の成立根拠にあるのだ。ある「国家」は、共同幻想は他の「国家」、共同幻想をかならず共時的に存在させている。だからまたかならず相互変容するのである。

この視点さえあれば共同体論と過渡期世界論の連環は明確である。「国家」を死滅においこむ共同性は(過渡的なものであるとしても)ただちに他の国家(世界)へベクトル変容するのである。空間的現象をもっている国家へといいかえてもよい。周知のように、われわれは民族—世界空間の転覆という表現に「国家の死滅」ということをあらわしてきた。われわれが「民族」と「世界」が相補概念であるといったとき、「国家」、共同幻想の共時性をあらわしていた。けれどもそこであいまいさは「民族」概念がどうしても差異性を含んでしまうとき、壁につきあたった。ある共同体と共同体の同一性は「世界」のほうへひっぱられ、その差異性は「民族」のほうへひっぱられていくようにある。そして「世界」のほうへいくと重層性は失われて、「世界」は平板化していき、「民族」のほうへいくと統一性が喪失するよういきついた。われわれはこれを次のように再構成出来る。「世界」に表現しなかったのは、共同体の構造の水準、構造の普遍性のことである。「民族」とい

「国家の死滅」はないということである。くりかえすまでもなくこのことは巨視的なことであるが。「階級」はいかなる意味でも世界的にしか廃絶されない。他の意味は国家の本質に関わるものである。国家の本質は共同幻想である。このことを現存の国家にあてはめればそれは次のようになる。共同幻想の歴史的累積と現存の生活過程を共同幻想へ疎外したものの交点に国家は成立すると。これまで展開してきたように、共同幻想の歴史的累積というのは時間的概念としての精神的交通や規範のことである。ある国家が重層的、複合的に共同幻想(例えばアジアの共同体、古代国家的共同体等々を考えればよい)を累積していくとき、現存の生活過程から疎外した共同幻想の核(水準)と歴史的(時間的)に普遍的なものとして共同幻想の核(水準)とは同一ではない。ここでいう共同幻想の歴史的累積というのは特定の地域での年代的積みあげをかならずしも意味しない。自己幻想、対幻想、共同幻想のからみの構造、規範や法の構造が歴史的な概念となったものの累積である。マルクスが宗教、法、国家への転化として共同幻想を考察したことが思いうかばれよう。国家の世界性とは共同幻想の全幻想とのからみの構造、法や規範の構造においてある極北の構造であり、又歴史概念となった共同体の累積度である。

うのは、歴史的累積度に重層性があるということである。がこれは(共同体の累積)時間(歴史)的概念であるから、ひとつの共同体に共時的に在るのである。「民族」という概念は生活過程としての自然過程から共同幻想へ疎外されたものの質(性格)の表象であるが他面地域概念を混同している。前者は国家に包摂されるものであり、このこと(生活過程から共同幻想へ疎外されるもの)水準と内容さえはつきりしていればよいのである。地域概念との混同は避けなければならない。

(二)われわれがしばしば語ってきた「体制論」は共同体の不可能性(老化といってもよい)の水準を擬制化するものといつてよい。

(三)現段階の共同体(国家)を考察する最大のものは戦争である(これについては後述)。

(四)市民社会(社会的共同性)の現段階の考察はいわゆる国民経済と世界経済の連環の水準から導き得る生産力と生産的諸関係、地域、家族域のからみでなさなければならぬ。ここでは都市と農村、対自然関係の水準が生産力と生産諸関係、共同性の内容をどのようにきめるか総括されなければならない。

(五)われわれがしばしば語ってきた日本では世界の尖端的

課題が国家、幻想域に集中すると述べてきたことは、これまでしばしば展開してきた「国家の死滅」と関連させれば明確であるだろう。社会運動が部分的というのは「階級」廃絶の世界的連関における日本の位置を説明すればあきらかであろう。いわゆるアジアの生産様式論争等は時間的（歴史的）概念としての共同体論として多くの意味を持つても、社会的共同性をめぐるものとしてはたいした重要性をもたない。社会的共同性としていけば社会的二重構造、重層的構造論を導くぐらいである。（地域概念、社会的共同性の世界的考察は別稿にゆずる）。

(2) 国家—社会編成の情况的把握へ進めてみよう。情況論的に国家—社会編成を視るということはもちろん情勢分析という事ではない。国家編成の現段階というとき、それは共同幻想の歴史的累積と生活過程としての自然過程から共同幻想へ疎外するもの現水準を確定する事である。そして社会編成という時社会的諸関係の世界的、日本の水準をみればよい。(a) 世界論を地域的概念としての「民族論」の連合としてみる一切の理論は無効である。この亜流としての第三世界がそうであることも。ベトナム戦争の衝撃から生れた第三世界論はひとつの現実に根拠をもっていた。いわゆる先進地域と呼

る。このことに「民族解放」や種々の価値づけをあてえようと、イデオロギー的な寄与をしようとしたことはないのである。これはファシズムとスターリン主義の歴史的登場を総括すれば自明のことではないか。また先進地域では共同幻想が拡散また衰退している故に地域的な民族概念（共同幻想の部分）の興隆的、集中的性格にいられる部分が「復古」的に登場することもある。これに民族責任論や帝国主義批判というイデオロギーを重ねてである。たいしたことはないのだ。この内容を最も高度な水準で展開した竹内好の仕事を見ればよくわかるではないか。竹内はこれらのことを次のように述べている。

『このヨーロッパの自己実現の運動のなかから、一九世紀後半になって質的变化がおこった。おそらく、それは東洋の抵抗と関係があるかも知れない。なぜなら、ヨーロッパの東洋への侵入がほぼ完成したときにそれはおこったから、ヨーロッパの自己拡張に向わせた内部矛盾そのものが意識されるようになった。東洋を包括したことで世界史は完成に近づいたが、そのことが同時に、それに含まれた異質なものを媒介として、世界史そのものの矛盾を表面に出した。進歩を導き出した矛盾が同時に進歩をさまたげる矛盾であることが自覚された。そして、この自覚がおこったときにヨーロッパの統一

ばれるところでの国家の衰退、共同幻想の拡散である。ベトナム戦争は二重の内容をはらんでいた。それは帝国主義と呼ばれる部分の共同幻想の拡散と過剰生産—資本のはけ口としてかけられる戦争である。他のひとつは、その地域での共同幻想を国家へ編成せんとする過程の戦争である。いわゆる第三世界論の成立根拠は後進地域人民、民衆にとってみれば自己の共同幻想（国家）を編成する普遍的根拠の主張と強いられる戦争への根拠づけである。前者が民族解放と呼ばれるものであった。また先進地域と呼ばれるところでは自己の共同幻想（国家）の拡散とその普遍性を映す鏡としてである。だから世界論としての第三世界論は民族概念（地域概念）へ傾斜したし、いわゆる辺境退却派から民族責任論者まで生んだ。後進地域にあつてはそこでの国家権力との必然のごとく強いられた戦争（たたかい）が国家編成へ傾斜すればするほど地域的な民族論へ至る。そのとき彼らの形成する地域的—民族的な国家は決して世界性へ転化することはない。そこでの共同幻想の歴史的基準、時間的な普遍性の水準として必然であるのだ。遅れて自己の共同幻想を近代国家へ編成せんとしたところでは地域的概念（よくいって生活過程としての自然過程から共同幻想へ疎外するもの）の性格が鮮鋭となる。いわゆる後進地域でのナシヨナリズム急進化とよばれるものであ

は内部から失なわれた。ヨーロッパの分裂の要因はいろいろの面から見ることが出来るだろう。が、分裂の結果は、ヨーロッパに対立すると同時に三つの世界をヨーロッパ内部からはじき出した。物質的基礎である資本の矛盾は、資本そのものを否定する方向に自己を導いて、ロシアにおける抵抗となつてあらわれた。ヨーロッパの植民地であった新大陸がヨーロッパから独立することで、ヨーロッパ的法則を超えていった。それは超ヨーロッパ的なものとなつてヨーロッパに対立した。第三は、東洋における抵抗で、東洋は抵抗を持続することによって、ヨーロッパ的なものに媒介されながら、それを超えた非ヨーロッパ的なものを生み出しつつあるように見える』（竹内好、中国の近代と日本の近代）。われわれは竹内好がヨーロッパへの抵抗、超ヨーロッパ、非ヨーロッパなもの、熱い視線を注いだもの（の帰結をみつつかある。竹内の枠にある第三世界論（広範な意味での存在をさしている）者たちがって、われわれはヨーロッパ、アジア、民族等々の概念では世界が押えられないことを教えられつつあるのではないか。

われわれはベトナム戦争についてつぎのように位置づけた。『ベトナム戦争の革命戦争であるゆえんは直接的には自己の民族的契機の復権を、その収奪者たる帝国主義との直接的戦

闘での勝利のうちに獲得しつつあることと同時に、民族契機を民族解放へ転化させる水準、過渡的とはいえ民族解放Ⅱ民族国家形成という戦後の世界的交通と括抗しているからである』(三上治、情勢の新局面とわれわれの道)。

われわれは今や当初の原則へ帰らなければならない。ベトナム戦争についてはこうである。(1)いかなるかたちと形態であれ、共同幻想の累積、国家編成を抑圧として闘う民衆の闘いを原則として支持するという視点の確認である。いかなる戦術やイデオロギーの形態をもとうともである。この視点でベトナム民衆の闘いを支持する。(2)ベトナム戦争の世界性はそれが最強の帝国主義と戦争を展開している形態(この位相での革命戦争)や民族解放(共同幻想としての国家編成にすぎない)の普遍性でもなければ、第三世界という地域的特質でもない。共同体の相互変容が戦争というかたちであらわれるときの、歴史的、時間的水準である。ベトナムで形成しつつある累積しつつある共同体(時間的、歴史的なのであるが)の内容の水準である。(3)従って、われわれがベトナムも含めて世界性へ通底出来るのは、共同幻想としての日本国家を死滅においづめるその内容が、世界へ相互変容をさし示したときである。逆にベトナム民衆の共同幻想の累積過程、国家編成と闘う「共同性」が日本の共同幻想へ波及してくるものを

辺境論等々あたかも、共同幻想の拡散、空白を止揚するもののようにあらわれた。これらは共同幻想の消滅、国家死滅というかたちを通しての世界性へ至るといふものでなかったことはあきらかである。これは69年4月の敗北、沖縄問題、革命戦争等々での錯乱と状況に象徴されている。(2)いわゆるベトナム和平等々についてわれわれの評価は明確である。それは(1)のところでも語ったように、いかなるイデオロギーや形態をもとうと、国家権力や国家編成と闘う民衆を支持するということであり、逆にどのようなイデオロギーや戦術形態をもとうと、国家、民族編成を支持しないということである。われわれの世界的尖端的課題としての共同幻想の消滅、国家の死滅とベトナム戦争は直接連環しない。世界同時革命は空間的なものでなく、歴史的、時間的なものであり、世界の尖端的課題として共同幻想や国家をおいこむ内容が空間へ相互変容していく、つまり、共時性の内容である。

(b)沖縄闘争をめぐる諸問題とはなんであったか。われわれが確認しなければならないのは次の点である。「沖縄」をめぐる分水嶺は沖縄を地域的、空間的概念としてみるか、時間的概念としてとらえるかである。沖縄解放、沖縄独立、差別、植民的抑圧等々さまざまなスローガンや価値寄与しようと、地域概念であつかう限り決して国家の本質的課題となり得な

国家と闘う課題へ構造化したときである。だが以下の見解にしめされる限界を持つていると思う。「ヨーロッパの内部矛盾が自覚される危機のたびに、いつもヨーロッパの意識の表面にかぶものは、それが潜在的にもつ東洋的なものへの回想である。ヨーロッパが東洋へ郷愁を抱くのは、ヨーロッパの矛盾の様相のひとつであろう。矛盾が顕在的になればなるほど、彼は東洋を思わずにはいられない。東方主義者はいつでもいた。しかし、世紀末と呼ばれる危機に際してほど、それがはっきりあらわれたことはなかった。その危機は、今日まで続いているヨーロッパの分裂の危機である。ヨーロッパは東洋を包括した、包括しきれぬものが残る感じがしていたように見える。それはヨーロッパの不安の根のようなものである」(竹内好、中国の近代と日本の近代)。ベトナム戦争の日本への波及の構造は先進地域での共同幻想の拡散、ないしその空白へはいりこんでくるというかたちであった。われわれはベトナム反戦闘争の二重性ということでの波及構造をみてきた。即ち、いかなるわたちであれ国家権力、国家編成と闘う民衆を支持するというかたちでの反戦闘争であり、他のひとつは共同幻想の拡散、空白との闘争である。周知のように後者の課題はベトナムの波及させてくる内容からは直接導きえぬものだった。第三世界論、脱国家論、民族責任論、

い。たしかに沖縄民衆の現存の生活過程が国家へ(共同幻想)疎外するものの質によって、日本に於ける国家の本質問題となるという人々がいる。けれどもその場合も、時間概念としてなのである。そのことに過剰な意味づけをしてはならないのだ。時間概念としてとはどういうことか。それは、歴史的、時間概念としての沖縄とは天皇制として表象される日本的な共同性と異なる独自の共同性(体)をかかえているということである。ここには宗教から国家へ、法へのつなぎ目をおそらくにするものがあるのだ。地理的、地域的概念としての「日本」、「沖縄」の関係はせいぜいのところ幾次かの琉球処分について明らかにするとどまるが、時間概念としての「沖縄」、「日本」の関係は共同体の累積、つまり共同幻想の累積の歴史をとくのである。そして、時間的遡行は原始への回帰でなく、共同幻想を消滅させるという究極の視座を歴史的日常(歴史的日常とは発展段階論的今日でなく、時間空間、共同体の膨大な累積過程だ)に関わらせるといふことだ。

「沖縄」と「ベトナムー朝鮮ー中国」をアジア一般として包括しないであつかわねばならない理由である。世界や世界史ということを地理的、地域的にしかあつかえなければ「事実」や「情報」以上を出ないということは必然である。その

とき科学のよそおいをしたイデオロギー的裁断やロマンという感傷を密輸入させていることは経験ずみのことである。社会編成をあつかうとき地域性が重要度をしめるのは又別事である。限られた生活圏を必然のように生きる民衆にとって世界を視れるようにかえしていくためにはこのことは重要である。日常の中に歴史と世界を、歴史と世界の中に日常を視るということではこれらのことは重要である。69年段階で「沖繩」問題をスケジュールか抽象的(空間的)に、又復帰、独立解放のいずれのスローガンも、拒絶するというようにしかあつかえなかつたわれわれの限界は明らかである。ちようど「中央権力」論をあつかつたときの限界と同じように。観念、幻想、時間としての共同体(国家)の考察をより徹底してなしえなかつたというように。

(c)文革、米中接近、日中国交樹立とつづいてきた局面に於ける中国の諸問題に言及しておこう(ここでの軸は主に国家問題として)。われわれはこの間の中国の動向を革命外交の支持ということから賛美することもしないし、また反スタ一般で事足りりたくない。そのようなことは前提の前提であり、中国が「革命」以前であるということは(とりわけ社会的革命において)自明である。また民族責任論の軸としてみるという視点もとらない。われわれの視座は中国の幻想的な

抵抗を通じて、東洋は自己を近代化した。』(前記と同じ)。彼は東洋の抵抗における日本と中国のコースをみる。前者に転向文化を、後者に回心文化をみる。引用を続けてみよう。『回心は、見かけは転向に似ているが、方向は逆である。転向が外へ向う動きなら、回心は内へ向う動きである。回心は自己を保持することによってあらわれ、転向は自己を放棄することからおこる。回心は抵抗に媒介され、転向は無媒介である。回心がおこる場所には転向はおこらず、転向がおこる場所には回心はおこらない。転向の法則が支配する文化とは、構造的にちがうものだ。私は、日本文化は型としては転向文化であり、中国文化は回心文化であるように思う。日本文化は、革命という歴史の断絶を経過しなかつた。過去を断ち切ることによって新しく生まれ出る、古いものが甦る、という動きがなかつた。それは辛亥革命と明治維新の比較によつてもわかる。明治維新は、たしかに革命であつた。しかし同時に反革命でもあつた。明治十年の革命の決定的な勝利は、反革命の方向での勝利であつた。その勝利を内部から否定していく革命の力は、日本では非常に弱かつた。弱かつたのは、力の絶対量において弱かつたよりも、革命勢力そのものが反革命の方向に利用されていくような構造的な弱さであつた。(ノーマン『日本における兵士と農民』参照)辛

共同体の形成、累積がどのような世界史的位置をもつかという点である。周知のように中国における近代での共同体の形成、累積について最も精力的に展開してきたのは竹内好である。そして中国の歴史的研究としてウィットフォゲルや30年代コミュニストとファシズムの密月に一翼を占めた尾崎秀実や橘樸や大川周明、北一輝、の仕事しか知識としてもっていない。これらの諸検討は残念ながら今、私の手にあまるといわなければならない。ここでは竹内好の見解についての若干の検討と毛沢東の共同体に対する思想の問題点にふれよう。竹内好は中国の根底に東洋をおき、東洋の抵抗(持続として)として中国をみている。『ヨーロッパと東洋とは、対立概念である。近代的なものは封建的なものが対立概念であるように、もつともこの二組みの概念間には空間的、時間的という範疇のちがひがあるであろう。……東洋には、本来にはヨーロッパを理解する能力がなかりでなく、東洋を理解する能力もない。東洋を理解し、東洋を実現したのはヨーロッパにおいてあるヨーロッパ的なものであつた。東洋が可能となるのは、ヨーロッパにおいてである。ヨーロッパがヨーロッパにおいて可能になるだけでなく、東洋もヨーロッパにおいて可能となる』(竹内好、中国の近代と日本の近代)。『ヨーロッパがどう受けとつたにせよ、東洋における抵抗は持続

亥革命も、革命⇌反革命という革命の性質はおなじだ。しかしこれは革命の方向に発展する革命である。内部から否定する力がたえず湧き出る革命である。孫文には革命がいつも「失敗」と観念されている。辛亥革命のうみ出した軍閥政治(それは一種の植民地的な絶対王制だ。)を否定し、さらに革命党そのものの官僚化を否定する方向に進展する革命である。つまり、生産的な革命であり、したがって真の革命である。明治維新は成功したが、辛亥革命は「失敗」した。失敗したのは、それが「革命」であつたからだ。』(前出同)。ヨーロッパ、東洋という概念に疑問がある。われわれは、やはり中国の歴史的共同体形成という視座が重要であると思う。そして近代における日本と中国の共同体が経てきた道はむしろ相互変容の位置に接近しつつあるのだと考えている。毛沢東の共同体に対する思想の問題はそれぞれの関係に於けるのつべらばうの構造にあると考えている。彼の合作社や根拠地論という共同体をめぐる思想が中国的現実の中で不可避であり、必至であつたとしても。よし政治的に最も有効であつたとしてもである。それは幻想域、個体・家族域の位相の独自性が基本的なところで押えられていないということである。幻想域での自己幻想、対幻想、共同幻想について、その構造について誤謬があると考えられる。文革はその象徴であ

る。社会域で農村―都市、分業―所有、つまり階級概念に同じようなところが存在する。これは憶測を出ないが初期の人民公社の報告を読むと彼には共同婚と共有婚とを混同しているところが在る。対関係は私的所有発生以降成立したのでなく、人類発生（成立）とともに成立したのであり、人類史が経た共同婚はエンゲルスが誤解したような雑婚でなく、対関係が共同性（掟、村落）によって規成された構造である。毛沢東に象徴される近代の国家（共同体）編成にでなく、数千年にわたる中国の共同体の累積史こそ対象でなければならぬ。

(3) われわれは前出でつぎのように書いた。現段階の共同体を考察する最大ものは戦争である。これについては次のような言葉をまず想い浮かべる。『戦争とは「個」の体験にとつては何か、平和とは「個」の体験にとつて何か、を語ることは現在でも困難である。それが「類」にとつて何を意味するか、問うことは決して易しいことではない。レーニンの「帝国主義」論は、この問題に理論をあたえた数少ない古典的著作といえようが、私達が、「個」と「類」の接点の「存在」において、戦争と平和の問題からみあった泥濘の構造をとりあげようとすれば、依然として困難は困難として残るのである』（吉本隆明、初期ノート）。われわれは戦後の「平和」な時代に育ってきた。われわれに戦争への考察を進める

生活過程（自然過程）の現存から共同幻想として疎外したものの（共同倫理や規範）と歴史的、時間的に累積された共同幻想の交点に成立すると。歴史的―時間的に累積された共同幻想というのは特定の地域での年代的積みあげということも意味しない。それはあたかも自然史的過程のように累積されていく共同幻想（国家、政治的共同体といつてもよいが）の歴史的、時間的区分といえるように転化したものといった段階を示している。（前出したアジアの共同体、古代共同体、ゲルマンの共同体、宗教的国家、自由国家等々というように）。国家（共同体）の民衆の現存から疎外される生活倫理（規範）と歴史的、時間的な共同幻想の組み合わせ、結合構造、様式はいろいろあるのである。国家が地域的類型からはみ出してしまふのはここに依っている。又地域概念である民族性や階級性（社会的共同性）の類型化からはみ出してしまふのもである。近代日本の国家（政治的国家）の特質を社会的構造（社会的な階級関係、資本制的諸関係）、地域的―民族性（東洋、アジア、ヨーロッパ）の類型化からとらえる試みが失敗してきたのもである。この類型化からはみ出る要素を複合論（二重構造論）、雑種論で補うということが失敗してきたのもである。ここに（近代日本の国家編成）象徴されたことは、程度の差はあれどこでもあることであり、世界性が集中したこ

体験の手がかりは親の体験の昔語り風の継承と、戦中派からの思想的体験である。そしてベトナム戦争を中心とする後進地域の「彼岸」の戦争であり、国家権力との闘いという「戦争」である。これらはいったいどこで交叉するのか。どこで像を結ぶのであろうか。「戦争はある手段を使っての政治の継続である」とは有名なクラウゼヴィツの言葉であるが、依然として真理である。周知のようにレーニンはこの言葉を「階級」矛盾の転化として押えている。戦争が政治の継続ということは政治の成立根拠である国家（共同幻想）に関することである。そして国家（共同幻想）との連環において、「市民社会」の「階級」と関るのである。すべての戦争が国家の理論としてたちあられ、貫徹するのはここに依っている。われわれは戦争を国家（共同幻想）の問題として考察しなければならぬ。「市民社会」の「階級」との関連からあらわれる戦争は地域―空間としての国民経済（それを支配する階級）が他の地域を侵略―支配する帝国主義戦争か植民地解放（民族解放）戦争である。これは究極的な戦争の根源であるが、国家（共同幻想）を経ることなしに「階級」の廃絶への道がない以上、これが国家のかたちであられる限り、考察はまずそこへ行くのである。国家（共同幻想）について次のように述べてきたことを想起してほしい。国家とは、民衆の

とを意味するのだ。国家の位相での世界性を地域概念としての民族国家の総和とか連合でとらえることは出来ないということ、生産力―生産諸関連の世界的連環（帝国主義の世界性）だけでとらえられないのもこの故である。今日、国家（世界性も含めて）を正確にとらえようとすれば次のことが重要である。国家（世界）を構造的にとらえれば幻想、観念の内部構造（「自己幻想」、「対幻想」、「共同幻想」の連環、「法の構造」）と生活過程との構造的関係であること。国家―世界の関係的把握は歴史的、時間的累積過程、累積の把握である。現存の国家、幻想総体の内部構造、現存の生活過程から疎外する共同倫理、規範、共同幻想（観念）の人類学的累積総体を押えるということが重要なのだ。何かくり返しになったが、絶えず念頭に入れなければならない。

（近代的）戦争とは何か。国家の位相における戦争とは何か。究極的にいえば人間の幻想や観念の歴史的、時間的累積としての共同幻想と生活的現存での生産力と生産諸関係の累積が疎外する共同幻想（生活倫理、規範）とが近代国家として編成されていく過程での摩擦、葛藤といえる。当面まずここでわれわれの把握しておく必要があるのは次のことである。第一に戦争は共同幻想の歴史的、時間的累積が必然的な自然過程であるように、何ら意志の問題でなく自然過程であ

ること。第二に戦争は国家の不可避的な属性であり、戦争の死滅、消滅は国家の死滅と同義であること。その意味ではクラウゼヴィッツの戦争はある手段を使つての政治の継続であるというのは真理である。第三に戦争を価値化する論理は家族↓市民的社会↓国家↓世界、自己意識↓国家精神↓世界精神というヘーゲルの論理と同じであること。第四に、戦争の「意味」と「価値」という概念を導入する必要のある事。戦争は国家⇨共同幻想の考察と同じように、微細にかつ、具体的に必要のあること。第五に、ここでのわれわれの中心課題は戦争と革命、つまり国家と革命にあること。等々である。

近代における戦争は共同幻想（国家）の歴史的、時間的累積と国家再編の急激かつ暴力的変容過程であつたが、共同幻想の最も露骨な発現過程であつた。より時間的に累積している部分からの強制と抵抗というかたちをたどつた。社会的過程での急激かつ膨大な生産力と生産諸関係の拡大が経済過程での地域的支配強化（侵略）を促すと同時に、生活過程の自然的な倫理、規範（ナシヨナリティ）の崩壊をもたらし（同時に解放過程であつたが）、より政治的な共同幻想を不可避とした。支配階級はそれを逆手にとり侵略をなしたといえるであろう。竹内好流の表現をとれば、ヨーロッパの侵入、征

服同化と東洋の抵抗（国家のレベルでは時間概念であるが）いえるだろう。ここでの帰結は戦争の勝利は共同幻想の普遍性（累積度と構造）にあつたということである。だがこれは不可避的な自然過程であり、戦争そのものに価値づけをあたえることがないように、勝利に価値づけることはない。戦争に意味をあたえらるゝとしたら、大衆原像と人間の存在の生活過程を導入するしかないように思われる。戦争に於ける意味とは何か。竹内好は歴史的、時間的により普遍的な共同幻想の空間的相互変容、これらの展開としてのヨーロッパのアジアへの侵入、アジアの同化をアジアはヨーロッパにおいて可能となつたと意味づけしている。アジアの抵抗の意味を非ヨーロッパ的なものの創出として意味づけている。ヨーロッパとアジアの二重性を象徴した日本についてつぎのように。『大東亜戦争は植民地侵略戦争であると同時に、対帝国主義の戦争でもあつた。この二つの側面は、事実上一体化されていたが、論理上は区別されなければならない』（竹内好、近代の超克）。『太平洋戦争はたしかに二重構造をもっており、その二重構造は征韓論にはじまる近代日本の戦争伝統に由来していた。それは何かといえ、一方では東亜における指導権の要求、他方では欧米駆逐による世界制覇の目標であつて、この両者

は補完関係と同時に相互矛盾の關係にあつた。なぜならば、東亜における指導権の理論的根拠は、先進国対後進国のヨーロッパ原理によるほかないが、アジアの植民地解放運動はこれと原理的に対抗して、日本の帝国主義だけを特殊例外あつかいしないからである。一方、「アジアの盟主」を欧米に承認させるためにはアジア的原理によらなければならぬが、日本自身が対アジア政策ではアジア的原理を放棄しているために、連帯の基礎は現実にはなかつた。一方でアジアを主張し、他方で西欧を主張する使いわけの無理は、緊張を絶えずつくり出すために、戦争を無限に拡大して解決を先に延ばすことによつてしか糊塗されない。太平洋戦争は当然「永久戦争」になる運命が伝統によつて与えられていた。それが「国体の精華」であつた』（竹内好、前同）。

竹内好が東洋の抵抗、植民地解放、中国革命とつなぎ、アジアの抵抗（広範な意味で後進地域のそれといつてもよい）に意味づけるのとわれわれのそれは異なる。彼のイメージは、お次の中により鮮明にうかがえる。『毛沢東思想の中心は、おそらく根拠地の思想であろう。根拠地とは、一種の古代的ユートピアの伝統をになつた、生活共同体の単位であつて、それ自身に生成発展するものである。かつての解放区がそれであり、解放区の全国化である今日の中国もまた、世界の平和

と進歩における根拠地となる。ここにマルクス主義とアジアのナシヨナリズムの見事な結合が見られる。マルクスが階級対立そのものから、レーニンが先進国と後進国の対立そのものの中に、植民地を根絶させる原理を発見したのである。毛沢東を経過することによつて、アジアのナシヨナリズムは、西欧への反抗と諦念の段階から、自由、平等など西欧近代の生み出した価値遺産の継承発展の段階へと論理的に進む』（竹内好、アジアのナシヨナリズム）。

ヨーロッパ、アジア、植民地という概念を経済的、地域的としてだけでなく、同時に歴史的、時間的概念として（もつともヨーロッパ、東洋等々をわれわれ実体概念でなく、比喩として使っているのだが）抵抗⇨戦争ということの意味を与えればどうなるか。われわれはまず次のような原則をたてる。異民族支配であれ民族的支配であれ国家支配とたたかう民衆大衆の闘いを原則的に支持すること。又どのようなスローガン・イデオロギー武装をもとうとも、国家支配を批判するということである。ある民衆⇨大衆の国家的支配との闘いが不可避的に国家編成と重るときは具体的、微細に検討すればよいのである。『国家の総力を挙げ』てたつたのは、一部の軍国主義者でなくて、善良なる大部分の国民であつた。国民が軍国主義者の命令に服従したと考えるのは正しくない。

国民は民族共同体の運命のために「総力を挙げ」たのである。今日、シンボルとしての天皇と権力主体としての国家と、民族共同体としての国民をわれわれは区別することができるが、それは敗戦の結果そうなのであって、総力戦の段階へ類推を及ぼすことはできない。ここに、戦争中の単なる迎合、便乗、追従、つまり思想放棄のみせかけの思想と、自主的な、創造的な、民衆に責任を負う思想の見分け方の困難さがある。民衆に石を投げられる予言者を別にすれば、ある状況の下における抵抗と屈服はほとんど紙一重であった』(竹内好、近代の超克)。

ここで竹内の使っている権力主体としての国家と民族共同体としての国民という概念は不正確であり、あいまいであるが、民衆の国家との闘いと国家再編とを区別することの困難性がある。この区分は例えば、近代中国に於いて民衆・大衆の闘いと毛沢東路線の間で、毛沢東の路線が不可避に強いられ、検討するということにやればよいのである。われわれは後進地域の国家―社会編成に世界史的根拠や課題を与えることもないし、そこで形成されてきたような革命理論、思想(これまでの)に普遍性をあたえることが出来ない。世界革命の根拠地、非ヨーロッパ的なものというようにである。当

会主義から社会ファシズムまで)、民族的、地域的性格、擬似大衆的性格をより過度に、過激にもったということのあらわれであって過大評価することはないのである。後進地域に於ける国家―社会再編はそれが自然史的、不可避であったということとしてしか評価してはならないのである。唯一、そこでの民衆の国家、共同幻想との闘いを評価すべきなのである。例えば、太平洋戦争に於ける日本の民衆・大衆は民族共同体のために闘ったのではなく、歴史的、時間的な普遍性としてやってくる歴史的な国家、共同幻想と闘ったのである。そして彼らがこの闘いを民族共同体といおうと、国家といおうとそこにしか回路をもたなかったとき、不可避的に敗北したのである。そして民衆・大衆の国家、共同幻想との闘いという契機の評価は徹底的になさなければならぬのであって、ファシズムを推進した部分(民衆・大衆)も含むのである。民衆―大衆の国家、共同幻想と闘うという契機が支配階級の国家、共同幻想の強化へ逆手にとられていくというだけでなく、自ら過激にそれを担っていくという時、共同体(政治的共同体)の根源とそれを生み出す生活的現存への闘いと拮抗というモチーフが出てくるはずだ。共同体(国家)と共同体の優劣には不可避的な自然過程ということしかないのである。唯一、民衆・大衆の契機とつらなっていく国家を死滅させる

然にも、第三世界、民族責任論、辺境論、差別論、アジア革命論、原始共产制復権論等々でもある。植民地解放、後進地域での帝国主義からの経済支配の排除はいかなる意味でも地域概念としての階級廃絶という世界史的課題をこなうことは出来ない。例えば、中国の社会編成は辺境―合作社―人民公社と拡大しても八階級V矛盾を解けないことは自明である。アジアの生産様式論、複合的發展論、いかなるコースを設定しても自身のうちに八階級Vの廃絶へいたらない。中国が独自の社会編成を達した中国が(中国民衆にとって優に革命であったろうが)、今日、先進地域の社会編成に変容させられていくことは不可避であると思われる。このことは修正主義、もしくは八社会主義的過渡期Vの問題として阻止することも、解決することも不可能である。これらは後進地域の近代的社会編成と解すべきである。又例えば近代中国の国家編成に民族独立―反帝国主義として世界的根拠をあたえることはしない。これは彼らが名辞上の「世界革命」をかかげているか、おろしているかどうか関係がない。彼らの創出した国家、政治的共同体が構造的、関係的に世界性に耐えられないということである。自由的国家に変容されるか、宗教的国家的要素をつよめるかのいずれかである。彼らの持った八階級的Vイデオロギーは後進地域の国家編成が階級的性格(ロシア的社

国家、戦争を死滅させる理論、思想というのはこれまでの歴史の内には一つもないということは確認しておかなければならない。民族責任論風の議論をこの視座で粉砕出来る。

後進地域では国家再編がどのようなかたちであれ、戦争をより強度な国家編成と結びつけるという道をとったのは必然であった。資本主義が自己に似せて世界を作る運動によって経済的な侵略(弱い環としての矛盾の集中)と歴史的(時間的)な共同幻想の強制(空間変容の暴力的発現)を強いられた後進地域は必然のごとく、経済的危機と政治的(規範、精神交通)危機を必然のごとくしいられた。(現在においてもである)。そこでは経済的・社会的に搾取、抑圧、または強度の、跛行的な蓄積を強用をしいられた。そして政治的(幻想的)には共同幻想の強度の累積をしいられた。これらの地域での第一前提は近代的な国家―社会編成であった。この編成過程は先進地域と呼ばれるところで経てきたよりはるかに血なまぐさいものであった。『幸福な時代であった。工業社会秩序の拡大が下積みの男女大衆のうえにもたらした苦難にもかかわらず幸福だった』(ワイトフォール、東洋的専制)。後進地域ではこのような幸福すらなかった。もちろん彼がいうような専制的支配の極端な音を想起させる、悪疫というようなものとは異っていたが。これらは近代日本の国家―社会編

成をみればよい。資本の急激な原蓄過程が二重構造的、複合的構造のうえにどんな矛盾をしいたかみればよい。共同幻想の極度の累積は日本知識人にどのような錯乱をもたらしたかをみればよい。われわれがここで見るべきはこのような地域で民衆の生活過程にもたらして経済的、社会的、精神的苦痛を支配階級はより過剰な激しい国家へ逆手にとって編成してきたということである。ここでは国家編成こそ環であった。

民衆の生活過程の現存の危機を国家へ疎外させるもの、共同幻想へ疎外させるもの（倫理といってよいが）の過剰化と過激化として逆手に組織することこそである。後進地域での国家編成が過剰なナシヨナリズムこそその象徴であった。それ故に、強いられた戦争を逆手にとって国家編成するということも。近代日本と中国の共同体編成は侵略―戦争を強いるものと強いられるものと、国家編成を強化するものと国家編成そのものを目指すもの、帝国主義と植民地等々という決定的な差異にもかかわらず、多くの共通性をもっている。われわれはイデオロギー的裁断を免れたところでこれらをいざれ考察するだろうが、国家編成へもたらしたものについてよくみておかねばならない。レーニン、トロツキ、毛沢東の政治的卓抜さは強いられた戦争を国家編成へ転化したことにあった。日本の社会主義者の屈折した姿であった北一輝の秘密が国家

ある。（これについてはくりかえさない）。国家の位相で、共同幻想の消滅、国家の死滅という歴史的、世界史的課題に耐る思想をもたなかったということはレーニンの政治的天才を象徴した「党」の理論として集中的にあらわれる。「党―共同幻想」への有機的価値づけは家族―市民社会―国家―世界、自己意識（自己幻想）―国家精神―世界精神と価値化されていくヘーゲル的方法へ転質していくことを防ぎ得ない。△階級的イデオロギー▽、△民族的、地域的特質▽、△擬制的大衆論▽で防ぎ得ない。「近代の超克」、「反資本主義」さまざまのイデオロギーをもつファシズムとコミニニズムが円環していったことの中にその限界は露程したといえる。毛沢東の誤謬は文革で集中的にあらわれたといふべきである。人間の観念的、幻想的累積は不可避に、幻想内部での共同幻想の相対化や共同幻想の拡散をもたらす。自己幻想（文学、芸術）が自立的様相をもってくるのは必然であり、それにどのような政治的意味もあたえられないが、決して修正主義批判で押ることの出来ないものである。中国の文革やソ連のソルジニニチェンへの対応は文化革命というより、彼らの宗教國家的水準を映している。毛沢東の民族解放戦争（植民地解放戦争）論は不断革命として展開されていくのではなく、対外的には民族国家の論理へ、対内的には支配の幻想倫理（民衆

論（国体論）と戦争論であったことを想起せよ。中国のコミニニストが「中国プロレタリア民族論」ということにとらわれていたことを想起してくれてもよい。レーニンや毛沢東にとって民衆を組織することが戦争をくぐらなければ、「具体的にたかたかっている民衆の生活をくぐらなければ、いかなる方向であれ民衆を組織することはできない。」ということをも不可避としたということは明らかである。

レーニン、トロツキ、毛沢東の卓抜さと天才は後進地域の強いられた戦争と危機を国家―社会編成へ転化したことである。彼らにとって不可避であり、必至であったこと、その意味を評価することが出来る。だが彼らが「戦争」、「国家編成」と革命（国家の死滅、階級の廃絶）と短絡させてきたことは別である。いかたが悪ければ何かの「環」が抜けている。このこと（抜けている「環」）は彼らの国家（共同体）に関する理論、思想であるが、又情況の問題として鮮明となる。レーニン、毛沢東が提出した「過渡期」論、新民主主義論、階級闘争の継続論、修正主義批判いづれもこのような「環」の役割をはたせない。彼らの国家（共同体）の思想、理論の致命点は二つのところにある。そのひとつは彼らが上部構造―下部構造論の短絡にとらわれていることで、国家の幻想性、国家の歴史性、世界性をとらえられなかったことで

を国家へ再編する）論理となっていく。強いられた必然としての戦争論理が国家の、国家的支配の幻想論理へ転位していくのは中国の動向なのだ。民衆や大衆が直接的、歴史的、時間的な共同体、国家の編成と闘うという契機を国家、共同体に回路をもとめることでもってしまふ敗北の様相は共同体の他の共同体に対する勝利、敗北をつらぬいてあるのだ。戦争の悲惨さがその残酷さだけでなく、生活的日常をこえた生命充実、現存性にあることを銘記せよ。戦後日本民衆の体験が後者であれば中国やアメリカは前者なのだ。日本、アメリカ、中国の民衆、住民大衆を結びつけていくには何かの「環」がいるのだ。レーニン、トロツキ、毛沢東の「戦争」と「革命」を結びつけていく論理が何かの「環」を抜かしているということは共同幻想の拡散、国家の衰退という国家の世界的、尖端的状況に対応しきれないこととしてあらわれる。支配階級もこの共同幻想の拡散、国家の衰退を自らの壁とせざるをえない。そして彼らは行政国家の強化と共同幻想の拡散を体制へ、脱国家、体制へと部分的であれ転位させることで支配の安定構造をはかる。米中接近、日中復交は中国革命外交の勝利でも、放棄でもない。不可避に強いられた戦争を勝利した後、その戦争を国家論理へ、支配の幻想論理へ（革命という擬制をもって）転位してきた中国支配層が共同幻想の拡散と

いう世界的状況の侵透へ対応しているだけなのだ。

さて、われわれがしばしば何かの「環」が必要だと語ってきたことにふれよう。

われわれが闘ってきたのは戦後日本の中においてである。われわれが闘ってきた条件について次のように書いたことがある。『60年BUNDの持った歴史的意義はその実践的開示によって戦後日本社会の内部に育ち、成熟しつつある新たな階級的矛盾の存在を告知したことであった。日本社会の階級的、普遍的矛盾の性格を非民主制、非近代制と認識了解する考え方を根源からくずせものを告知したことである。

またその逆説的な死によって、左翼反対派も含めて旧コミンテルン社会主義の思想的、理論的破産を示したことであった。この二つの意義はまったく未知で新たなものとしてしか日本の革命と革命運動は不可能であるという感性的契機に普遍性をあたえ、そのための古い呪縛から解放に決定的な役割をはたしたのである』(三上治、日本革命運動の革命的批判のために)。

戦後日本社会の内部に育ち、成熟しつつある新たな矛盾の存在とは何か。それは敗戦を経て国家の位相を自由的国家へ推転せしめた戦後支配層の動向、共同幻想の歴史的、時間的

の政治的秩序や共同性から孤立していた部分のエネルギーを政治過程へ流出せしめたことである。これは「戦後民主主義」と「自由民主主義」の相互変容と秩序の外に、つまり歴史の外でしか歴史の本質と関わらなくなることを余儀なくされてきた人民・大衆のエネルギーを政治過程へ流出せしめるものであった。ベトナム人民の両体制(戦後世界秩序)と激突するたたかいを想像力で結びつけることによって、また行政権力によって封じこめられていた過程を暴力的に突き破ることによって。この闘いは社会過程で戦後社会の中でバラバラに切りはなされながら秩序へ封じ込められていく存在を流出せしめた学園闘争や社会拠点闘争を媒介した。

全体としてみれば政治的にも社会的にも群衆と孤立した個人へ分断されていく情況に、新しい想像力と共同契機の流出をあたえた』(前出)。

われわれのこの闘いで敗北は69年4月闘争に象徴された。ここでの問題はベトナム民衆の闘いが波及させてきた何かと「戦後民主主義」の下で秩序の外に、歴史の外になげ出されていた民衆の反国家、反権力を思想的にも、実践的にもつなげなかったということである。こういう民衆(われわれ)の反国家、反権力を思想的にも、実践的にもどうつかんだらいいのかわからなかったといってもよい。

レベルでの衰退、拡散、民衆の共同幻想へ疎外するものの核(チシヨナリテイ)の拡散の中で、膨化する観念の累積に促され、どのような主体の表出力も構想力ももてないということであった。又社会過程での生産力と生産諸力の累積はいくつかの自由をもたらしながら群衆と孤立した個人に引き裂いていくような状況であった。実際奇妙であった。自由的国家の「全国民的共同性」、「政治的自由」の恣意であるが極度の拡大は強制された自由ともいふべき幻想をもたらした(一切が許されるような)、他面でもどこにも出口のない感性の深化をもたらした。奇妙な明るさといらだちをともなった「宙すり」状態であった。まったく未知で、新たな何事かが始まっているが、どこにも糸口をつかめない「過渡」ということも出来るようなのである。それは戦前の左翼が権力からの集中弾圧と民衆からの孤立に遭遇したように、権力の「環」と民衆の「核」の拡散の中で、闘いを強いられたということもいってよい。この状態は依然と続いている、60年初頭の明るさが、暗さに変っているが。この局面の中でたたかいに転機をもたらしたのは60年代後半のたたかいであった。

『67年羽田闘争はそれまでの階級闘争への旋回点をもたらす画期的なものであった。ベトナム人民の戦後世界体制に血しぶきをあげてたたかう闘いのもつ波動力と結合して戦後日本

『われわれが67年以降のたたかいの過程で感じてきた矛盾はたたかいの一つの極が支配階級の政策(例えば佐藤訪ベトナムから訪米等々というように)に反対し阻止するということになりながら、他の極では権力の存在やもつと別のものを表現しているという矛盾である。それはひとつの戦術が、支配階級の当面の政策阻止の戦術であると同時にもつと別の権力の存在とたたかっているという何かであるという二重性をあらわしていたというように』(前出)。

権力と闘っている何か。周知のようにこれを連合赤軍に象徴されるように日本に於ける「革命戦争」の端緒ととらえる部分があった。われわれはちがっていた。情況のもたらす内部危機であることにはちがいが無いのだが国家の再編にむすびつく共同倫理や規範の流出とちがっていたように思う。レーニンが権力奪取へ結びつけたような革命の現実性はなかったのである。この背後には日本の自然的無為性とプラグマティズムと結合した生活倫理がはりついたように思えてならない。このことの評価こそわれわれがやはり根底で問われていることのように思う。ここ媒介にして、「何か」が必要と思う。もちろん、60年代後半のわれわれ自身の敗北の総括が問われる。ここでの軸は二つだ。そのひとつは国家(共同幻想)の累積過程が拡散をもたらしている情況の中で、それ(国家)

を死滅に追い込む理論的、思想的諸前提の獲得である。他のひとつは実践的諸前提の獲得である。前者は国家編成と国家死滅と混同、短絡させてきたレーニン、トロツキ、毛沢東の思想、理論とちがって、国家死滅の思想、理論の根拠を得ることだ。このとき大衆原像や自己幻想の共同幻想の逆立という究極のテーゼは前提の前提である。そして共同幻想（共同体）歴史的、時間的累積を逆行にくだること、及び生活過程から疎外された共同幻想を逆行にくだることによって国家を押しやることである。このことはわれわれの過渡期世界論の致命的限界、国家（幻想）の世界性を歴史的、時間的なものとして把握できなかった限界の克服へいたるであろう。このことは例えばつぎのような糸口となる。沖繩独立、解放、沖繩人の民族的帰属という旧来の不毛な地域的議論、理論の枠から、歴史的、時間的としての沖繩への本格的接近というように。また毛沢東に象徴される近代中国の国家、民族編成でなく、共同体の歴史的、時間的累積としての中国を検討するように。共同幻想を逆にくだるとは何か。『わたしたちは、敗戦時の大衆の絶望的なイメージのなかに、日本的な「無為」の何であるかをみたまはすである。大衆は怒るかわりに、すべてはおためごかしではないか、という皮肉と支配者拒否の様子をかいまみせた。たとえ戦争権力と反対の、どんなシンボルをも

つてきても、この大衆の不信をゆりうごかすことができないことは明瞭であった。どこかで考え方をかえる必要がある』（吉本隆明、丸山真男論）。ここでいう『考え方をかえる必要がある』ということである。実践的諸前提とは何か。それは60年代後半の闘いの暴力的展開、その性格と戦争（蜂起）とは少くとも現段階では短絡しえないということである。国家権力との戦いが戦争とよばれるとき、この論理はレーニン、毛沢東のように大衆の危機を共同倫理、規範を国家再編へ押しあげていくものとはちがうように思う。国家（政治的共同体）の強いる危機を（政治的共同体）へ転化させられることと拮抗するという論理を必要とする。このことはきわめて経験的、具体的実践の内に内化されていかなければならないことだ。あたかも遠近法のように具体的、切実なことより、遠い世界のことを本質的で、よく知っているように錯誤との不断の闘いである。これは次の様にも語ることが出来る。われわれが国家や社会の現実との闘いを不可避のごとく政治的、社会的共同性の回路でもってなさなければならぬときの対応である。今日、国家と闘うにわれわれも共同体の回路を持つてしなければならぬというとき、不可避のように戦争の論理を内包することを避けることが出来ない。われわれの政治的行為や戦闘、組織も戦争の論理を避けることが出来ない。

その流血や地獄の相、又生命の充実が、日常的にか、非日常的にか、可視的にか、存在する現象のちがいはあるが。この事情は今日の社会的諸運動においても同じである。これを超えていくのは唯一つ、共同体（類）として人間が歴史を累積するしかなかった悲惨（宗教、規範の発生と生成を想起せよ）個体の強いられた死が、中絶（関係の断絶）となっていくとき、歴史（類）として救済していききたいという衝動、その割目を旧来の共同体論と逆向きな、革命しかない。だが革命にはわれわれの意志をこえた必然的な現実の力を不可避とする。このような革命の現実性を△空想▽とも△即時性▽とも紙一重のところである究極の像としてしか想定できないとき、この過渡をどのように闘うか。この過渡は毛沢東、レーニン、トロツキの「戦争」と「革命」の連環に抜けている「環」といったものであろうし、かつて谷川雁が「越境する」という言葉にこめたかったものであろう。それは又架橋と呼んでもよからう。どこへ越境するのか、どのような架橋か。われわれはそれを次のように語ることが出来る。政治的行為、戦闘の時、組織が生活現存へもたらす摩擦、葛藤、比喩的にいえば非日常的戦闘の流血の背後で日常的に個体や生活的現存が負うことをよぎなくされた困難を、日常的戦闘として、もうひとつの組織としてくりこんでいくことを意味する。政治的

行為、戦闘、組織はそれが引ひかき、生活的現存、個体への矛盾を直接的意味で救済することも、解決することも出来ない。それらはより多くを個体に背負す。それをくりこむしかないのだ。この事情は社会的運動や諸関係でも同じである。ここでは現存の社会的運動や諸関係が現存社会的共同性や諸関係の死滅を不可避としながら、それが現実の社会的諸関係において救済することも、解決することも出来ず、時間へ観念へ、思想へ疎外し、持続するしかないように。架橋、越境を「政治的共同性」や「人民公社風の共同体」の絶対化でなく、相対化への道が重要なのだ。例えば観念の内部で、共同幻想と自己幻想を包括する思想が、生活を経た経験が重要であるというように。

例えば政治的共同性から脱走や二段階的敗北の前で、共同体間の葛藤のうちに憎悪や絶望に似た怒りがよぎるのをかき消すことは出来ない。けれども脱走や二段階敗北が（結果としてどんな打撃をもたらしても）自己の、われわれの負う課題なのだという心もまたよぎるのではないか。それらの経験のいかんが内化することが問われているのではないか。

例えば、戦争責任論を民族責任論としてでなく、人間が累積してきた共同体と、それを不可避としてきた民衆の生活的現存の問題として追及するとき、われわれが現実として展開

している共同体の問題と結びつけることが出来るというように。又われわれが「連合赤軍派」の展開から可視的な銃撃戦でなく、彼らが生活的現存との間で、共同性と個性の間で不可視のように演じたものを自己の共同性の問題の検討へとするように。これらは規律に示されている諸関係のうちに、われわれの規律の特異性をみてくれば了解のつくことと思う。(神津論文参照してほしい)。

〈完〉

若干のコメント

(1) 綱領論、関係論、戦略論等々については神津論文を参照のこと。

(2) 社会編成―階級論についてはほとんどふれることが出来なかつた。マルクスの資本論や彼が経済学批判序説の六プランで構想したものと、家族として累積されてきた社会的関係を地域性―階級というものを社会編成論として原理的、情况的に展開したい。そこで危機論等が新しい視角から押えることを要求されているとは幾度も強調してきたことである。マルクスが六プランの中で想定した国家、レーニンが帝国主義論を国家論(戦争論)として書いたというときの国家と共同幻想としての国家の位相の差と連環も発見出来ると思う。神津論文でな

されている政治構造、社会構造の二重性論は本稿の不十分性を補っていると思う。日本の現実の中では階級問題が世界的尖端の課題として部分的、偏在的である。だが、現実性、社会的共同体のほうがいかなる政治的共同体より広くて、豊であることは、又真実である。だから社会的な階級、階層の社会編成の強い矛盾との闘争を原則的に支持する。社会編成論―階級論についてはいずれ別稿で展開の予定。

(3) 厳冬を迎える獄中の同志へこころをこめてあいさつをおくる。

組織建設の総括と展望

共産主義者同盟組織委員会

第一章 同盟の歩みと組織的諸問題

第一節 組織問題への実践的視座

衆知の様にわれわれは69年秋以降の階級闘争の転質過程に政治党派として関の声をあげた。

われわれが、69年以降の階級情況(階級闘争の後退―敗退局面就中、革命主体の危機)の中でまず政治組織の形成に着手した根底には次の様な認識があった。

「69年以降、決定的な刻印をもってあらわれてきた階級闘争の転質が主体の危機となつてあらわれてくるのは主に以下の三点にあるとまず押えてきた。

①日本、世界の中に本格的に自立し、持続する思想、革命

経験がないこと。いいかえれば本格的党派も大衆も不在ということであり、自然必然的な階級条件から、意識的、自覚的な階級条件の形成へ異様な困難を強いられているということである。

②階級闘争の転質が世界史の現段階やその歴史認識だけでなく、人間の自然・歴史・世界との関り、共同性の転変とそこから発現する階級発現・階級成熟様式の転質として把握されることを要求されること。世界史の現段階や階級や階級発現・成熟様式の様式の把握には生き生きとした感性ばかりでなく、人間の存在(実存)の時間・空間・外的・内的構造への原理的考察が要請されること。

③本格的な思想も、関係も知らず、「存在」が階級へ到ることへの悪戦を知らぬ連中にわれわれがとりかこまれている

ということである」(「叛旗」紙16号)

われわれはこの様な与件と、極めて負的な階級闘争の歴史基盤の中で情況の本質的課題にどの様に接近してゆくのかということに、政治組織の形成で実践的に回答せんとしてきた。まずわれわれが組織形成をなさんとした時に、右の様な認識は、従来の運動―組織構造の転換、転質を原理的にも、現実的にもなさねばならないということであった。

日本階級闘争の極めて負的な歴史基盤に規定された運動―組織の原理的、現実的転換を実践することこそが、所謂69年以降の闘いの後退局面において最も必然的な環であるということであった。

われわれは運動―組織の原理的な把握として次の様に展開してきた。

①従来の運動―組織の発現様式としてあった「党―大衆」関係を「存在」としての階級の発現―成熟様式から押え、国家を超え、止揚する階級の発現構造を共同体論を基本的視座としつつ「党―軍―統一戦線」の構造的創出として位置づけること。

②「党―大衆」関係の止揚を、政治過程、社会過程の原理的分析を通して、政治的共同性と社会的共同性の関係、個(政治的)と政治的共同性の質と関係を「前衛―大衆」論の批

判―止揚と、「知識人―大衆」論の深化として展開すること。

③階級の構造的創出を目指すものとして、綱領―戦略との絡み、及び諸階級―諸階層を組織するものとしての地区党の位相と中央―地区を貫く政治組織の構造の確定をすることである。

以上の諸点は、共産党内論争、分派―党派闘争の基軸としてあった、「綱領・戦略」、「軍事」論争に規定され、「綱領」や「軍事」への踏み込み、ならびに実践が、新たな意識力―自然力の質の獲得と、運動―組織の原理を存在としてのそれへと転立せねばならないというわれわれの主張も含めて、この間多くを語り、もつとも中心的に展開、提出してきたものである。

しかし、この様な原理的把握以上に困難なのは、組織の具体性そのものが必然的にかかえこむ困難性を、如何に克服、発展させてゆくのかということである。

即ち、このことは、組織建設における具体性が、第一に、階級の発現段階―成熟に歴史的に規定されること、第二に、組織を構成する主体の成熟、及び構成する領域の広さ深さに規定されること、第三に、既存の政治集団に、及び第四に、対権力関係に規定されているということである。また逆に、この様な現実的な契機を介在することがなければ、組織そのものは何ら

強化もされなければ、階級闘争の課題に積極的に回答・実践することもできなければ、風化をよきなくされるか、博物館、いやゴミ箱に捨てられるだけであるということである。階級闘争が必然である様に、組織は階級闘争の具体的契機を鈍欲に吸収することで不断に解体―再編、強化されなければならぬのである。

ここで、われわれは、同盟のこの二年有余の過程を簡単に振り返って見よう。同盟の組織建設に於ける画期は次の様に四期に分けて考察することができる。

①三多摩地区委と中大、青学大を中心とする戦闘団、遊撃隊形成。

②「叛旗編集委員会」と各地区反帝戦線形成、及び首都圏反帝戦線形成。

③共青同建設

④地区再編と全国反帝戦線連合の形成。

①の段階は、68年～69年秋から70年初頭に至る共産党内分派―党派闘争に於ける組織構造であり、②の段階は、共産党内分派―党派闘争に於ける諸論争を契機に、党派闘争の波及度に規定されて、首都圏に於ける拠点、地区、大衆戦線シンパ等の獲得時期と重なり、また71年前半に於ける八沖繩―三里塚―闘争の「政治過程」と一致している。③の段階は、八沖

繩―三里塚―砂川―闘争の実践的展開に於いて、対権力闘争に於ける非公然活動の準備、実践的要請を組織的に獲得せんとした71年後半である。④の段階は、権力によるわれわれへの三里塚闘争、沖繩闘争、砂川闘争への実践的闘いに対する組織破防法的弾圧に抗して、政治指導の広さ、深さ、ち密さ、非公然性の獲得を軸に組織再編―強化及び、階級闘争の「存在」―攻防をめぐる高次化に対するの拠点構築、主体の強化を通して対権力攻防を対峙戦、持久戦へと組織して来た時期である。

この様な経緯を踏えて見るとき組織の形成過程の推移が、ますます苛烈な現実的矛盾をかかえ込む形で展開されてきたことが理解されるであろう。しかし、この段階的区分もそれぞれに於ける組織問題の主要矛盾を全て止揚したものとしての展開をなしてきたということではない。「党―大衆」組織の止揚は、他方で「党―大衆」運動の止揚を思想的にも実践的にもはたすことで獲ち取ってゆかねばならず、党派闘争に於ける実りのある水準、即ち、「綱領・戦略」論争、「軍事」に関する論争を組織することで旧来の政治過程、社会過程に於ける諸実践を豊富化させなければならず、対権力闘争の内実を飛躍せしめねばならない。就中、権力との「存在」―攻防に勝利する主体のあり方と、政治的共同性の内実を高めなけ

ればならないのである。

第二節 組織論的総括への前提

「階級形成」としての△党―軍―統一戦線▽
60年代階級闘争の総過程を綱領―戦略論の内在的展開とし、70年代を目指し革命論・階級形成・党形成・軍形成・組織形成総体を問う形で提起された第二次ブンド9回大会は、「過渡期世界論―世界プロ独論」の確定をわれわれの圧倒的な論争展開（三上治「9大回議案書」）によって確定する一方で、赤軍派との党派闘争を媒介に矛盾の極地に至った関西派・中間諸派の党形成・軍形成・組織形成をめぐる非和解的対峙を現出せしめた。

10・21闘争の敗北、11月戦闘団形成を経て顕在化した「党の革命」をめぐる諸論争は、階級の存在様式を措定する「党―軍―統一戦線」論を党形成、階級形成論の俎上にあげ、この地点で逃亡し陰謀政治を選択した情況派や、途中で「革マル」主義へ転落した理戦派は問題外として、6回中央委員会議案書をめぐる綱領―戦略論争として組織論の原理的展開を階級形成の視座から党形成・軍形成としてなしてきた。

われわれの手には、かかる69年70年初頭において展開された組織形成の原理的展開としての理論誌「叛旗」四号があ

る。そしてここでの諸論拠は、共産党内における白熱の諸論争を経た果実としてある。またわれわれは、かかるイメージを措定する中で、現実の組織建設に着手してきた。われわれの任務は、このような諸論拠の内に、7071年の激動の実践が古くした部分を抽出することであり、逆に諸実践を古くさせる様な原理イメージを問うことに外ならない。

「70年代は革マル派の時代である」などとうそぶいて失笑をかけた輩達がいる。実践を理論の整合性で裁断するという、その意味では徹頭尾ニッポン的な小インテリ集団である彼等はまた組織的にはゴリゴリの保守主義である。既成左翼・革マルは別としても、60年代新左翼の組織典型たる「党―活動家集団―大衆」構造を、階級の存在様式として、「党―軍―統一戦線」へと構造的に転位・転質せしめねばならない。このことが文字通り「70年代への」課題である。

階級の存在様式としての「党―軍―統一戦線」は、68年以降の苦闘の内で、歴史的には二つの契機を通して解明されてきた。一つは最後の階級としての「プロレタリアート」の措定を「階級の死滅―階級の止揚」としての人類史のパースペースタイプに「社会的階級」の創出―止揚で解答してきたことであり、他方は68年防衛庁、69年4・28沖繩闘争と10・11月闘争における自衛武装からの飛躍、軍事・武装の評価―「党

の革命」の解答としてである。

前者は、「三池―砂川―三里塚」闘争を歴史的与件として、67年10・8羽田闘争以降の階級闘争の諸過程を介在させて表象された。60年代の階級形成に於ける神話であった「党―大衆」論の破綻は、実は、もともとかかる組織原理に忠実であった三派全学連の指導する運動の足下で起ったのである。

「党―大衆」をめぐる共産同―革共同論争の終止符は、実は、10・8羽田闘争で先鞭をつけられた階級闘争の暴力的高揚に外ならなかった。

われわれが、10・8羽田、10・21防衛庁闘争の総括の中に垣間見たのは、羽田―防衛庁へと受け継がれてゆく「政治焦点」での闘いと、砂川―成田―佐世保―王子―新宿、中大―日大―東大―全国学園へと様々な領域で形成された「拠点」での闘いの相互関係、就中、その絡みの全体像の折出としてであった。

これらの新たな質の展開―社会的拠点闘争の高揚と、団結の暴力的結合への転位に無知な部分は、かかる従来の組織構造の限界を「拠点」の闘いを「政治焦点」に従属させて、一般的にレーニン主義党建設を念仏として唱えたにすぎないか、「政治焦点」での闘いを切捨て、「拠点」のみを増幅させて「大衆叛乱」に迎合するか、利用せんとしたにすぎない。

60年以降の新左翼総体に類型化された組織構造は、一方で「労働者本隊」論―同盟論規定へ、他方で「学生先駆性」論の二傾向の色合いを有していたが、既成左翼の合法主義・平和主義・議会主義への対質として「党―活動家集団」へと形成させた。共産同―社会学同―党派全学連に類型化される組織構造が、社会拠点での闘いの高揚、暴力的団結―表現を介在させ、運動の質的展開―国家―市民社会の世界史的成熟の中で解体させられてゆく与件の基底に新たな組織の構造をわれわれに迫ったのである。

われわれは、解答は「社会的拠点闘争」の評価の内にこそあるのだと洞察した。つまり、
①大衆組織―活動家集団―党という党形成―意識形成を前提とする自然発生的闘争―経済闘争、目的意識的闘争―政治闘争という二元論に対して、社会闘争の質的位相、爆発的エナジーの所在等の指摘とその原理的解明を、「組織論とは、国家批判である」ことの諒解の下で、階級形成論を社会革命に及ぶ射程で解き放つ矢の位置こそが「党形成」であること
を指摘してきた。

②政治焦点での闘いと社会拠点闘争の結合を、党形成―組織形成の絡みの中で、「党」におけるその構造―機能的側面でのプロパーの任務を中央機関―地区党の原理的展開として、

「党」における綱領・戦略、非合法の準備、社会力（地域・職域・家族域）の全的駆動に向けた地区党建設の課題として実践的に組織建設に着手するということであった。

後者は、全共闘運動に体现化された、革命主体の自衛武装の二重の敗北―行政的暴力による圧殺と主体の側に於ける持続の根柢を階級成熟―階級形成の前段で敗退したこと―に対する「革命的暴力」の組織化をめぐる「軍事」、「武装」の評価としてあった。

赤軍派との「軍事」をめぐる論争は、「党なき軍」を空念仏の様に唱え、動揺するしかなかった中間諸派（戦旗野合派と読め）とは異って、唯一物理的対峙をも原則的に展開するなかで、われわれは、彼等の「高次の自然発生性―能動プロ―武装烽起―臨時革命政府」の幻のプランを、「軍事」の觀念化、ロマン主義への敗北としてしりぞけ、「軍事は政治の延長である」という実体論的軍事の把握に対して、「軍事」「武装」は生身の人間の存在過程にこそもっとも近く、それ故に「表現としての武装」と「存在としての武装」の二重性を原理的にも確認せねばならぬとした。「軍事」の本質が「関係」の側にあり、「存在」にあるとはその様な存在様式を、階級形成論のパースペクティブの内に位置づけなければならぬとしたのである。

提起したのではない。従来の「党」の自然成長性や、組織の自然総体の絡みの内に視座を有し、政治過程から、少なくとも、人類史に於ける組織や党の過渡性を踏えてのことなのだ。（「量より質」を提起したレーニンの絶望こそ推してはかるべきである）党の諸機能と党の構造（階級形成との絡みの関連を無視した上での、党の機能の強調と「党自体」への固定化―新たな支配様式―国家レベルへのスライドとしてワイ少化したのである。今日のカッコづきの労働者国家の「国家」としてのらん熟の逆接の意味を忘れてはならない。

(2)「軍事」の実体論的把握はクラウゼヴィツの「戦争論」で大系化された。彼はナポレオン戦争―ヨーロッパ解放戦争の現実把握を国民皆兵制を軸とする近代戦に於ける国家間交通―の最高の疎外形態―戦争形態として上向し、抽象化した。戦争の本質規定を「攻防の弁証法」とし、近代国家の形成期に於ける新たな国家―市民社会の成熟に見合った「軍事」、「武装」の位相を洞察した点では、その意味で、クラウゼヴィツはコミンテルン左翼よりは唯物論者であった。しかし実体的には国家―市民社会の構造把握の内であった「戦争論」は生産力理論と密通したブルジョア軍学へ政治過程との接ぎ木を通じた党形成―軍形成―武装、軍事の觀念化を生んだ。かかる、生産力理論を介在させた軍事・武装の觀念化―上げ底化は、核戦略を

「党」の何たるかを、「軍」のそして「統一戦線」の何たるかを問うことのない手合が、心はそこにもいかかわらず、言辞の革命性で余命を計る時代は終わつたというわれわれの予見は、現実の階級闘争の坩堝での闘い振りですでに証明済みである。

われわれは、党形成、軍形成、そして統一戦線の形成が、実は階級成熟に規定され、階級形成―止場のパースペクティブにおける絡みの中で構造的にしか形成されないことを洞察することを通して、革命論、軍事論、統一戦線論の検討を行なってきた。

(1)「何をなすべきか」によって展開されたレーニンの党形成は、政治革命を展望する側の政治的階級形成把握に於いては、その位置づけは普遍的である。しかし、国家論がそうであった様に、レーニンは現実（ロシアの革命運動―「労働者大衆の巨大な自然発生的高揚と指導の決定的立ち遅れ」）が要求する諸課題に「ロシアインテリ―大衆」関係に実践的な革命集団の固有な位相を措定したが、ついには階級の止揚、国家の止揚、党の止揚を欠落させた。

レーニンのエピゴネン―ロシアマルクス主義者は、かかるレーニンの限定性を理解することなく（レーニンが民主主義以上の完全な同志的信頼をメンシェヴィキ批判として語ったのは、決して「党」形成に於ける政治的階級の倫理一般とし

頂点とする、過渡期世界の閉塞的円環秩序を形創っていることに瞠目しなければならない。

しかし、武装・軍事の本質論的開示は、実はクラウゼヴィツ自らが書き記した大衆武装―自衛武装においてその萌芽を示していたのである。軍事・武装の本質論的開示を存在過程から解き放つ視点こそが重要なのである。

軍形成の自然過程からの関係把握を自覚的にしろ、無自覚的にしろ組織的に歴史の実証を与えたのは中国に於ける抗日戦線―人民解放軍であり、日本帝国主義軍隊等である。

所謂、戦争の国家間交通としての実体分析を「攻防の弁証法」に統一したのとは異って、関係的諸契機が形創る武装―軍事の質点転変を実践的に克服するという意味では鋭い洞察も、「革命的暴力」の復権―暴力の止揚を「国家―市民社会」の止揚、階級形成―階級の止揚のバースペクティブで理解することができなかった。その意味で中共が国家―市民社会の世界的成熟の中で、即自的な自然過程を民族的国家的契機に吸引せんとしてきた軍形成を、現代過渡期世界の閉塞的秩序の内で生産力理論にすくわれてゆく諸過程は注目する必要がある。

われわれが軍事・武装の本質的開示―存在としての武装の組織化を提示し、実践せんとする根柢には、ベトナム解放闘

争を中軸とする後進国解放闘争における武装・軍形成の豊富な実践が、全共闘運動、三里塚諸闘争の経験がさし示めす社会過程からの自衛武装→本格的な大衆武装の経験に外ならない。

書かれたものより、存在としての武装へ、関係的把握の転質が、新しい武装の地平を開削する根を撃つこと、つまり階形成との絡みの中で主体相互の諸交通の本格的開示を通して、「攻防の弁証法」を唯物論的に転倒せねばならないのである。

(3)従来統一戦線論は、コミンテルン型の「同盟」規定論か、トロツキー型の「政治ヘゲモニー」論であった。前者は、レーニンの「労農同盟」の無理解から「社会ファシズム」論へ、一国主義→二段階戦略を基底とする市民路線に至る徹頭徹尾の操作主義→プラグマティズムであり、後者は、かかるコミンテルン統一戦線を批判しつつも、正しい戦略・戦術にはかならず大衆が結集するとの啓蒙主義→オプティミズムを生んだ。

日本においては、前者は既成左翼が、後者が60年代新左翼の党派間統一戦線→第二次ブンドの政治ヘゲモニー論に顕著であった。

レーニンの「労農同盟」がロシアの階級攻防の権力奪取に至る高揚期において、帝政打倒→権力奪収の権力闘争にお

ける階級形成に至る意識過程の、「軍」は行為過程の、「統一戦線」→「ソヴィエト」は非幻想部分を含む社会→生活過程の共同体的側面での表現であり、個体をよぎる時・空が、関係的諸契機を介在させて、共同性を獲得せんとする質に規定され、構造的に現われる。

②主体の意識、行為、生活過程総体の「共同的側面→契機」を突きとめ、開花させるとは、それ故に、階級成熟の諸規定を、「綱領」、「規律」、「生活倫理」の創出、媒介として構造的に発現させることを意味し、党や軍や統一戦線を個別的に、分断化した形で従来の技術対応主義→党の、軍の統一戦線の自然成長性に拜跪せんとするに對して、階級形成→止揚のペースペクティブの下に構造的創出を計るということである。

③階級の形成の戦略的位置としての「党→軍→統一戦線」は階級の存在様式として、構造的に現れる→形成されるが故に革命戦略の構成条件たる「如何なる革命を行なうのか」、「如何なる過程、運動をたどつてか」、「いかなる組織・階級の表現に支えられてか」の立体的構成としての過渡期世界論・運動論・組織論の絡みの中で把握されねばならず、当面「世界プロ独」に至る諸過程では、戦略的には「政治的階級」の側に力点を置きつつ「党→軍→統一戦線」は発現するとい

る政治過程の激動局面の同盟規定を、コミンテルン左翼は、労働者をプロレタリア物神化し、本隊論化することによってプラグマティックな統一戦線論に墮した。

本格的な統一戦線の開始がソヴィエトを母胎とする諸階級・諸階層間統一戦線であり、世界プロ独から社会主義の窓口に至る社会的階級形成の完遂の内にその任を終えろという視座からは、当面する政治革命へ至る革命党派相互の統一戦線のもつ位相と、その過渡性を理解されねばならない。

その意味で統一戦線とは本質的に二重性を了解せねばならず統一戦線の最高形態たるソヴィエトにおいて、党派間統一戦線は等質な組織構造(階級の成熟)へ向かう共同闘争の保障の上に立つてのみ、その空間性の獲得を階層間統一戦線として形成し保持しうるのである。

かくして、われわれにとってはまず「党」から、「軍」から、「統一戦線」からといういかなる論拠も誤りであることを確認するに至った。党、軍、統一戦線が意識・行為・生活過程総体を覆う形での歴史を輪切りにした階級形成の質→階級成熟の質を明示する以上、党、軍、統一戦線は「階級発現様式」として措定され、党→軍→統一戦線として構造化されるのである。

①「党→軍→統一戦線」の構造的創出とは、「党」は社会

うことを確認せねばならない。

ならば、主体構造が世界プロ独であれば社会主義→向う階級の存在様式は「党→軍→ソヴィエト」であり、社会主義から共産主義→向う構造では社会的階級の成熟(階級の止揚)であることが確認されるのである。

第三節 組織問題に於ける

われわれの立脚点とその現段階

さてわれわれは、「党→大衆」運動の現在の止揚の水準を「八派→反戦→全共闘」の解体以降の「党→大衆」関係の分析と、八沖繩→三里塚→砂川→闘争への実践的展開によって、必然的にわれわれが到達した地平での組織問題に言及しよう。八派→全国反戦・全共闘の昨年六月に於ける分裂に對して、われわれは次の様な視点を提起した。

①八派→全国反戦→全共闘の分裂解体は、その構成部分が69年への過程が迫った階級闘争の転質を把み得ぬ故である。

②「沖繩」を当面の環とする諸左翼の戦略→政治路線が、世界史の現段階そのものの歴史認識→世界認識と、それを戦略化する視座を問うていることへの無知からくる無内容→無力性。党派闘争がほとんど意味をなさぬと同様、党派の主張の駄目さとしてあることはこれを証明してあまりある。

③今日の階級闘争の転質が旧来の「党一大衆」構造の止揚を要請していることへの無理解からくる混乱。党派の側からは「大衆的組織」の大義名分化という政治利用主義の横行。大衆的組織の側からは反撥やそれへの批判を心情的に形成しながらも訣別も改組も出来ぬ状況。要するに「党派」も「大衆」も自立し得ない点である。自立するためには「党一大衆」組織の歴史的根拠と限界への正確な認識と止揚の方途が問われるのである。「党派」も「大衆」も自己の歴史と闘うことなく、軽蔑と迎合の上に円環構造を創っているのである。

④旧来の大衆武装やカンパニア路線の限界を超える道を、彼らは知らないのである。」

これらの指摘は、運動の根源性を戦術の急進性で表象し、組織の根源性をイデオロギーの急進性で表現せんとしてきた60年代の「政治過程論」―「大衆運動」構造を意識―行為―生活過程、総じて存在と思想の総体から運動―組織の構造を転換せんとしていたわれわれには自明の視点であり、今日なお、正当な指摘である。

例えば、八派―全国反戦・全共闘の解体局面以降の中核派と解放派を両極とする党派闘争は、今日では対立基軸もますます不鮮明なまま自然消滅せんとしている。このことは、次のことを意味していると考える。

体現せんとするが、「党一大衆」関係の転質を促す、「政治」「社会」の新たな構造的な質の受容をあらかじめ拒絶する地平に自らを置いているが故に、権力との「存在」攻防に対して、当初よりその敗北は予定されているのである。

あらゆる先験的な革命理論が理論として完結する根拠が、戦後27年の日本の政治、経済社会構成に於いては解体していると共に、政治―社会過程が必然的に強いる情況の本質的課題に、原理的にも現実的にも主体の内部に構造化することを拒絶した姿勢も無力であるという事態が加速的に進展しているということである。

昨年6月の分解―解体以降の八派の政治主張が、ブルジョアジーの政治過程の進度と共にその内容を変遷してゆくという悲喜劇は、彼らのこの間の機関紙等の基調を一読するだけで理解される。

彼等は、一体全国反戦、全共闘運動の敗北的総括を如何になすというのであろうか。否、総括することも、止揚することも出来ないのである。何故ならば、69年以降の階級闘争の転質過程に於ける「世界」、「国家」、「民族」、「階級」等の転質、転換を、自然―世界―歴史―意識―行為―生活の総体を対象化することの内に見出すことに敗北した彼等（即ち共産党内分派―党派闘争の根拠を共有することなく情

まず第一に「沖繩」を環―焦点とする諸派の戦略―政治路線が一切の有効性を現実過程にもたらさないことによる党派闘争の水準の低下、ボルテージ低下故の階級戦線への派及の狭さとして現出していること。第二に旧来の大衆武装闘争やカンパニア路線そのものが政治過程、社会過程に於いて現実の力になり得ず、「政治」、「社会」の枠を自らせざるこことによって、運動―組織をプラグマチズムや、倫理主義、ロマン主義のレヴェルに落とし込み、戦略主義と現場（経験）主義の円環構造で自閉しているからである。そして第三に、「政治」、「社会」そのものの枠を拡げる意味に於いても、第九の党派志向のノンセクト・セクト部分も、その他のサークル、文化運動に回帰した全共闘くずれも共に、現実との接点過程に於いて何らの有効性をも提示出来ないでいるということである。

即ち、「八派」の強要する政治過程への取り組みに対しては組織保守主義か、個の自由な連合としての「政治」の恣意性を強調するか、「社会過程」での運動、組織による代位、代行を通しての擬制的対応をせざるを得ない局面として現出しているということである。

この様な擬制的な政治集団、社会集団は、政治過程のリアリティの喪失過程を、「革命」論一般や、「軍事」論一般に勢の流れに自然発生的に押し流されてきた彼等）には、今日の事態は理解されないからである。今夏、あわてて私設全学連の開催を競いあつた彼らこそ、「党一大衆」構造の解体局面に於ける彼等の想像力、自然力、意識力の欠如の証左なのだ。

さて、われわれはどうであろうか。運動―組織を存在として、そのれへ転位させるものとして、われわれは、「党一大衆」関係の止揚を次の様な方途へと措定した。

まず第一に現存の支配階級―支配層の、外的―内的再編成、政治的―社会的再編成、他の異種共同体間、小共同間交通再編の焦点であり、「環」としてある「沖繩―三里塚―砂川」を闘うということである。この再編過程に対する闘いを日本国家―民衆、世界の総体を撃つ領域への越境として展開すると共に、「党―軍―統一戦線」の構造的創出を目指した「綱領」―「関係のかくめい」の諸契機を現実的な闘いの中で獲得し、組織せんとしたことである。

第二に、あたら限り、党派闘争を「綱領―戦略」論争、「軍事」をめぐる論争へと越境させ、階級闘争の転質を、共通な歴史的負荷として克服する生産的なものとして推進せんとしたことである。

そして第三に、以上の二点を実践的に克服し、展開し、発

展させるものとして共産同、共青同、反帝戦線の組織形成を計り「政治」、「社会」の枠の広さ、深さを獲得し、且つ政治組織としての自立を目指すということであった。

以上の諸点を踏えつつもわれわれは、次の様な視座を確認していた。つまり、社会的―世界的プロレタリアートの発現様式としての「党―軍―統一戦線」の構造的創出という位相では、社会的プロレタリアートも、党―軍―統一戦線も表象された意識、また観念としてあり、何ら完結的なものではなく、これ事態を普遍性として固定化してはならないということである。この様な原理的なもの、普遍性へ向うものは、歴史的なもの、具体的なものとの差し換えをなすことによって、その様な緊張度のプロセスを経ぬことには、真制なものへと越えることが出来ないということであった。

また逆に具体的なもの、自然的なもの、歴史的現存性をそのまま価値として固定化し、物神化してはならないということである。現実的なものは、観念的な力によって逆に差し換えることによって、真制なものに至るということである。われわれは組織形成に於いても、「現実的、具体的過程から過渡的に展開される道程と、普遍性からの二重の道程を生かさねばならない」のである。

さて論稿を進めよう。先にわれわれは、三点に渡ってわれ

われの組織実践の方向性を提示した。この様な実践的な闘いの中で次の様な主要な課題に真面していること。

①階級を創出するということ、即ち「党―軍―統一戦線」の構造的創出というわれわれの営為が、現実の政治過程、社会過程の闘いの中で、どの様な創造性として歴史的に現出しているのか。

②政治的共同性の今日的水準が社会的共同性との関係、個体的契機と共同的契機との二重の側面での様な創造性としてわれわれに飛躍や意識性を強いているのか。

具体的には共産同、共青同、反帝戦線に於いてはどうか。
③政治組織に於ける中央―地区体制問題を、運動戦略と組織形成との絡みで再把握をし、今日の権力の組織破防法的弾圧の局面―「存在」攻防の局面を、いかに闘い抜くのか、獄中闘争、公然―非公然問題への解答をいかになすのか。

以上の三点は、それぞれ、独立した論稿として以下に取りあげてみよう。

第二章 「党―大衆論」の止揚と政治組織の自立

第一節 共青―反帝戦線の組織的位相への視座

政治組織を形成する上で、われわれが問題にせねばならな

い第一の課題は、政治的共同性の今日的水準が、社会的共同性との関係、個体的契機と共同的契機との二重の側面での様な創造性としてあらわれてくるのか、ということであった。かかる視点から、共産同、共青同・反帝戦線はどう把握されるのかに触れてゆきたい。

まず、われわれは、「党―大衆」関係の止揚を目指す時、原理的には「前衛―大衆」論の誤謬を階級形成との絡みで考察してきた。この時、われわれにとってかかる「前衛―大衆」論の批判の武器を、「知識人―大衆」論を足がかりとすることで提起してきた。

この時間問題になったのは、吉本にとって思想的自立の主体であった知識人―大衆関係を、われわれは、政治的共同性における実践的主体としては、どの様に「知識人―大衆」関係を把握するのかということであった。個体が政治過程を媒介に政治的集団を形創るのも、社会過程を通して社会的集団を形創るのも共に自然過程である。ならば、政治集団―組織にとって政治的共同性は如何なる刻印を受けるのか、目的意識とは何なのか。つまり集団論としての政治的共同性内外の質（交通関係）を問うたということである。「関係」の指定とその困難性を問うたのである。

われわれが政治集団、社会集団の関係を問うたのもその

一例である。しかし、この時、党―政治集団、大衆―社会集団という神話もあらかじめ拒絶していることを忘れてはならない。この様な錯誤が生じるのは、意識が自然過程としても意識の自己増殖をはたすということに価値を付与するということから生じるからである。

「前衛―大衆」論は、それ故に党による大衆の啓蒙か、その裏返しとしてのべつ視か、または指導―被指導の系列化をもたらすしかなかった。

「知識人―大衆」論の有効性は自然過程としてではなく、意識過程としての思想的主体のあり方を、その様な自立の方途をさし示したということである。しかし、この「前衛―大衆」論批判としての「知識人―大衆」論の提出は思想的主体としての個的な契機を明らかにしえたが共同的契機―関係の動態的な把握を欠落させてきた。衆知の様に、われわれはそれをまず政治集団における思想と関係の矛盾として指摘してきた。

例えば、どの様に逆接的に聞えようとも、政治思想は、普遍性を指し示めすその方途を外的時間―空間（世界―歴史）を内的時間に取りくんた形でしか成立しえない。一方、普遍的なものへ到らんとする政治思想を媒介に成立する政治集団は、内的空間を連撃づけるものとして成立しているということである。換言すれば、政治的共同性の中での個体と個体の

具体的關係は決して同質性でも等価性でもあり得ない(例えば男女、年令差、出身階層、感性力の差、経験の保有度等)にもかかわらず、政治思想は普遍的なもの、普遍性としてたちあらわれるということである。政治的共同性もかりである。この様な矛盾や対峙に対して、われわれは、「意味の了解」、「關係の構造化」という道程を指し示してきた。つまりは、時間―空間の差し換えが、政治思想が目指す普遍性の契機を了解すること、關係の位相を、時間性として取り出すということである。意識的自然史、「生・実存」の等価性へ至ることである。

さらに、「知識人―大衆」關係の集團論としての再把握は、個と共同性の關係把握が、個(思想的主体)の自立ということと、全体性を獲得するということの矛盾を現出させてきた。

人が実存し得る自然過程は、意識過程としても生活過程としても在り、人々は、どちらかだけで生きているのではない。だが、人間が現存の共同性や構造(国家―市民社会)を越えんとするときは、生活過程―社会過程、また意識過程―政治過程―での共同的契機を取り出さねばならない。つまりその様に自立をせねばならないし、かかる共同性を全体として構造化しなければならぬということである。言い換えれば政治思想が、政治的共同性を場としながらも、社会的共同性を了解する。つまり、社会過程での共同的契機を取り込まない

的象徴であるということである。われわれが暫闘委行動隊に固執せんとしたのは、このような自立や構造的創出を過渡的に連環するものとして考えているからである。そうであるが故に、行動隊は、一方民衆の負的な基盤、敗北史に対峙―拮抗するという意味において、他方過渡的主体として意識的に砂川―立川闘争に取込むという意味において、より政治的共同性としての刻印を受けるのである。

また今日の立川―砂川闘争は、そのような方向からの開削で突き進まなければならないし、民衆を把握せねばならないのである。

さて、われわれは、以上の諸点を踏えて、共青同・反帝戦線の組織建設の現状を把握してみよう。

政治集団における本質的課題に対する位置からは共産同も共青同も反帝戦線も、自立と階級の構造的創出という連環は必然のように背負うのであって、組織そのものに優劣や価値の系列があるのではない。このことをまず踏えておくとしよう。

革命党派にとって、最もも要求されている「組織性」の内実とは何なのか?、そして、具体的には、共青―反帝戦線の組織建設にとってはどのようなかという風に論及してみよう。われわれは、この問に対して歴史的な革命運動の実践的な

れば、個と政治的共同性の橋たりに得ないということである。このような自立と全体への馳せ渡りの矛盾は、また国家―市民社会の内的・外的再編過程における政治や大衆の有様に規定されている。

例えば、砂川はどうであろうか。砂川―立川をめぐる政治過程は、従来のカンパニア闘争、大衆武装路線の無力性として現われている。

他方、我々は、かつての砂川闘争の主体であった栄光の砂川基地拡張阻止反対同盟幹部の青木良一氏と対峙的關係にある。この対峙や対立は個人的なものでもなければ、土地所有をめぐる経済的なものでもない。この対峙はわれわれと青木氏を象徴する砂川や立川や三多摩の大衆、民衆との対峙、拮抗である。つまりは立川基地撤去の闘いに至る前段で主体的に敗北している民衆の負的な歴史基盤に対峙―拮抗しているということである。

われわれが、砂川や立川闘争において現在の民衆の負的な共同的契機に対峙―拮抗することを経なければ現存の構造化を打ち破るわれわれの自立も、それに向けた政治過程、社会過程の構造化もできないということである。だから、塹壕や鉄塔は基地封鎖の武器一般ではなく、われわれの自立や、全体への馳せ渡り―「階級の構造的」創出に向けた過渡

総括のもとに、「組織性」の内実とは「自立性」の具体的獲得にある」という解答をなすことができる。では、かかる「自立性」「自立」とは何なのか。凡百の自立主義者のそのことなのか。あるいは、一般的に、通俗的に「擬制の終焉」以降流布した、小インテリや、生活主義者の自己合理化の道具としてのあの「自立」(?)のことなのであろうか。

いや、断じて否である。われわれが語る「組織の内実としての自立」とは、実践的な新左翼十年の苦闘に支えられ、裏づけられたそれに外ならないのだ。

全国政治新聞「叛旗」は述べている。「人間が現存の共同性や構造―われわれは、現存の共同性や構造からはみ出して生きているのであるが―を越えようとするとき、生活過程、また意識過程、行為過程等での共同的契機をとり出すことを経なければならぬこと、つまり、その様な自立をせねばならぬこと、そしてこの全体をせ渡らなければならぬことを必死とする。」(「叛旗」16号)という意味での自立性としてである。

それでは、かかる自立とはどの様な組織性への内実を結果するのだろうか。「叛旗」は続けて述べている。

「この様な自立と全体へのはせいたり矛盾である。すべての闘いはこの矛盾として開示したとき、真なるものとなる。

われわれはこの自立を綱領一戦略、規律、生活倫理と呼んできた。そしてその全体へのはせわたりを「階級の構造的」創出と呼んできた」つまり「自立と構造的創出を連環するものが共青同、反帝戦線であり、共青同はより多く政治的刻印をもつものに対して、反帝戦線は社会的刻印をもつのだ。」と。

このことは、次のことを実践的に問うているということだ。即ち、綱領一戦略が論理の整合性へ、規律が恣意性へ、倫理が増幅化へという具合にそれぞれ、教条化され、ロマン主義へと転落し、ちやちやな主体性論へと結果するという事態を本當の意味で止揚するということである。「党」や「党的領域」あるいは「革命」に対する献身性、忍耐力、自己犠牲、英雄主義といったものを語られたものや、狭い決意の問題にすり変わるのではなく、あるいは、「革命党の規律」を「つまらぬ」「無意味」な文句に、道化に変えることを拒絶することを通して、人間が実存し得る自然過程総体から自立の諸契機を介在させて階級の創出に至る回路を、政治的、社会的実践の死の苦悶の間からしっかりとつかみとり表現されるものを内実とするということである。

しかし、現実の階級闘争においては、つまりわれわれの闘いの内で、綱領一戦略域、規律、生活倫理一関係域で自立している存在は極めて少数であり、そのほとんどが孤立した悪

共青同一反帝戦線は、その任の最前線に位置している。われわれは、「組織の共同的力が、あるいは共同的なエネルギーが個体を支える時代から逆に個体の力が組織を支え、個体の力が共同的なエネルギーへの水先案内人となる時代」ではとりわけ「組織を構成する個体が、組織総体がこの闘いを断固として貫徹し、トータルなビジョンやイメージが支配階級との存在をかけた攻防をやり抜く意識力一自然力にまでたかまるべく展開せねばならぬ」(叛旗二九号)と主張してきた。即ち、政治的・軍事的の中核として共青同と、より統一戦線の領域での活動を主とする反帝戦線を、絶えざる学習を通して、綱領一戦略へと集中させると共に、実践的な権力との攻防局面を通して、政治指導の非公然性の獲得、非合法領域の開削、準備に着手する中から規律の強化とその内実の濃密化、日常活動からの質的転化を計り、さまざまな拠点を通しての民衆一大衆への工作、経験の内化をがっちり貫徹し抜くことを実践し抜くことなのだということである。

第二節 △意識化系列▽と組織性

例えば、次の様な主張はどうであろうか。

「われわれは△共産同(B)一共青同(K)一反帝戦線(AIF)▽と組織的位置を再整理しBは△職業革命家▽と

戦を強いられている。60年代後半に、ふつふつと沸き上がった階級闘争の自然発生的与件一自立の息吹は、現在は暗いばかりの中で静かにささやかれているかのごとくである。しかしこのことは、何ら、「革命」の現実性をわれわれの側から奪うことにはならない。逆に、このような状況を切開するものとして、実践的には共青同一反帝戦線の「組織性」の内実化、質的強化として獲ち取ることが重要なのである。

明らかに、われわれは、組織的再編の実践的克服という途上において、この問題に全面的に遭遇しているのだ。そして、大衆的には生活倫理一関係域での戦後的な敗北がまだ加速的であり、大衆の本格的自立の諸契機がごくわずかであり、しかしながらそのわずかな自立の諸契機が浸み込む様に民衆の内部に確実に深化、持続せんとしている現在こそ、政治的党派の側から、より政治的な領域、部分からの意識的な自立の諸契機の実践的な内実化を計る作業をこそ、大胆に提起すべきなのである。

闘いが、極めて実践的、具体的であるとするならば、われわれは、今日の支配階級の革命的左翼に対する諸弾圧を、組織の強化、発展へと転化させる内実を克ち取ることである。「行政的一国家的暴力との攻防に耐える強靱さを個体的、組織的に獲得せよ」である。

△労働者革命家▽によって構成され、Kとは、△労働者革命家▽の部分に内的に指導され△階級として組織されたプロレタリアートの先進的部分▽によって構成されるのであり、AIFとは、△階級として組織されたプロレタリアートの先進部分▽の指導の下、△先進的大衆▽とによって構成されるのだと規定したのである。

そしてAIFは、プロレタリア人民に開かれた、出来るだけ広範なものでなければならず、全人民的政治闘争機関として出来るだけ秘密でないものとして組織されなければならないとしたのである。「(理戦「戦旗」三〇五号)

彼等の最近の主張全体が、民族問題に対するそれに象徴されるようにレーニン主義への回帰という事態と、組織論の「何をなすべきか」へのあてはめ「再構成」が円環をなしている所産として踏えて読みこんだ方が良い。

しかし、彼等がダメなのは、共産同も共青同も反帝戦線も、階級の構造的創出に到る自立的諸契機つまりは、綱領一戦略規律、生活倫理をくりこむということに於いては等価性であり、その様な意識的自然を生きねばならぬということに無知であるということである。情況が強いる世界と主体の、歴史と主体の差し換えに無知である。それ故に「この△B一K一AIF▽という組織的位置の変更は単にB一K一AIFからAIFを

もとの叛軍の位置へ、そして叛軍を一個別戦線へと位置づけ直すことを意味しているばかりでなくB↓K↓A I Fという指導、被指導の関係は前提とした上で、BはBとしてKはKとして、A I FはA I Fとしての位相を異ならせた独自活動の保障を認めるものとしての画期的意義を有していたのである。」(同右「戦旗」)というかつての「一枚岩の党」主義を清算する過程が、指導系列(政治的、組織的)の「再編成」であるという結論に至るのだ。つまりはB⇐K⇐A I Fの清算を(想像を加えれば彼等も5・13闘争に於ける極めて痛苦的な組織総括をなさねばならなかったと思われるが)B↓K↓A I Fとして秩序化せしめるといういつかきた道に返らんとしているということである。何故にB⇐K⇐A I Fを生せしめたのか?それを組織の系列化で越えることはできない。組織は組織一般として成立しているのではないからである。運動⇐組織の転質が、新しい政治⇐社会の原理的把握を要求しているということ、そして、それが、表現の急進性としての運動⇐組織としてではなく、「存在」過程からのそれとして、常や、軍や、統一戦線を構造化せしめるというもつとも困難な作業を負荷として背負うことから始めねばならないということ、しこうして、「党」的領域、「軍事」的領域、「統一戦線」(諸階級、階層結合)的領域の独自性と、相関性、総

じて構造化を明らかに出来るということである。

われわれは、政治組織に於ける政治指導の非公然性や、指導問題を否定しているのではない。あとで詳述する様に、この点については、われわれが昨年10・11月以降状況から強いられる課題としても組織的飛躍の一環としてきたことである。しかし、恣意的な選択によって政治活動があり、党は必要ならば創り出せばよいとした自立社会学とは、一步も二歩も困難な地平でわれわれが政治組織の形成を背負う時、当然にも、運動⇐組織の転質をはたそうとすれば、必然の様に、政治⇐社会の新しい質的分析・把握をなさねばならないのである。さて、われわれは、この論稿に於いても、これまでの主張に於いても、われわれの政治的共同性の質的把握について、「恣意性」という表現をとらず、「意識的」なもの「必然」的なものという様な表現を用いてきた。われわれは、凡百の自立主義者や、ノンセクトセクトの諸君の様に政治組織を個人の自由な連合などとは考えていない。また、倫理的なもの、ロマン的なものとしてとらないこともはっきりしている。

「恣意」的な自由が存在しない様に、「恣意」的な共同性もない。「自由」があるとすれば、それは今日、強いられたものとしてしか存在しない。強いられた「自由」を越境し、真にわがものとするためには、自然必然性的なもの負的なもの

のとしての共同性を、われわれが意識的なものとして取りだす外はないのである。「知的過程」や「精神過程」のみ許容されそこに於いてのみあたかも存在を認められたかの錯覚を与えてきた「自由」概念の誤謬を粉碎しなければならぬ。われわれが形成せんとする政治組織は、それがBであれ、Kであれ、A I Fであれ、「恣意」的なものとしてではなく「意識」的なものである。そうであるが故に、「組織」を離れる、あるいは別の道を歩むという位相にもつとも固執してきた。たとえば、BやKが加盟組織であり、A I Fがそうでないことは、政治的共同性の所有の系列でも、意識系列の序列でもない。それは、まず第一に政治革命を達成するという位相での、対権力闘争に規定された政治組織の本来的な非公然性を組織するということ。そして第二に、「存在」としてのプロレタリアートの階級形成を、階級成熟の度合に規定された主体の発現構造に歴史的に負うということが生じるのである。

加盟か、非加盟かは、何ら状況から強いられる必然的な課題からの自由度⇐主体との距離感を示しているのではないことは確認されなければならない。

政治過程は自己意識の把握する領域として自然過程であり、その意味では現実的自然関係としての生活過程によって相対

化されている。しかし、今日、おあつらえむきの「生活」がないと同様に、おあつらえむきの「政治組織」は、全て自己解体するか、支配階級のそれと相互変容するしかない。われわれが負的なものとしてではなく、意識的な自然としての共同性の諸契機に固執するとは、それ故に「恣意的」なものとしての「政治」の枠、当然にも「倫理的」なもの「ロマン的」なものとしての枠を止揚せんとしているということである。従来から問題にされていた反帝戦線の性格の不明さは実は政治的共同性の側からの不明さではなく、次の章で展開する様に、階級形成の環としてある、政治過程、社会過程それぞれに於ける闘いの発現構造の不鮮明さに依拠しているのである。

第三節 自立的契機としての「地区」

「われわれは、党⇐軍⇐統一戦線を構造的に把握する鍵は、全世界を対象に指定するが故に、ソビエト運動まで展望した「地区組織」だと断言する」(理誌四号)というわれわれの主張は、流布されている日共型の地区体制や、中核型のそれとは根底的に異っている。前者の地区体制が、ブルジョア行政区画と選挙活動で一致するという喜劇や、後者が、中央政治闘争への引上げのプールであるという悲劇は、日本の田舎政治の典型である。

しかし、その対極にあるかのように見える。全国統一組織―組織の中央集権化が、皮相な学生コミュニケーション論や、労評論や固定的な産別運動を生んだことに留意せねばならない。

人間の政治的解放が新たな経済的隷属の開始であった様に、経済的な解放が真に人間の解放であるためには、意識・行為・生活過程総じて人間の意識・存在総体を全的な解放へと向う、社会的な階級形成―止揚という人類史のパスpekティブに於いて、政治党派とソビエトの関係こそが「組織から組織を創る」に於いては原理的に問われねばならぬのである。

①勿論、革命後のプロ独―赤軍―ソビエトへ現在の組織構造を重ね合せ意味づけすることは、決定的に誤っているが、質としてそこへ至る回路を原則的に了解することは別である。

諸階層を結合し、革命へ向け包摂する統一戦線は、旧来の政治意識の均質化で結合した型でのトロツキーの統一戦線のあてはめ―ヘゲモニー論や、逆に下からの意識の政治化で裁断された諸階層別・産別（産別労組、総評、全学連、等）の統一戦線とは異なっており、幻想化されない存在過程―政治化されない生活過程を基盤に地域・職域・家族域総体を包摂する統一戦線の質で決定されなければならない。

②階級闘争が激化し、非合法活動が要求されればされる程、地域・職域・家族域へのウェイトが増大するということも必

ある。

⑤中央党―地区党の機能的側面は、全国政治指導・全国政治新聞の作製、軍事組織形成を目指した中央―地区の軍事指導体制としてあり、軍団形成が地区の青年同盟、統一戦線を媒介に地区的に形成されるのと異なっており、軍事方針、陣型判断、部隊指揮、情報収集等を貫徹するのである。

当面する革命的左翼の再編が、諸党派乱立構造として現出している現在、地区青年同盟建設は至難の状況である。しかし、政治党派とソビエトの関連を見失うことなく現時点における党派の戦略的部隊の育成に全力をあげると共に、政治的、軍事的中核の地区的な形成と、全国的指導、質の獲得を計る一方で、かかる中核体に指導された、地区の政治的、社会的、諸闘争を通じた、地域・職域・家族域に渡る行動戦線の形成、運動の形成を目指さなければならないのである。

政治集団の側からするこの様な「地区」の原理的な措置は、しかしながら、階級闘争の現実のつぼの中でしか実現することはできない。つまり、革命党派が空間域も獲得するとは革命戦略を現実の階級関係の分析、支配階級―支配層の政治―社会再編の質に規定された政治的国家―市民的社会の転質過程に対する我々の実践的な闘いの中で獲得されるということである。毛沢東のいう、「都市」と「農村」の矛盾、農

然である。

全人民武装へ至る前段での武器製造・運搬・使用・結集に至る党的結合は、労学の地区的結合としてもっとも有効であり、実践的であることは、69年10・11月闘争、71年三里塚闘争の証明するところである。

③当然にもここでいう地区とは空間的には内的―外的空間の間で歴史的、地理的条件を含み多様に想定されるが、しかしそこにおける区分単位は、行政区や、一般的な条件によらず、具体的な地理的条件（交通・通信）、階層分布を考慮した上で、ブルジョアジーの政策、職業選択の強制、地縁性の廃棄―第二の自然化―近代化路線による再編を、反近代一般としてでなく地域、職域・家族域の固有な共同側面を階級形成の側に転化する視点―ソビエト形成に向けて組織するということである。

④中央党―地区党の構造的側面的は、△党―軍―統一戦線△の構造的創出に向けた、非合法、政治的、軍事的中核部分の形成と、合法的な（ここでいう合法性とは、あとで述べる様に組織的に対権力闘争との関連で保証された合法性である。）地区組織―つまりは、党の文化・社会運動への了解、回答能力と個別社会拠点での闘い、地域政治闘争等、地区の政治的・社会的な自立的組織対応としての地区青年同盟の提起で

民と自然との対象活動に於ける「土地解放」の革命性等は、中国革命のもつエナジーの内圧力、爆発力を加速させたということは、このことによっている。さて、我々の闘いに於ける「地区」の現実的な獲得過程、空間性の問題はどの様に表象されているのか。

71年の初頭でわれわれは次の様に語った。

「沖繩人民は、戦線25年に渡る米軍政下で反米帝国主義の激成をなしてきた。そしてこの反米―反帝への外化と意識は復帰路線に象徴されるように、戦後日本での最もナショナリズムの結核性な性格をもった。それは戦後日本ナショナリズムの結果であった。つまり「民主主義」体制論という戦後ナショナリズムの担保であったのである。この矛盾を、支配階級は組み入れ逆に戦後ナショナリズムの強化へ補填せんとしたのである。」

（機関紙「叛旗」2号）

これは、どんなに逆接的な表現をとっても、そうでしか闘えず、必然の様に敗北し解体せざるを得なかった日本革命運動の現実を言いあてている。かつて戦後革命の高揚―敗北過程の間で噴出した様々な社会的拠点闘争（地区運動や農民運動や労働運動）は、本格的な国民運動―革命運動を外化させることなく、皮相な「戦後民主主義」の内に階級の普遍性を

喪失した原水禁運動、総評、全学連運動等を生み落した。これらの運動は50年代を経る中で上げ底化された国民運動へと傾斜することを通して、支配階級の逆転的なナショナリズムと溶解してきたのであった。

このことは、言い換えれば、それを指導するいかなる政治集団も政治集団として自立することが出来ず、その意味で、社会集団の本格的自立化を疎外し、切り捨て、国家―市民社会の成熟過程に見合って、その間にかかる国民運動を懸垂状態に置き一方の極は支配階級の政治的な帝国主義的再編に練り込まれ、逆接的なナショナリズムへ、他方の極は支配階級の帝国主義的社会再編に見合って、市民社会の激変のつぼへ、経済過程の自己運動や、生活過程のプラグマチズムによる席捲の荒浪にさらされ解体されてきたということをも証明している。

60年代における新左翼の登場は、様々な理論的傾向を有せるも、基本的には、政治集団の自立化という日本階級闘争のアポリアに解答せんとするものであった。

しかし、情勢論や情況論の強調の差に力点をおいた形での諸論争も政治集団の自立の契機に照射することなく一周期を経たのである。

60年代後半に沸上がった反戦闘争や、全共闘運動や三里塚

解体、再編されており、「地域」の無縁化、「職域」の産別化、企業ナショナリズム、個別化分断化、「家族域」の法的規制化、都市化、無縁化、分断化傾向としてあり、それぞれの解体局面をどの様に階級へ形成してゆくのかは、一般的な「地区か産別か」などという論拠の不毛性を超えた階級的普遍性の展開の内にあるからである。

例えば、理戦派の「地区反軍」の「地区」とは、支配階級の軍事外交路線に対する認識の整合性を党的立場で政治指導する単位にすぎないし、解放派の「地区」は、行動委員会の地区的、産別的結合と称する「労組内ヘゲモニーの奪取機関へののり移り」を御念的ソビエト運動へ帰納するプラグマチックな組織操作の単位にすぎない。(地青協での革マルとの論争の双方の不毛性を見よ) 革マルの「産別」運動とは最後の産別組合への加入戦術であり、構改の「産別」や「地区」は「経済スト↓政治スト↓蜂起」へシェーマ化される権力奪取の夢想を支える現実的組織操作の単位にすぎない。大衆的職場組織の自然発生性に依拠する外はないのである。

さて、われわれが、組織戦略を「党―軍―統一戦線」の構造的創出と語った時、その媒介を「地区」的にと語った。実体的には「地区党」の建設に着目してきた。このことへの原理的な接近は、階級形成、党形成との絡みとして、前述して

闘争等、社会的拠点闘争は一気にこの様なアポリアに本格的に解答せぬことには、つまり、政治集団、社会集団の本格的自立の諸契機を折出せぬことには、一步も先にゆくことが出来ぬという状況を現出せしめたということである。われわれの「党―大衆」論批判の提出の根拠には、この様な歴史的総括の視点が固着していたのである。

支配階級―支配層による「国家―市民社会」の再編過程が、「階級」の解体を「国民」へ再編せんとするとき、政治集団として自立もできぬ「八派」や、社会集団としても自立できぬ「全共闘」が「八派―全共闘」として野音の空中で和合する姿こそが、原水禁運動の空中分解、全学連運動の解体等の「二度目の喜劇」を予定していたのではなかったのか。

雁が融合を想い、吉本が拒絶したアポリアこそ、「地区」へ迫るわれわれの課題である。

しかし従来の「地区か産別か」等の論争は、本質的には、組織問題の中心環ではあり得ない。なぜならば政治集団の側から見れば「地区」や「産別」は意識的結合の歴史性、具体性的問題として、政治指導の総体化の内て解決される内容であり、社会集団の側から見れば「地区」は自然過程としての地域、職域、家族域を個々に分断され、そこで表象される主体の固有な時・空は、支配層の収奪の対象として鈍欲な牙に

きたのでここではふれない。

しかし、むしろ問題は、階級成熟との関係において「地区党」を実体化せしめる本格的統一戦線の未形成の段階―即ちその様な主体の構造的創出の前段で「党―軍―統一戦線」の構造的創出へ至る諸過程を現実的にどう把握するかにある。前記した様に、われわれにとつての主体的な意味での「地区性」は、現在では、砂川や三里塚や、大学拠点や、職場や、住民運動地域に、極めて遍在的にしか存在していない。比的に言えば、個々の主体の内部にバラバラに偏在し普遍的統合の諸契機を、あるいは現実化する契機を支配階級の階級再編の現実性という力の前で沈黙させられている。

しかし、政治集団が本当の意味で自立を指すとすれば、この様な遍在的な社会的拠点闘争の内に階級的普遍性の核を見出し、それを組織すること以外にはありえないことは自明である。

その様な階級的普遍性を抽象化する能力を欠くことは、「連合赤軍」の悲劇への道行か、社・共、革マル等への喜劇への道行かを歩む外はないのである。

何故、「地区」なのかは、この様な遍在的な社会拠点闘争に内在する階級的普遍性を、社会過程の現実性を自立した運動として組織してゆくことによってしか説明しえないし、政

治集団が、その様な社会集団との相互性や、交換性を現実に豊富化させる「場」としてしか可視化されないのである。

当面、私達は「地区」性の獲得は、政治党派の側からは、意識的結合の差を政治的、軍事的指導体制の獲得として、具体的には、政治、軍事域での非公然性、非合法性の組織的獲得を媒介に意図されると前回でも展開してきた。しかし、社会過程からは、極めて遍在的に存在する社会的拠点闘争を媒介に「地区」性の獲得を計らねばならない。

現在の社会的拠点闘争が、そのまま「地区」的な闘いにスライド発展することを求めるのは誤りである。なぜならば、自然過程としての地区は、それぞれ現実的な生活過程、あるいは、市民社会の構造的位相に相即的に分断、無縁化されており、社会過程の現実性から運動的にストレートな社会闘争を展望することは至難の術であるから。

例えば、今日の三里塚、砂川、大学等々での闘いの突きあたっている壁は、次の様な三里塚での象徴的な事態に表象されている。

第二次強制代執行闘争での大木よねさんの闘いや、大竹はなさんの墓地問題を通しての条件派への転落がその例である。これらの意味するものは、一般的な組織規律や、意識性の問題ではない。勿論前近代や近代や反近代等の構造化の必

極めて困難な問題である以上、社会集団は、そのことを、最大限条件闘争として必然のごとく収約してゆくしかない。

しかし、政治集団は具体的な社会的契機を思想化することにより、社会集団は、その様な抽象力や、観念や思想の力を自らの闘いにイメージ化することにより、相互に自立してゆくことは可能であり、それが、どの様に困難であっても、われわれが最も固執せねばならぬ最大のアポリアである。

不売同盟の条件闘争への傾斜はいはば必然の構造である。しかしそこには、本質的普遍性はない。依然として本質的な階級への契機は、政治集団、社会集団の自立的契機としての磁場をへ党一軍一統一戦線として構造化することの外にはない。それは、平面的なそれではなくて、社会的拠点闘争の偏在性という状況の中に具体的な「地区」の創出を、思想の力、観念の力、想像力ではたすということである。これ以外には「階級」への道はない。

最後に、以上の論点を吟味しつつ、共青同一反帝戦線の組織的問題に言及しておく。

何度も述べてきた様に、政治的結合の環の「地区体制」は、革命主体の歴史的條件、政治指導関係の問題として可動的・可変的なものであって、そのまま「地区党」へスライドするものではあり得ない。党形成との絡みで政治的結合の共青同一

然的な姿というものではない。収用対象地内の農民が、不売同盟という共同性から飛躍する契機を創出しなければ不断に生活の現実性にその団結が喰い破られてゆくというリアリズムにこそあるのである。

前者の問題は、農民を主体とする社会集団が、「農民をやる」「農民でなくなる」という極北にどの様な大衆の自立を創出できるのか、つまりは、「武装」や持続した闘いを支える抽象化や観念化を如何に生活思想として創出してゆくのかわり、後者は「明日の生活」という避けることのできない現実過程のクソリアリズムを、社会集団としてどの様な共同性に組織化できるのか、つまりは、具体的な生活はどう組織するのかということである。

強調の差はどうかであれ、今日の社会闘争の普遍的課題は、今日の砂川でも、沖繩でも、大学拠点でも、職場でも、この様な矛盾として現出している。

われわれを取巻く状況を把握すれば、前者を強調すれば、地獄の様な、社会集団の自立化への孤立した悪戦が待っており、後者を強調すれば支配者階級との現実の生活一生命維持をかけたギリギリの闘いが待っているという様に現出している。

政治集団が具体的な生活を組織化することが当面、

一反帝戦線の任務、位相には、ここでは述べない。

むしろ、われわれが「階級形成」でいう、「地区」とは、社会的組織を形成する場合の政治集団の係わりの方に普遍的契機の「地区」を想定している。このことは偏在的な社会的拠点闘争の内に階級の普遍性としての「地区」を可視化するという作業に象徴されてくる。その問題の思想的な課題は前段で述べた。現実の組織には、社会集団、あるいは、社会的拠点闘争に対して政治集団が係わり、社会組織を形成する媒介者は何なのかということである。

政治的（意識的）結合における共青同一反帝戦線の位相、任務の構造については、明らかにってきたのであるが、これまで、社会過程との相互性、関係性においては不鮮明な点があり、その意味で反帝戦線の性格がいまいであった。つまり、逆接的にいえば、社会集団を組織する原理や、イメージが提出されれば、革命は「たやすい」ものであるという意味での困難性であるといってもよい。

それではわれわれの回答はどうか。擬制的な国民運動の終焉は、次には必然のごとく帝国主義的再編の矛盾を社会過程で噴出せざるを得ない。支配階級の諸政策に対応して、社会的拠点闘争は必然的に偏在的にはあれ、次々と現出しないではおれない。それを統合し、組織してゆく環は思想の

力、観念の力、われわれが綱領と呼んできたものである。それは一般的な戦略ではなくて、生活思想や、技術論や、文化問題等々の人間の総体に渡るものであり、これは国家へと必然的に激突し、超えるものでなくてはならない。

この様な社会的拠点闘争への媒介者は、当面政治的な反帝戦線である。社会的拠点闘争等の社会過程での闘いの戦術や統一戦線、統一行動を生きたものに、発展性のあるものに蘇生するためには、国家に必然のごとく激突し、それを超えようとする思想力、想像力が不可欠である。反帝戦線は、その様な力を取り練むために、政治的な意識的結合、綱領的視座の獲得を果さねばならない。

社会的拠点闘争、総じて社会過程での闘いを階級的普遍性へ折出せしめる戦術や統一行動は、反帝戦線の活動の場であり、支配様式の現実性に拮抗しそれを超える内実を獲得せねば、固定化した内容のない目的化された空文句に転落する。

例えば中核派のそれが、国家の実体的機能の部分にしか至りえないが故に、解放派のそれが、社会の關係的把握が理解できず、国家へには決して至り得ないが故に、革マルのそれが貧しい認識主体の内にか現実がないが故に、戦術や統一行動等を、プラグマチックな操作に固定化しているのに対して、われわれは、その様な固定化した戦術や、統一戦線や統

ともその「軍事」や「武装」や「規律」、「倫理」に対する無知をさらけだしたものの典型である。

さて、日向理戦派は、である。連合赤軍問題を、対ブルジョアジー、社共、あるいは合法左翼の喧騒なデマゴギーとフリュームアップから峻別し、革命的左翼の問題として対象化せんとすることは原則的にはよい。しかし、問題は対象化の内容である。戦旗二九四号は述べている。

「問題は、かかる決定的な事態を招来せしめた最大の根拠が、何よりも彼ら連合赤軍が、武装闘争の遂行主体として、その政治的組織的軍事的質の全くの未熟さにあったということである」

では、何故にかかる「未熟な」政治的組織的軍事的質の連合赤軍の銃撃戦を「どの様な」判断基軸の下でいち早く支持したといふのだ。君達の答はこうだ。なぜならば、今まさに「恒常的武装闘争」の時代へと突入しており「革命的左翼の昨年来の武装闘争の進撃が、権力を恐怖と混乱の渦の中に陥しこめ、プロレタリア人民に新たな階級闘争の前進と勝利の光を投げかけていた」その矢先であったからなのだ。と……。

読者諸君、もう少し、がまんをして読みつつけてほしい。話には限らず「おち」があるというものだから。理戦「戦旗」は、連合赤軍を戦術主義―戦闘主義の破産と宣告し確認する

一行動を政治的、意識的結合の側から多様化し、自由化し、豊富化させる側に転化させる闘いを形成せねばならない。

社会的拠点闘争の内に階級的普遍性を見出す。その本質が必然の様に国家に激突し、それを超える処に、「地区」の創出が可視化され、反帝戦線は、その様な任務を、徹底的に追求し、意識過程にその本質を環流し、政治的集団の実践体として、本格的な社会拠点闘争に媒介するということが、われわれの任務であり、組織課題であることを確認しよう。

第四節 組織性と規律―倫理の位相

周知の様に、今春連合赤軍問題は日本革命運動の負的な局面を全て露出させた。「綱領―戦略」的な位相からのわれわれからする批判は、機関紙二九号に於いて収約的に展開してきた。組織問題にひきつけた場合に、如何なる内容がわれわれに問われ、克服すべき課題があるのか、この点から組織性―規律―倫理への照射をなすしよう。

第二次ブンドのかつての構成部分として、共にBUNDを名乗る理戦派と、仏派の末期的症状の分析から入ろう。

いち早く、「あさま山荘」の銃撃支持を全面的に機関紙にのせた両派の「血の粛清」に対する評価に至る豹変とその取締り方は、共に「頭かくして尻かくさず」の類であり、もっ

ことを通して「粛清」問題の反レーニン主義的本質こそ「レーニンがボルシェヴィキに体现していたところの組織的規律の問題であり、とりわけ軍事組織を裡に孕む党組織の問題として現在の獲得されていかねばならないものである。」と結論づけている。つまりは、連合赤軍の「粛清劇」をスターリン的「粛清」に人格表現し、その止揚こそレーニン的人格表現で遂行されねばならないと例証(?)し、説明してくれているのである。(何と革マル的なことか……)

確かに、組織に於ける規律がその形成期に於いて指導者の人格的表現、倫理に負うこと大であることが歴史的に確認されるという事実をわれわれも知っている。しかし、それは極めて一面的である。過渡的である。なぜならば、組織的規律性というもの、すぐれて階級形成―成熟という視座、歴史的位相、空間的条件、即ち人間の存在に関わる本質的な關係的位相を介してなのである。

理戦派の(そして根本的にはそのイデオログ日向氏の)レーニン主義、ボルシェヴィズム理解の皮相さは、そのレーニン主義党(中央集権性と自己批判活動)建設に対する教条主義的な精神訓話学に全面的に依っている。例えば、次の戦旗論文の結論の無内容、清算主義、言辞左翼ぶりを見られた

い。本当に、地はできるものである。「…かかる新たな武装闘争の飛躍的前進は、何よりも不拔のレーニン主義党の確立と、その裡における党の正規軍建設、そして、全人民的政治闘争機関―地区共闘ソビエト型組織建設を展開基軸とする恒常的武装闘争の公然―非公然の重層的展開をもってないうること。」だそう。

日向氏が誇る「五〇年代日共」中核自衛隊に優るとも劣らぬ理戦派の組織性、規律性」（これは日向氏の論文の極めて謙虚な叙述の一部である。もともと五〇年代日共の「反米愛国」主義、軍事組織をもつとも忠実に継承し実践したのは外ならぬ京浜安保共闘であることは日向氏も御存知だと思ふが。）をもってすれば「影」的存在のように実践へせり出して意味付与するのはよして、重層的に公然―非公然闘争を黙々と貫徹する方をわれわれは歓迎するとしてよう。

さて、規律に関して、当のレーニンはどの様に理解していたのであろうか。一九二〇年に「ロシア革命」遂行のもっとも自信に満ちた、そして、もともと自戒に富んだ「左翼小児病」の中でレーニンは述べている。……

「プロレタリアート革命党の規律は何によってもたらされるのか？何によつてうちかためられるのか？それは第一に、プロレタリア前衛の意識、革命に対する献身、その忍耐、自

若干引用が長くなつたが、日向氏の皮相な「一歩前進、二歩後退」ノートなどの訓話学と比較をすれば、日向氏の主張する組織性、規律性のガイストの教条丸出しが証明されるといふものである。「党の革命」を完遂し、第二次ブンドを止揚したと宣言する理戦派の今後（？）に期待（？）するとしてしよう。

さて、さらぎ派である。この党派は当然にも、もっと歯切れの悪さばかりが目立つのである。

「綱領的一致と政治戦略の一致の無い連合は野合でしか無い、野合の結果は、これ又目に見えている。正にここに悲劇があったのだ。

塩見君の総括（序章七号）は二年遅かった。」（蜂起二四号）…、何が「二年遅かった。」だっ、何が「正にここに悲劇があったのだ。」君達こそ、自分達の位置を半年前の、いや一年前の野合ブンドの下に置いて反省すべきではないのかね。いやこう言うべきかもしれない。君達こそ、本当の意味で総括の基軸が「十年」遅いと。「蜂起」式の総括をもって清算主義客観主義というのである。かかる事態を自らの組織的総括と重ね合わせてみる精神の受容性もない部分に「蜂起派」のみが、先進国武装闘争を勝利に導くことが出来る」などと駄法螺をふかせるわけにはゆかないのだ。

「われわれは、71年4・28闘争において、地下正規軍をも

己犠牲、英雄主義によつてである。第二に、彼が極めて広範な勤労者大衆、まず第一にプロレタリア的勤労大衆と、だがまた非プロレタリア的勤労大衆ともむすびつき、彼等に接近し、必要とあればある程度まで彼等とくあう能力によつてである。第三にこれらの前衛が行なう政治的指導の正しさによつて、彼等の政治的戦略と戦術のただしさによつてである。

ただし、これはもともと広い大衆が自分の経験にもとづいて指導のただしさを納得するという条件の下である。これ等の諸条件がないと、実際にブルジョアジーを倒し、全社会を改造しなければならぬ先進的階級の党たるにふさわしい革命党の規律は、実現できないのである。これ等の条件がないと、規律をつくりだそうという試みは不可避免的、つまらぬものに、無意味な文句に道化に変わってしまう。だが他方からいうと、これらの条件は、一挙に発生するわけにもゆかない。それ等は長い間の労苦によつて苦しい経験によつてはじめてつくりあげられるのである。これらの諸条件を創りだすのを容易にするのはただしい革命理論であつて、この理論はまた教条ではなく、真に大衆的な、また真に革命的な運動の実践と密接にむすびついてはじめて最後につくりあげられるものである。」

（国民文庫版P 11～12）

つて非合法軍事の闘いをおし進める共通の基盤を蜂起―戦争派として獲得した部分として痛苦に総括を血の教訓としてわが物としたい。」（同受）

という君達の願望が、「鍛えぬかれた共産主義者でなければ軍隊をつくる事が出来ない。だからわれわれは戦闘歴の未熟なものを軍に組織することは出来ない。」という、まったく、赤軍や赤衛軍の位相も皆目理解できぬ、また、軍形成の階級形成との絡みでとらえることのできない、ズブズブの経験主義に転落することを称して清算主義というのだ。苦達にもレーニンの次の自戒を示しておこう。

「ボルシェビズは一九一七年―二〇年に、これまで見たことのないような困難な諸条件の下で、もともと厳格な中央集権と鉄の規律をつくりあげ、それを首尾よく実現することができたのであるが、その原因は、ひとえにロシアの多くの歴史的特殊性のなかにふくまれるものであった。」

レーニンはロシアの歴史的特殊性の一番目に、ロシアの革命思想の彷徨と動揺、誤りと失望の経験であつたことをあげている。そして就中、亡命による国際共産主義運動との交流による理論の対象化と、非合法―非公然活動の具体的実践とを。

われわれはレーニンの単純アナロジーを主張しているので

はない。「マルクス読みのマルクス知らず」のたとえにて、党形成、就中、軍形に関する鉄の規律問題について、全党派がレーニンに依拠しつつも、原理的にも、イメージ力においても、全く訓話的にか、経験主義的にしか理解できない貧しさをいつているのである。本当に「レーニンの読み方」が違うのである。思想に創造性や、実践との対象化が欠落しているのだ。その他、関西派の諸君の総括、なによりも赤軍派獄中組の連合赤軍総括の誤謬は、レーニンの前記の主張を引用しつつも、全てその意図する思想的、実践的内実に一歩も踏み入ることが出来ないことよって証明されている。革命組織に於ける規範、規律、倫理の位相の解明を積極的にはたすことの外に、これらの否定的局面を止揚する方途は無い様に思われる。

たとえば、われわれが反帝戦線規律一、討議には積極的に参加する。二、大衆的信頼を形成、確保する。三、行動は指揮に従う。四、革命的警戒を怠らない。付則。一、意見が異なる時、方針の邪魔をしない。二、時間、約束を守る。三、規律違反、利敵行為は制裁される。一を明らかにした時、「この様な規律が規律として生きるためには、諸階層階級一小共同性の共同的契機が階階の創出へ開花すること、いいかえれば大衆の自立が、觀念、時間軸と異なったものとしとり出し

の限らない情熱と交流を対象化し、具体化する契機であり鏡なのである。

もちろん、革命党派が存在として非公然一非合法部分を有するということは自明である。しかし組織性が政治性と切り離すことができないのが自明である様に、階級闘争の諸過程における様々な自然発生性や権力の攻撃の具体的分析の内に、そして、古い現存的な秩序、組織からの運動、組織の転質という与件の具体的展開の内ではじめて党的主体の組織の飛躍が、ある場合には個体性の先行的な飛躍として、またある場合には、一挙的な階級の成長性によって組織的に対象化されるのである。

このことが理解できない言辞左翼、教条主義者、清算主義者、経験主義者には、軍事や武装を、非公然や非合法を軽々しく語る資格などありはしないのである。

われわれは、少し多く、彼等に関りすぎたのかもしれない。しかし、われわれ自身の内部に不断に起る組織問題をめぐり、さまざまな試行錯誤の対極に、この様な混乱がいつもあるということを十分に知ることは、極めて、今日の様な権力との激烈な攻防局面を展開しているわれわれ革命的左翼にとって必要なことだからである。その意味では明日の自戒として、レーニンをもしれば、まさに次の様になる。

ていることが前提となる。われわれが関係一生活倫理と呼んできたものこそこれである。」(叛旗16号)と主張してきた。しかし、それは戦後世界一過渡世界がもたらす国家一市民社会の世界史的らん熟、等質化の中で倫理なき生産力理論、プラグマズムによる生活倫理の底深い危機との日常的対決一個体的、組織的一を通してのみ獲ち取られるものであるということが前提であるとも。

そして、その契機については、プラグマチズムの千年支配を「永遠の今」論的に「生活倫理」を認識することで理解するのではなくて、具体的な、あの全共闘運動の団結や、三里塚闘争に発揮された。反対同盟、青行、婦行・少行・支援学生、労働者との共同的結合の諸契機、北富士一忍草母の会の憲法、大正行動隊デーゼ、中国紅軍等々の歴史的体験、条件の内に了解され、今後ますます熾烈な階級攻防の内に「存在」過程におけるもつとも本質的な位相としての共同的な「生活倫理」の形成として実践的に克服し、創出する努力を「規律」の実体性、現実性として現存的、ブルジョアの諸規範から離陸する指示向線に沿って形成することで解答してゆかねばならぬのである。これが、まさに、「党形成」における、政治的軍事的中核体の形成一「党的推進部隊へ向けた、党への、革命への献身性忍耐、自己犠牲、英雄的闘い、革命的大衆へ

「歴史はいたすら好きで、古い運動・組織一「党一大衆」の教条主義者たちに、多くの新しい装を表面的にこらした運動・組織一「党一大衆」の教条主義者たちの先鞭をつけさせたのである。」と。

さて、われわれはここで、「組織性」一規範一規律一倫理の位相について若干のコメントを加えて、われわれの方途の指示向線を提起することしよう。

もう一度、「左翼小児病」でのレーニンの主張にたち返って検討してみよう。レーニンはプロレタリアート革命党の規律は何によってもたらされるのかについて、「もつとも広い大衆が自分の経験にもとづいて指導のただしさを納得するという」条件の下で、第一に「プロレタリア前衛の意識、革命に対する献身、その忍耐、自己犠牲、英雄主義」を挙げている。その第二には「広範な勤労大衆」一民衆との相互性、第三には「戦略・戦術」の正しさ、正確さであると述べている。以上のレーニンの分析が静態的なレベルで理解されるとき、われわれは、幾多のレーニン主義者の未路として教条化されるのを見てきた。連合赤軍を頂点とする政治過程・軍事過程を主眼にして組織規律を形成せんとする方途の破産は、政治集団の過渡性の位相を階級形成の視座から相対化することに失敗しているためなのである。毛沢東一中国紅軍の三大規律

一八項注意が、中国農村社会の共同性の変容構造と土地革命の相互性、抗日闘争一内戦過程という動態的な悪戦を経て、その内実を結実化させたことを忘却した部分は、規律をあたかも至上なものとしてリアルポリティックの内に（権力攻防を政治のオートマチスムの内に）一人歩きさせたのである。

また、主体意志としての政治意志、英雄主義、献身性の強度の主張は先験的なものとして取扱うか、その反指定としてのリアリズムという名の事実主義、イデオロギー主義へと繰り込まれてきた。前者は、ロマン主義の自己増殖へ後者は反ロマン主義一リアリズムの自己増殖へ至り、政治的共同性への愛憎関係として表裏一体化される。革命過程一階級形成と主体意志のずれは、政治集団と個、及び諸共同性との関連によってしか解明一止揚できない。

さらに、規律に関する悪しき傾向の他の一つは、社会集団・民衆・大衆との相互性に於ける位相の解明の不充分性である。土着主義と前衛主義の相関係は、多く語られた感がするが、いずれも「前衛一大衆」論へと帰結してきた。政治集団と社会集団の関りは、綱領が単なる政治戦略としてのみならず、社会集団そのものの把持する基本的な矛盾を解明可能な内容へ転化し得ることを必要条件とせねばならず、社会集団が逆に、自らの立脚点（生活・職能・自然過程）との深化から階

級一綱領を了解する過程で成立する拮抗、緊張関係を媒介とした蓄積過程として把握しなければならぬ。

レーニンが主張した規律の形成という課題を以上の付帯事項を加味し、動態的に理解するときわれわれは、規律問題一組織性への端緒についたことになる。

(1) 主体の存在を現存性と歴史性の交点と把握すれば、自然過程から存在に接近する視点からは人間の個的、集団的共同性のもつ意味での規範・規律・倫理の位相は現存性としての確認契機としてまさに自然過程としてある。

政治過程が社会関係総和の幻想的疎外態であるとすれば、政治集団規律は勿論過渡的なものである。階級闘争一階級形成の発展段階、権力闘争の性格に規定されて時間的、空間的制約を受ける。

これに対応して階級規範は、人類史の成熟度に規定されて、集団関係の中の個、集団相互の位相に於いては言語化されない社会規範一関係の規範の性格を有しており、普遍性を貫徹する根拠を有している。

(2) 政治規律が権力闘争性格に規定されるということは、権力攻防の局面が、われわれの60年以降の諸経験（議会折衝十街頭圧力行動一街頭、社会拠点大衆武装闘争一持久戦一対峙戦）を踏える時、経験の蓄積度の内で事明のことである。

前述した様に、権力攻防を政治のオートマチスムから自律性を受容して取り扱えば、存在攻防は政治意志、献身性、英雄主義の強度に還元され組織防衛主義のリゴリズム、保守主義が一人歩きするのは必然である。

政治規律を動態的に行動・戦闘過程から再把握すれば、政治集団が如何なる段階にあり集団行動一防衛規律は必然の様に要求され、その内化、血肉化の度合が政治集団の強度を示すことは自明であると思われる。

しかし、われわれがここで最も留意せねばならないのは、社会的諸関係総和の幻想的疎外態としての規範一規律を国家幻想一法、宗教、イデオロギーに掠め取られない方途の回路を規範一規律の出生母胎たる政治集団内に如何に措定できるのかという点である。

権力一ブルジョアジーは、ここでわれわれが対象としている行政的・強権的・暴力的性格、即ち、国家の実体的構造の他に、幻想的、規範的性格を二重性として有している。さらに行動、戦闘過程は権力攻防が煮詰まれば、煮詰る程作戦・兵站・救済・弾射・敗政等の非公然域、集団の行政的力の比重が強まること、さらに、以上の二点は、カンパニア闘争、スケジュール闘争と実践内容が異なると共に、逆接的ではあるが政治の日常性Vを根底的に問われることである。

われわれは、このような階級闘争の二重性を、規律一規範関係へと結実化させねばならないのであるが、それは、政治集団内部にとっては政治的共同性に根拠をもつ規律と、政治思想、綱領域に組み込まれる規範の構造化をはたすことによつて貫徹されねばならない。

(3) 規律は実践及び行動過程を律するとともに、集約、弾対局面をも規定する。大正行動隊テーゼ、目的集団、社会集団の行動規律は前者を主要に取り扱いたが、後者を構造的に取り込むことに失敗してきた。つまりは、組織保持一保守主義としてではなく、政治過程の日常性、日常組織の定在に回答しえなかった。

我々が現局面で重視すべきなのは、大衆闘争経験で自然成長的に蓄積されてきた前者の位相ではなく、権力攻防一存在攻防の水準を把握すれば後者の日常規律一規範の性格転質、視座である。

(4) 個の政治集団への参加、関りは、理論的契機、行為の共同性を契機として政治的、且つ組織的に表現せんとする所産である。だが自らの組織的日常を相対化しうる政治思想を有さねば（「軍事」を孕むのではなく、「思想一觀念」を孕むのである）不可避に、決断主義、倫理主義、根性主義を、さらに、その対極に対応する組織持続を生み、生活が政治よ

り広いことを一般化しての戦線離脱→自己合理化、政治組織憎悪へ至ることを止揚することはできない。

以上の諸点は、勿論、文言化されたレベルのみならず、深い経緯の蓄積として沈黙の領域に多々属している。政治集団内に於ける相互的禁示事項を軸とした申し合せ等による集団内の規律・規範は、不断に闘いと共に組織構造と共に解体→再編されるものとしてある。階級形成の視野を構造化した位相で規範→規律→倫理の内実を組織性へと還えず作用→反作用を、われわれの政治集団形成に練り込むことが、われわれの視点であることを再度確認せねばならない。

第三章 「存在」攻防勝利への主体・組織の飛躍

第一節 戦略の変容過程と

「かくめい」への契機のかくごとく

「行政的、国家的暴力に耐える強靱さを個体的→共同的に獲得せよ。——組織の共同的力が、あるいは共同的なエネルギーが個体を支える時代から逆に個体の力が組織を支え、個体の力が共同的なエネルギーへの水先案内人となる時代→ではとりわけ→組織を構成する個体が、組織総体がこの闘いを断固として貫徹し、トータルなビジョンやイメージが支配階

われわれは、この間の実践の中で、組織建設にひきつけた時、次の三点についての検討を迫られてきたと考えられる。

- ①運動戦略としての中央権力闘争→マッセンストライキ不発の現時点において、またそれを準備する過程において、政治的→社会的拠点、あるいは、政治過程をいかに把握し、われわれはそれを対権力闘争の対峙→持久戦の闘いとして「中央」→「地区党」の実体をイメージ化することができるのか。
- ②「存在」攻防の現局面を、対峙→持久戦として、政治組織の非公然領域、非合法領域の開削、準備をいかに組織してゆくか。
- ③「存在」攻防における苛烈な獄中闘争、裁判闘争、非公然闘争を政治的にも、社会的にも組織の内実として如何に獲得してゆくのか。ということである。

第一の点については、中央→地区党建設の位相、政治的→社会的拠点闘争と「地区性」の可視化、政治集団の位相として論及してきた。ここでは、「地区党」建設の総括を中心に展開しよう。

われわれが第二次ブンドの八回大会で検討した「中樞→マッセンスト」論は、その主張の基調であった政治過程論からは自由でなかった。68→69年段階におけるベトナム反戦闘争と、そこから相対的独自に発生した全共闘運動のうねりは当

級との存在をかけた攻防をやり抜く意識力→自然力にまで高めるべく展開せねばならない。」(叛旗二八号)

沖繩→三里塚→砂川を日本帝国主義の外的→内的、政治的→社会的再編成への対決せざるを得ない「環」→「焦点」として闘いを展開する過程で、われわれは、三塚第二次強制代執行闘争、10・17砂川闘争、10・11月沖繩闘争における対権力との強烈な攻防を闘い抜いてきた。また、三里塚、11月沖繩闘争で、数多くの戦士を獄に奪われ、なお現在、現在放火未遂等の重罪で獄中闘争を強いられている。そればかりではない。公安司法権力は、三里塚闘争への報復弾圧として、三里塚青行隊への傷害致死罪の適用を發揮し、支援学生への東峰十字路関係でもこの法の適用を目論んでいるという事態が進行している。(注、この論文作製以降、千葉県警は、支援学生に対する傷害致死罪の適用も文字通りデッチあげた。) 闘いは、権力の革命的左翼部分の「存在」抹殺を意図した弾圧(アパートローラ作戦、実刑の続出、重罪の適用、新たな弾圧立法の画策、刑法の改悪、少年法の改悪、精神病理学的悪用等々)に対してわれわれが、いかにこの攻撃を粉碎し、断固たる闘いの進撃を克ち取るのか、かかる権力との「存在攻防」にいかに対峙し、勝利し抜くのか、いかなる組織的課題が問われているのが鮮明にされなければならない。

然にも政治過程論的な把握での運動戦略を閉塞的なものとしてしまった。現代革命における戦略問題は、当然にも、世界的、普遍的な課題の分析、いうならば日本階級闘争における運動→組織の戦略環を、いかに再構成するのかが中心的なものとらざるを得なかった。

表現の急進性を極限にまで展開した69年秋の敗北以降、いわゆるわれわれの闘いにおける敗退局面は、現代革命、権力闘争の戦略環をどのように指定するのかに集中した。

しかし、困難なのは、自然史過程としてある過渡期世界の「国家→市民社会」の世界的等質化が、従来の国家分析、権力分析の内実を極めて不鮮明にしているということである。それは、「ファシズム」論「ポナパルチズム」論や、レーニンの「帝国主義論」のあてはめでは理解できないものとしてある。つまり権力の壁が、極めて実体化して理解することが困難であるということである。国家そのものが「中性的」な国家としての成熟、爛熟構造を示しているということを意味している。

このことは、60年代の初頭を飾った政治→社会構造の二重性や構改論や、政治過程論や、それ以前の構座派→労農派的論争の位相を、はるかに越えた地平での把握を要求しているということである。

権力分析の先験的方法での不可能性は、それ故に、ストームな戦略課題の定立の不可能性としてある。沖繩闘争における、「奪還論」から「返還粉砕」論までの幾多の戦略論の誤謬はこのことに無知であることよって起る。

「恒武闘」や「内乱への転化」や、「ソビエト運動」、「コミューン」形成が現実の貧しい運動組織への意味付与として振舞うということが現実過程において無力であるということである。「戦略」問題を位置づける場合、われわれは、どのような情況把握をしているのか。

周知の様に、69年4・28沖繩闘争の総括をめぐる第2次ブンドの党内・党派闘争の渦中で、我々は「中央権力闘争」マッセンストライキ」を革命戦略の型として提起してきた。

社会的拠点闘争→全人民的政治闘争→革命闘争へと戦略化する中権→マッセンスト→論は日本階級闘争史上に初めて「権力」問題を問うたという意味で画期的であった。

4・28沖繩闘争に於ける「霞ヶ関を占拠せよ」というスローガンは、まさに「権力奪取」＝「革命」のスローガンとして誰の眼にも写った。しかし、この時点では沖繩闘争の何たるかも、「綱領・戦略」の位相も、「権力」とは一体何なのかも明らかに出来なかった。「政治過程論」を至上のものとした部分は「権力」の像を、行政的国家的肥大化に重ね、自

己の貧しい存在を革命主体へと投影することで最終・最後の革命的ロマン主義の仇花を咲かせんとして67年～70年の自然発生性の周期の内に頓座した。我々も、このことに良く解答することができなかった。

しかし、我々は、「権力」問題とは、本質的に「国家」の本質問題であり、就中、「階級形成」の問題であることを解析してきた。

それ故に、組織論が本質的に国家批判の謂であることを、「綱領・戦略」の位相、水準の確定を通して展開してきたのである。

我々が戦略問題について語る第二の視点は、間違なく階級情勢が後退→持久局面に突入しているという認識である。

客観的には戦後的な位相での国家の幻想性の爛熟→拡散過程に対応しており、政治過程論の終焉であり、擬制的な全人民の闘争としての安保→沖繩闘争の終了であり、主体的には市民主義、ロマン主義、プラグマチズムを超えた位相での共同的・個別的契機により内化→深化された新たな主体形成の困難性であると考えられる。

我々は、この様な前者からいえば日本階級闘争の負的な伝統、後者からいえば、日本民衆の敗北過程との訣別を通してこそ、新たな階級の発現構造を措定出来ることを明らかにし

てきた。

△沖繩→砂川→三里塚→戦略の画期性と革命性は、この様な階級情勢の後退局面→持久構造の内に偏在的な社会的・政治的拠点闘争の歴史的視座を確定したことである。(このことへの原理的踏み込みは何度も述べてきたので割愛する)民族→国家→世界空間の閉塞化、秩序化に抗して孤立した闘いを展開しているベトナムにもっとも通底する沖繩の綱領的視座と支配階級の政治的・社会的再編にもっとも戦闘的に拮抗せんとする沖繩→砂川、沖繩→三里塚の政治→社会拠点の尖端的闘いの質こそが依然として日本階級闘争の口であることを何度も確認せねばならない。

さらに、われわれにとつての困難さとは、近代が表象するもっとも普遍的な様相で立振舞う、「世界性、国家性、中央性」という概念を如何に越えるのかを、現実的な闘いと、組織形成でどう考えるのか、というこの困難性である。

従来のコミュニカル以降の左翼は、このことに対して、先験的なプロレタリアート措定か、国際主義の提唱をなし、一方では世界性に地域性を国家性に社会性を、中央性に地方性を対置せんとしてきた。しかしこのいずれも無効である、あたかも近代に対して超近代も反近代という構造化も不毛であった様に。「土着的なもの(自然的なもの)に無知であると

ころには、真の世界性はないし、逆に土着的なものにだけとり込まれては真の地方性は存在しない」と語った一文学者の方が依然として正当である。

戦略環と組織→運動建設のもう一つの困難性は、日本階級闘争の環の不在、可視化の困難性、階級的矛盾の全面化へ到る環の不在である。それは階級関係の矛盾が、ブルジョア一般やプロレタリアート一般の対立への先験化にも、都市と農村の対立としても、あるいは窮民革命への展望としても、差別→被差別としても、抑圧→被抑圧としても取り出すことが不可能であるということである。

組織→運動の発現を存在構造として把握する時、地区的な政治→社会過程の独自性を、自然過程としても歴史過程として取り出すことの困難性がある。また、この様な闘いが沖繩や、三里塚や、砂川といったように極めて偏在的にか存在しているということである。

われわれはこの間、沖繩→三里塚→砂川での闘いや、諸学園、労働戦線の闘いの中で実践的な闘いの指標として、「契機の獲得」という表現を多く用いてきた。このことに対する原理的な考察は、「叛旗」紙三三三号論文で詳述してきた。ここでは、この実践的な沖繩→三里塚→砂川を中心とする闘いにおける「契機」の獲得が、階級形成、組織形成にどの様に

構造化するのを中心に論及してみよう。

まず、「契機の獲得」ということについての論述の要旨を述べてみよう。

(I)レーニンが「環」ということを語ったとき意味していたようなもの、つまりその点を把握すれば全世界の尖端をなうような(革命を)ものは、特定の焦点、課題一般にはない。

(II)この意味ではベトナム革命戦争も、三里塚も、砂川も、自衛隊解体も、機動隊せん滅も全世界の尖端的課題、革命か反革命かの唯一の環ではない。

(III)このことは、「環」という概念が意味したような全世界の尖端的課題、革命か、反革命かの「環」がないのではなくて、特定の場所、焦点としてはあらわれないが世界のどの地域の革命運動をも貫く「環」(磁場)は存在している。革命主体の原理にあっても、この様な磁場、「環」は世界のどの地域の住民や生活者のうちにもある。

(IV)この様な情況が支配的であるのは、実は、自然史過程としての国家—市民社会の世界的質に規定されているからである。自然史過程としての国家の老化、衰退が国家—市民社会の統合性、総体性を支配者側にとっても、革命的主体にとっても見えないものとして現出させているからである。過渡期世界の成立する故である。

た。具体的領域にあるものとしての沖繩—砂川、社会的領域にあるものとしての三里塚—学園闘争—労働として、さらには、獄中闘争—裁判闘争としてである。

偏在的なこの様な焦点や契機、所謂、政治的焦点や社会的拠点から階級的普遍性を取り出し、これを構造化することを綱領・戦略の創出と位置づけるということであり、この様な形で定位される世界と現実的な世界の対峙を通して、言い換えれば、現実的な世界を成立せしめている現実の国家や、市民社会、小共同性、民衆の負的伝統と対峙し、党や軍や、統一戦線を構造的に成立せしめるということである。かかる過程を過渡性として踏えて、今日この様な現実世界と対峙し、根拠地を形成する力が、より多く観念や、想像力、幻想諸力にその任が集中していることである。

このような時、問題は、今日、支配階級—支配層もこの様な政治過程—社会過程の統合軸を有せぬということである。自然過程総体を、民衆を統合できない、つまり、その様な壁の前に権力もわれわれも直面しているということである。

この時、闘いの構造は、行政的國家のプラグマチックな運行で、民衆の負的な歴史基盤を逆手に支配を貫徹せんとする支配階級との本当に熾烈な闘いをわれわれが強いられているということである。

(V)この様な階級的普遍性は世界としてあるものを自己にとりこみ構造化せぬことは自己の存在は成立しない。また自己の原理に世界が構造化されなければ世界は定立しないということを強いるということである。

(VI)しかも、この様な階級的普遍性は、自然史過程を媒介に特定の契機や、独自性として表象される特定の場所、空間や領域(政治域、社会域)に契機・焦点として偏在して現出するのである。だが、このような契機や独自性や、焦点に何かの特別な意味付与も価値付与も出来ない、なぜならば、この様な偏在性を現象するのは自然史過程として必然過程としてあるからである。

(VII)そうであるが故に、契機や独自性が意味をもつのは、われわれが階級的普遍性を取り出す(意識的)媒介として構造化することによってである。自然過程としてでなく、意識過程としての偏在的な形で存在する階級的普遍性の契機、または焦点を包括し、構造化することで、新たな世界—社会を定位せしめる。このことこそわれわれは、「綱領—戦略」の構造的創出と呼んできた。つまりは、自然史的過程から意識的・自然史への転位として。

われわれは今日の階級闘争の尖端に、階級的普遍性の遍在するところ、焦点、契機は、沖繩—三里塚—砂川であるとし

拠点や焦点が可視化された階級統合のリアリティを自らとする前段において、階級攻防は、われわれの「存在」からの出立を必然化せしめる。所謂、政治的共同性、社会的共同性が個体的契機を包み込む形で進展する地平とは異なって、行くも地獄、帰るも地獄という様な階級闘争の対峙—持久戦が開始しているということである。

自然過程の自己運動にわれわれが飲み込まれるか、支配階級の統合策に敗北するかといった位相で、「存在」攻防をかけてわれわれは戦略、運動—組織の全的駆動に向けて闘い続けねばならないのである。

第二節 「存在」攻防としての獄中—裁判闘争の位相

「ひとが△独房▽のなかに閉じこめられているとき、いちばん辛いことは、社会から隔離されているとか、話をすることも壁や高窓と扉しかないとか、親しい人たちが身近にいないということではないにちがいない。また明日はじぶんの身がどうなるか予測もつかないということでもないような気がする。むしろ、ときどき△しゃべり▽の世界の匂いをはこんでくるさわめきがつたわってくる通路がつけられており、その通路から心的な世界が攪乱されるようになっていることが、いちばん辛いのではないだろうか。

すくなく見積つても、観念の働きのつては、たえず習慣的な挨拶を強いられているにぎやかさより、八独房Vのほう
が不便だという理由はないように思われる。」

吉本隆明「死霊」考

「……もう一つ、きわめて興味ある分析対象があります。監獄規則と看守の心理がそれです。この心理は、一方では監獄規則によって、他方では囚人との接触によって、看守の中に成熟してくるものです。私は、下士官操典とカソリックの公教要理が、大衆組織の分野における人類一千年の経験を集積した二大傑作（まじめな話ですよ）だと思っていました。ところが、たとえ範囲はずっと狭く、性格も特異なものであっても、監獄規則を一枚これに加える必要があると思うようになりました。この規則は、たしかに自己観察の宝を内蔵しています。」

アントニオ・グラムシ ミラノ監獄

一九二七年四月十一日

さて、「存在」攻防の現局面はいかに現出しているのか。これがわれわれの視点である。昨年の三里塚第二次代執行闘争、10・11月沖繩―砂川闘争での非公然闘争の展開は、必然の様に政治組織の非公然政治指導関係への飛躍と、「存在」攻防をもつとも象徴的に展開する地下活動と獄中闘争の位置を問

獄中闘争地下活動の困難性は、一般的に空間性の閉塞感による消耗として本質的ではない。空間性の閉塞性、対他関係の断絶が、観念過程としては、全体構造の解答（生活、対的關係、対組織関係）を必然の様に強いるという意味で過剰な問題意識を醸成するのだ。この時、観念の円環性に勝利し抜くためには、自己の思想的自立を徹底的に問うと共に、政治的共同性―関係構造への固執をいかに貫徹するのかに集中するのである。

書きこことばを書くことも、それを読み理解することも、肉体を動かすことも共に「行為過程」としては等価である。獄中闘争や、地下活動が恣意的なものとしてでなく、苛烈な情況に強いられて成立する時、われわれは、思想的な自立への諸契機も、政治的共同性との関係性も共に背負いこまなければならぬ。このことは何らかの価値でもなければ、当為一般でもない。人が政治過程に登場する時、必然の様に強られるこの二重の契機にわれわれは解答せねばならないのである。おあつらえむきの生活がない様に、その様な闘いや組織的位置などない。われわれは、この様な必然性を、階級闘争の高次化―「存在」攻防の局面で全て引き受けるし、その様に二重の自立をはたさねばならない。

われわれは、日本階級闘争の負的な伝統と、民衆の敗北史

うたということである。

政治指導の非公然性は、対権力関係の対峙―持久を、獄中政治警察との攻防を通して強化、発展させなければならない。この点については内部通達等でこの間、全組織的な獲得目標としてきた。ここでは、非公然活動―獄中闘争の個体的契機、共同性に何を飛躍の糧として要求するのかに言及しよう。

さて、現在、三里塚闘争、11月沖繩闘争で集中した権力の弾圧は、飛躍的なものとして、全ての革命的左翼に加わっている。この時、われわれは、倫理主義や、ロマン主義や、プラグマチズムと異なった地平で、個体的契機と共同性における「存在」の関係把握を明らかにしなければならぬ。

現在、どの様な闘いも恣意的に定立し得えなと同様に、獄中闘争も、地下活動もそうである。連合赤軍の闘いに対して、山岳ゲリラではなくて都市ゲリラなどとうそぶいた輩達は、今日の階級攻防の苛烈さや、闘いが、当為一般や、恣意性一般で成立し得ないことが皆目理解できないのだ。情況が強い今日の困難な「存在」攻防は当然にも個性性においても、共同性においても飛躍を強いている。

獄中闘争、地下活動は、個体的契機においては、必然の様にその持続の構造を問うている。

の二重の側面から権力闘争の対峙―持久戦を展開してゆかねばならない。沖繩―三里塚―砂川の闘いは、われわれはこの闘いの過程の中でこう断言できる。八主体の後退―敗退局面から、対権力との対峙―持久戦を断固として戦いぬけ。合法―非合法、公然―非公然闘争、獄中闘争、地下活動を、何か特別な領域や、恣意的なものとして把握することを拒絶せよ。全てに必然である「存在」攻防の指示向線に沿って個性と共同性の同時的な強化、飛躍を克ら取れと。

さてわれわれは、ここで獄中闘争、裁判闘争の思想的、実践的位相に言及し、且つ政治的共同性の内実を明らかにすることを通して組織的総括―展望の最後としたい。（なお、以下の論文は、「赤燈社」発行の「煉獄の炎」No.5で発表された論文に加筆されたものである。）

さて我々は、何度も現段階に於ける我々の闘いを「存在攻防と持久線―対峙戦」と語ってきた。「存在攻防」というのは、肉体的脆殺―死が戦場の場で現出しているというリアリズム以上に、日常的存在（歴史的存在）としてあり、そこへと集中している幻想（観念）、諸関係として累積されている共同性との日常的闘いのリアリズムが、日常的存在攻防としてあるということである。

例えば我々が綱領というとき、現在のどのような支配階級

「支配層も『民族・国家』という形で体现している(体制、宗教的・国家・自由的国家)諸内容を幻想力、観念力として統括し、統合せんとし、換言すれば、民衆・大衆や小共同性の日常や歴史をくり繰り、かすめ取ることによって連綿たる支配の構造を形造っている時、これへの総体的闘いの方向、実践の別の謂であることを忘れてはならない。

この時、我々の闘いは二つの方向をとるはずである。そのひとつは、諸々の神話(幻想や規範・価値観―倫理感)を拒絶してゆく闘いであり、他のひとつは、我々が支配階級―支配層にかすめ取られない―収奪を超えた新しい共同体―共同性の創出を蓄積してゆくことである。

そうであるが故に、我々の闘いは、ごくありふれた日常生活そのものの様に実践を蓄積してゆくことであり、存在攻防が、非日常一般として(例えば悪しき政治過程化)

場、主体さがし、脱国家、脱体制へと落とし込められ、そこで支配階級に練り込まれてゆくことを超えるということである。

「持久戦―対峙戦」というのは、戦略的、つまり具体的階級闘争の具体的発現の変容局面をさすのであり、逆接的な闘いの主体的方法論である。69年階級までの中央権力闘争―マッセンストライキ、軍事攻防が社会、政治的拠点闘争へ変容してゆく過程での闘いの方向性なのである。

我々が民族―世界、国家―市民社会空間の転覆、旧来の共同性の転質と語ってきたのは以上の視点を切開する指示向線に、つまりは、近代が表象するもつとも普遍的な支配階級の支配の環―対外的には民族円家として、対内的には政治的國家として―を思想的にも、実践的にも日常性の裡に越える。これが「存在攻防、持久―対峙戦」の内実である。

さて、我々は、ここで獄中闘争―裁判闘争の現段階の位相の解明、それに向けたいくつかの任務課題を明らかにしよう。勿論、前述した内容は、もつとも根底的に獄中―裁判の内実に顕在化している。それは何か?ここから始めるとしよう。

獄中―裁判闘争の核心は国家批判である。このテーゼは本質的であり、依然として我々の闘争の基底である。しかし、テーゼがテーゼとして、現実の指針となる為には、国家そのものに現及せねばならない筈である。

我々はまず、政治的國家―市民的社会というものを対象にせねばならない。この時、國家は二重の様装をもつて立ち現われている。ひとつは宗教、法生活の観念性を包括する意味での國家の幻想性であり、他のひとつは支配様式の運用としての法規、規律等々を包括した國家の規範性である。前者は獄中闘争にもつとも象徴的に、集中的に立ち現われ、後者は、裁判闘争にもつとも象徴的―集中的に表象されてい。

多くの同志が指摘している様に、獄中―公判をワンセットとして、総体的に國家批判をはたさんとする意図は全面的に正しい。しかし、この時、また多くの同志が苦悩を続けている様に、このワンセットを総合する主体的な環、闘いの基軸がいったいどこに存在しているのが我々の最も困難な課題であるということも根本的に正しい。では、いったい何故に、かかる困難性・総体的把握の困難は何に起因しているのか。

① 國家の幻想性が客観的にも本格的に拡散過程に突入し、市民的社會が全面的な爛熟過程に突入しているということである。

② 支配階級―支配層は、國家の衰退過程に対して、それを統合する幻想性の提出を階級統合の「環」として新たに提起することができず、逆に、市民的社會の無政府性・民衆―大衆の倫理なきプラグマチズムを逆手にとって、階級解体―國民総合の上げ底化を、行政権力の肥大化、國家の規範性のプラグマチックな運用ではたさんとするのである。

③ 主体にとっては、「國家」の壁は、幻想性に於いては、極めて不可視なもの、より抑圧的なもの、実体的なものとして映る。

④ この時、主体の側には、規範性の強調の中で、より内外的政治―社会再編を促進する(支配者階級は一日たりと

もこの再編を休むことはできない)支配階級―支配層の実体的な権力構造(暴力装置一般)こそが、國家そのものではないのかという錯覚が生じる。

⑤ この錯覚は、極めて強力な地盤を、この国では成立させているという。日本革命運動の否定的現実が、なお依然として存在していること。政治集団・知識人の不毛性。

⑥ この國の民衆―大衆も、本格的な國家の幻想性に岐立する闘いも、日常的対峙も経ていなければ、蓄積もなく、原理や方途も有していないこと。

この様な与件は、我々が何度も指摘し、止揚せんとしてきた課題であることは周知の事実であるが、これが、眼に見える監獄のコンクリートの壁以上に強固な不可視の壁として我々の前に立ち塞がっているということである。

今日の獄中闘争と裁判闘争が客観的にも、主体的にも分解作用、分離作用を伴って、ワンセットとしての構造的な視座―闘いを不可避に個々のもの、別のものとして現われるのは、以上の諸点に起因している。國家の幻想域の拡散過程―つまりは、國家への民衆―大衆、小共同性、階級のナショナルな統合環の喪失過程は視点を一八〇度転換させれば(逆接的に言えば)國家―市民社會の爛熟であり、マルクス流に表現すればよりゼロシンボルとしての國家の完成としてある。

一方、支配階級—支配層にとっても、このような事態は不断に矛盾を生み、再編の衝動を促すこととなる。例えば、法体系の今日的二潮流と呼ばれる。教育刑主義と応復刑主義というのは、前者が市民社会（国家）の論理の側から、後者が民族（国家）の論理の側から提出されている所以は、実は、国家の二重構造を支配層が使い分けんとする意図であることを我々は見抜くことができる。「思想は裁かないが、行為は裁く」という支配階級の論理が、戦後民主主義の仇花であるとするれば、「思想を裁かなければ国家そのものの否定—止揚を許容することになる」という。国家の自衛衝動は、今日の刑法改悪、地獄法改悪といふ、近代国家形成史に於いて、アジアにその悪名を誇示した日本刑法学的主流であることを我々は忘れてはならない。（この点の実体的分析については、理論作業として残されているが、6/3特集号の立花論文を参照せよ。）

以上の諸点を踏えつつ、我々の思想的—組織的な闘いの方向はどの様に展開すべきであるのか。この間、我々が依ってきた。あるいは批判してきた諸点について若干立入って総括する必要があると考える。

周知の様に、この間我々は「主体的後退戦に於ける闘いの質」「存在攻防」、「持久戦—対峙戦」、「革命の現実性の変容」は自明の自明である。が、何を批判の武器に、どこを我々の団結—結合の軸とするのか。

まず、我々は綱領域の獲得、接近をはたす中から、国家を超越する止揚する闘いを貫徹するというのである。この時、綱領というものは、完結した、文言化された理論ではなくて、国家を串刺しにする我々の共同性の組み替え、観念力—自然力を個的にも共同的にも持続蓄積させるということを意味している。マルクスが「宗教の批判は本質的に終っている」と語ったのは、国家の宗教性からの解放、政治的国家としての国家の完成—ゼロシンボルとしての国家の幻想性のらん熟として透視していたからであり、「宗教批判から始めねばならぬ」と語ったのは、宗教性が市民社会へと降りて来る。つまりは、関係的世界の論理としてその機能—内実を展開する（「ユダヤ人問題」を見よ）ことに對して、その秘密を関係的世界—市民的社會に於ける共同性の変容、くみ方に批判の視座、国家の出生の秘儀を見破ったからである。

我々が、国家の根底的な批判—止揚を目指すとするれば、我々自身の個的な契機や共間的契機が国家にかすめ取られない、国家への上げ底化を拒絶して我々の個的（思想力・想像的・自然力）、共同的（政治的・関係的）な有様・原理・方途を創出するというのである。

過程」等々の綱領的・戦略的・運動論的・組織的内容を發表してきた。（同盟執筆者の意図からいえば獄中の同志を専ら念頭に入れて書いてきたものであることを忘れないでほしい。）獄中—獄外を通じて課題にせねばならないのは、多くの同志諸君が指摘している様に、我々の思想の力が現実の闘いの武器に如何に転化できるのかである。まず個別的な具体的な詳論は後に展開するとして、獄中—裁判闘争—階級闘争を結ぶもの、その様な位相からの我々の主体的な位置の解明をはたすことから始めよう。

我々は、前に、獄中闘争、裁判闘争が前者は中心的に国家の幻想域との闘いであり、後者が専ら国家の規範域との闘いであること。そして、今日に於ける困難性はこの二傾向を闘いの視座に繰り込まんとすれば、前者は不可視なもの、壁の様なものとして立ち現われ、後者は強力な現行法のプラグマチックな運用、抑圧として我々の前に立ち塞ぐと指摘し、その根拠を国家そのものの変容構造（国家の本質性—二重性そのものは変ることがない）、支配階級—支配層の矛盾—壁であるものが、我々、主体にとっても矛盾—壁である様な事態が進行していると述べてきた。

確かに恣意としても、当為としても国家の幻想域、国家の規範域との総体的な闘いを共に展開せねばならないというの誤解を恐れずに述べれば、例えば現行法規の運用を規範性のプラグマチックな適用で支配階級がはたさんとするのは、その様な思想、論理が支配的だからである。「支配者の思想は支配的思想である」というのは「支配的思想は支配者の思想である」ことを裏面にはりつけている。それ故に我々が国家の幻想性、規範性に対峙し、超越するということは、関係に固執し、共同性の組み方が国家にかすめ取られない方途に、我々の共同性の結合の軸を取り出すということである。我々は、それ故に民衆の負的な構造とも断固として、闘わなければならないのである。というのは関係的世界を闘うということである。この時の我々の闘いは、意識的自然を生きる。関係に固執するということであり、政治的共同性の組み方の内、国家を超える幻想—観念を綱領として、共同性の内実に、家族・性・年令—生活域・家族域・職域のあらゆる契機を繰り込むということによった組織—政治的共同性の幻想・規律・倫理を階級形成の視座として具体的契機を獲得してゆくということである。

獄中闘争は、その具体的契機を個的にも共同的にも観念の力として取り出す闘いを貫徹するということである。我々は獄中闘争に価値付与をすることはできない。獄中が特殊であるとすれば、それは我々の恣意を超えて、姿波世界との間に

壁を打ちこまれてしゃ断されているということである。空間的活動、關係的接觸を強いられた形で分断、限定化されているということである。しかし、どの様な具体的な壁も我々の御念力、思想力の飛躍を阻止することはできない。御念や、思想の前に立ち塞がっているのは、国家の幻想性という不可視の壁である。この不可視の壁との闘いは、具体的には、我々の対他關係、家族、対的關係を觀念的な力でくり込み、個的なもの共同的なものの力として組み立てることである。

獄中闘争の本質性は、その様なあらゆる具体的契機を觀念の養分として鈍欲にのみこみ、共同性の内実として投げ返し蓄積させることである。レーニンやトロツキーが「獄中を革命の学校にせよ」と提起したのは文字通り、具体的革命運動の現実過程から権力の恣意であったにしろ隔離された時、いったい我々は「何をなすべきなのか」を提示したのであり、我々は、身体的行為と等価なものとしての觀念的作業―読み、書き、考えることの必然性を我がものとする場所として措定することで解答するということである。

裁判闘争は国家の規範域との非日常性であるが、しかし具體的な闘いである。非日常的な闘いであるというのは、数人の獄中の同志諸君が感性的に心情を吐露している様に、獄中

として射つということである。

第二に、不断に背離する支配の理念（憲法）と現行法規の運用の支配者側の矛盾を徹底的に糾弾するということであり、逆手に取るということである。我々が、この間、「思想」と「行為」、あるいは共同性とは何かという視座を發展させるものとして公判闘争論をより強固に武装するということである。

第三に、情勢のもたらす状況の中で、支配階級の意図する弾圧の内実、何故に我々を跪殺せんとするのかを徹底的に暴露し、支配者側の弾圧の意図を正確に見抜き、そこへ我々の闘いも集中させることである。

第四に、我々主体にとって有利な条件（運用法規に於いても）を逆手に駆使して短期裁判―実刑判決（応服刑主義）を阻止するという闘いを準備し、用意することである。例えば、重罪裁判を長期化するというのは、事案のリアリズムを時間の内に相対化させること、立証の具体化を妨害すること等として考えることができる。

しかし、この時、我々は注意せねばならないのは、権力側―支配層が事案を事案として時間、空間を停止して、そこへ集中して審理を行なうのに対して（検事・判事・弁護人は職能として持続して、機構としても持続する）我々主体の側は、

闘争に於ける国家との具体的には關係との日常的闘いに対するの謂である。

なぜならば、獄中闘争の日常性は、獄中以外のどこに於いても日常的な問題―闘いとして普遍的なのであるからである。歴史的事実としても、直接的な心情としても裁判闘争は、バカバカしい。消耗なものとして我々の眼に映っている（重罪適用を受けているということは別として―例えば永山則夫や金嬉姥の闘いを見よ）しかし、この時、我々が瞠目せねばならないのは、確かに公判は非日常的なものとして我々の眼に映っているとしても、そこに露呈して来る法の規範性の具體的運用は、支配階級―支配層の支配の論理の精華であり、逆説的に述べれば、民衆―大衆の支配的な価値観・倫理観が屈折した発現を早しているということへの洞察である。

国家の幻想性や、規範性が何か倒錯的であるとすれば、共同性や、關係がその様なものとして倒錯しているからである。それ故に、我々の規範性、域との闘いは、なによりもまず倒錯した規範性の論理を粉碎する闘いとして位置づけなければならぬ。それはまず、「そもそも国家そのものが悪である」という先験論から出発するのではなく、支配者側の規範性の論理を不可避に醸成する。あるいは逆説的に許容する民衆―大衆の共同性、關係の逸脱過程を、我々内部の共同性、關係

当の事案以降、時間、空間に於いても相互変容するし、個的にも変容するということである。このことは自然であり、必然であるのに、支配者側は歴史的には極めて部分的な事案の真実の解明として持続する。例えば、メーデ被告が20年後の公判闘争の内で、被告団の団結の統一性を減却作用へと移行させた様に、あるいは、67〜70年に於ける政治闘争の公判がそのエネルギーを消却している様に、我々主体にとっては自然であり、必然である主体の変容がマイナス、負的なものとして在るということである。

このことは、主体にとっては意識的自然を生きる、關係に固執するという視座を、いかに持続的なもの、普遍的なものへと我々が武装できるのか鏡であるということである。この点を公判闘争―裁判闘争の基底に如何に獲得するのかを欠落させた時、公判闘争は、不断に支配階級に繰り込まれるか、主観主義か、プラグマチックな、あるいは觀念的な公判闘争にしかならないことも自明である。

我々は、政治的共同性の内実、持続の根拠という根本的な問題に獄中、裁判闘争の核心を追いこんできたことになる。政治を恣意的にしか把握できない部分や、關係の空白を自由と取り違えている部分が、地獄の様な相貌で進行している苛烈な獄中闘争―裁判闘争の現実に腰を抜かすとしたら、それ

もまた新しい悲喜劇的一幕であろう。我々は、地道な歩みを
一歩一歩押し進める以外には方法を有せぬ。 △完▽

~~~~~  
編 集 後 記  
~~~~~

全国の同志諸君へ理論機関誌『叛旗七号』をお届けする。六号以降二年を経ての漸くの発刊であるが、我々はこの長い時間を思想的に怠慢のまま過ごしてきた訳ではない。我々は71年1月政治機関紙「叛旗」を創刊し☆誇大宣伝とひとりよがりを排し、政治―社会実践上の焦眉の課題を明らかにする☆日本革命思想史、政治思想の現在の「環」等についての論究を掲載する☆各地域、各層活動家の闘争報告、経験交流に紙面を提供するとの三点の編集方針の下に月二回の定期刊行体制を維持してきた。また我々は71年8月に『叛旗6・3政治集会特集号』を、72年7月に『叛旗5・13沖縄討論集会特集号』を発行した。我々が特集号をそれとしてバックナンバーから外したのは、オリジナルな書き下し原稿を主軸に、政治思想の現水準を時代の水圧を突破しうるものとして世に問うという創刊号以来の『叛旗』編集方針を困難ではあれ堅持せんとの意志故である。69年秋期決戦以降の焦点の拡散した情況に耐え得ず、狂い咲きと、いつか来た道への往還に余念のない諸党派に比し、ここに呈示する我々の水準は奈辺にあるか？ 我々は読者諸兄弟の俊敏な判断を期待するものである。

『叛旗7号』は三本の論稿を掲載する。

第一論文神津陽同志の「時間と関係の弁証法」は、副題「権力↓党↓階級の生成と死滅―の根拠と回路を示さんとしたものである。第I章階級闘争の現段階で、戦後世界・社会構造の解体を八国家―市民社会Vの共同性―共同体の統合力喪失から解明し、主体的後退戦下の存在攻防局面を示し、過渡期世界の革命運動の理論的反省の中から、現下の革命の現実性―求心点の所在を闡明した。第II章革命組織の位相と規準では、国家―社会各々の二重性把握にたつて闘いの自然成長性と相対化と止揚の方向を示し、次いで階級関係と規範、政治集団と規準を各々の位相と規準から確定し、最後に組織戦略―路線検討へコメン

『叛 旗』 第 7 号 頒価 400 円
(〒 1 部 50 円、 10 部 以上 無料)

発 行 日 1972 年 12 月 8 日 第 1 版

編 集 者 共産主義者同盟「叛旗」編集委員会

発 行 者 共産主義者同盟 03(362)0149

連 絡 先 東京都新宿区百人町 2-16-8

小林ビル 105 号室 蒼氓社気付

振 替 番 号 東京 162856

